
AYAKA

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AYAKA

【Zコード】

N7793C

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

今をときめく高校生芸能人彩華。とその幼馴染の歌手の悠治。だけど、七年前にその魂は入れ替わつてて・・・その効力が切れる前の大騒動。色々な想いが交錯する中、前代未聞のような、アップテンポのハチャメチャラブコメディー（ライトノベル）です。

#1プロローグ

人は、人の魂を愛するのか？それとも見た目を愛するのか？

大事な人は、一目惚れでも良いのか？それとも、長く連れ添つた者を言うのか？

秘密を共有する者同士は愛しあえるのか？それとも、それは不可能なのか？

誰かを好きになるのに理由がいるのか？それとも理由は必要では無いのか？

永久に友人でいなければならぬのか？それとも愛は芽生えるのか？

その答えは誰にも出せないから、この世は楽しい。そう、いつも誰かを求めていた。求める事を忘れる事は出来ないのである。

ミルク『今日、発売した雑誌カンロの彩華見たかい？』

ケイ『勿論見たぜ！最高に良い女だよな！あんなイケてる美少女いたらさ、是非彼女になつてもいいもんダゼ』

カイ『だよな～グラビアや画像で見るだけってのは勿体無いぜ？身近にいたらさ、モノにしたくなるつてもんよ～』

ここ、彩華公認ファンクラブのホームページでは、毎日多数のファンが集う。彩華は十歳の折り、モデルデビューした後。演劇、テレビドラマと多才に実力を發揮している今光り輝く一押しの芸能人。その上幸運な事に、大手プロダクションでプロデューサーとして活躍する父と、映画を主として仕事をしている名女優の母親を持つサ

ラブレット。はつきり言つて、親の七光りも有りバックアップも伊達ではない。

しかし、そんな彩華にも或る秘密が有つた。

彩華『みんな、ありがとう!』

今迄、彩華は一度としてこのホームページに書き込みなどした事は無かつた。よくこのサイトを訪れては、自らのポジションを冷静に把握して来た彩華ではあつたが、やはり、こういう場に降臨してしまつたら有らぬ話題が起こつてしまつ。だから、今迄は自らの身の振り方を考えて慎重に行動して来た。しかし、ある事情を抱えて彩華はついに降臨してしまつたのである。

今日は六月三十日。後一ヶ月後には！その事を考えながら……そして再び書き込みを行つた。

彩華『実は今迄このサイトには来てたの。そして重大なお知らせが有ります。その具体的な事は明日の9チャンネルのお昼のワイドショーで明らかになるけど、興味が有つたら是非見てね！じゃあこの辺で失礼します！グッドラック！』

その後に書き込まれた掲示板の内容は、突然の本人自らの書き込みなのか？それともガセか？その話題で多くの者達が賑わつた。それほど大変な騒動になつていながら、それを楽しむように見ながら、彩華はほくそ笑んでいたが、『カタリ』という物音が聴こえ、慌ててノートパソコンの電源を切つた。

日課になつている訪問者が彩華の一階のベランダに現れたからである。『ガラリ』と窓が開かれる。すると、ちょっと癖のある茶色い柔らかそうな髪を搔き上げ、細身の眼鏡を掛けた一人の少年が彩華の整理された自室に入り込んで來た。

イケ面と言うには少し違うが、お姉さん辺りに好まれそうな甘いマスクをしている。

「何やつてたの？」

こんな時間に、女の子の部屋に上がり込む男つてのは問題では有るが、それも仕方ない事であつた。そしてちょっと、女言葉で不思

議なテノールの声が彩華に話し掛けた。

「別に？」

彩華は、先程迄の事を思い返しながら笑った。これからする事が……明日の昼に何が宣言されるのか？この少年にどういう印象を与えるのか？その事を考えながら、より、ケタケタと笑つた。

「何か隠してるでしょ！」

少年は何か苛立つと言つよりは、ちょっと心配げなそんな表情で問い合わせた。でも、当の彩華は笑つて誤魔化した。

「悠治は、心配性だね～」

彩華は相変わらず融通がきかない悠治と言つその少年、にそんなところに突つ立つてないで。とベッドに座るように指示した。彩華と悠治の背の高さは同じ。同じ目線で話が出来る。

「もう！茶化さないで！それに、忘れないでちょうどい。私達は魂が入れ代わつていて、本当は私が彩華で、あなたが悠治なんだから！二人でいる時くらい自分達をちゃんと位置付けたいのよ！」

ちょっとヒステリックに言つてゐるみたいだが、実の所精神はかなり纖細でか弱い。それがこの悠治の短所だとも思える。そして、重大な秘密とは、悠治が彩華で、彩華が悠治と言つ事である。

どうしてこんな事になつたのか？それは……

「へいへい、分かつてるよ。彩華が言いたい事はさ？でも、容姿は、僕が彩華で君は悠治だ」

不自然だが突然男言葉に戻る。透き通るようなソプラノの声。そう、彩華の中には悠治の性格はこうだ。あけっぴろげで、何にも真正面から接する。その中身とは裏腹に容姿的には、かなりの美女。色白のモデル体型で、手足が一般的日本人の体型より長い。そして、切れ長の瞳は知的感を出している。その上、長いストレートの黒髪がキューティクルで、光の下では 天使の輪を幾重にも形どるくらい艶がある。

そんな少女であつても魂は男。何がどうしてこうなつたのか？そしてこの一人、彩華と悠治の関係は？それは、今から7年前に遡る

事じたるのである。

#1 プロローグ（後書き）

初めまして。こちらでの投稿は初めての翼です。

愛の形。

色々な形も有つて良いかなと思い、書き始めた作品でもあつたりします。

魂の入れ替わりと言う物で、人の心を何処まで客観的に且つ主観的に表現できるか？

また、二人（彩華と悠治）の気持ちがこれからどう変わっていくのか？

そう言うものも含めて描いて行きます。

かなりハチャメチャな展開ですが、楽しんでいただければ嬉しいです。

もし宜しければ、ちょこっと感想など頂けると嬉しかったり。

これから宜しくお願ひいたします m(- -) m

7年前。それは、彩華9歳、悠治8歳の七月三十一日の事であった。今でも脳裏を駆け巡るくらいハッキリと思い出す事ができる。悠治の誕生日を次の日と迎えていたのだから。

その時は今のように魂は入れ替わってはいなかつた。隣同士の御近所様。そして、同じ小学校に通つていた。彩華の父も母も多忙で、隣の悠治の家の御厄介になつていた。何でも一緒に行動する事で、二人は仲良し姉弟のように、育つて來た。

生まれた時からその事情は変わらない。それだけ一緒に接していれば、周りの者達は何も申し分が無かつた。彩華の家庭事情を汲む者を考えると、悠治を羨む者がいないとは言えないが……

それでも暗黙の了解のように二人の仲を翻す事が出来ない事だけは事実であつた。

そして当時、悠治は空手を習う為に道場に通つていた。自らの意志と、喧嘩で負けたく無いと言う思いが強かつたからである。小柄だけど性格は大変負けず嫌いで荒っぽい。可愛い外見からは想像出来ないけれど。そして、それに便乗するように、彩華も悠治と同じ道場に通つていた。この年頃の女の子としては異例な習い事だつたが、悠治と同じく行動するのであれば……ということ、自らも少し身体を鍛えたいと言う思いがあつたのかもしれない。

両親は、その意向を飲んで許可した。悠治とは相反して彩華は身体が少し弱い。それならば、こういう経験をしておいても良いかも知れないと軽く考えていたのである。少し自律的に考え方が弱く、自ら進んで行動するような子供では無かつた為、それを自分でも何かしたいなと言う気持ちはあつた。だから、毎週水曜日のこの日にいつものように一人は道場に足を運んでいた。

いつもの稽古は別段何も変わらなかつた。悠治は、この年で既に全国の少年大会に名前を轟かせる程空手の腕は上がつていた。彩華は

それを凄く褒めていた。自分には無いモノを手に入れている悠治が誇りであつたからである。しかし、その帰り道に一人の魂が入れ替わる重大な事件が起こつたのである。

帰り道は、いつもの道。何も変わる事の無い道。しかしこの日、悠治はかなりお腹を空かせていた。稽古で体力を使い果たした感じだつた。だけど、手許には何か食べ物を買う為のお金は無かつた。悠治の家は彩華の家とは異なり、ごく一般の家庭環境。サラリーマンの父と、専業主婦の母親が、悠治の生れ育つた環境であった。だから、渡されているお小遣いは知れている。そして、運悪く今月分のお小遣いは既に底をついていたのであつた。

そんな時、ふと道脇の祠に収まっているお地蔵様の前に備えられている団子が目に入ったのである。事実、美味そうに感じられた。何故か引き付けられるように、操られるかのようにフラフラとその地蔵様の前に歩を進めた。彩華は何をするつもりなんだろう?とその悠治の行動を見守つていたが、御供えされている、供物を手に取つている悠治に気が付き、

「何をしてるの!」

と、駆け出して止めようとした。しかし、悠治はその手を払い除け、一個団子を口に放り込んだ。そして、

「彩華~お前も腹減ってるだろ?食えよ!ほらっ!」

よほどお腹が空いていたのか?少し歛臭い味はしたが、美味しかつた。そして、彩華にも一つと思って有無を言わさないよう、悠治は彩華の口にまた一つ鷙掴み取つた団子を放り込んだ。彩華は突然の事に、その団子を飲み込んでしまつた。その瞬間だつた。いきなり頭上に……天に黒雲が立ち籠め、雷が一人の下に落ちたのである。

「愚か者め!」

確かにそんな言葉が頭を過つた。そして、電撃が一人を痺れさせた。死ぬかと思う程のショックが二人を包み込んだ。そして同時に二人は地面に倒れ込んだ。意識を失つたのである。

暫くの間その状態が続いた。すると、再び目を開けた時、そのショ

ツク状態から解放されたのである。

「？」

倒れ込んでいた二人は同時に目を醒ました。しかし、二人はお互いを見た時、合わせ鏡を見ているかのように、放心状態に陥つたのである。

「私は、誰？」

「僕は、誰？」

こうして、今の状況下のよう二人の魂が入れ替わったのである。

#3 約束

「毎日、あのお地蔵様の所には行つてゐるの？ちゃんと行かないとい、私達いつまでもここのまま人生生きて行くのなんて考へたくも無い！」

彩華は、真剣に悠治に向き合つて、毎日の動向を確認しあつている。倒れた時、耳に流れ込んだ言葉。それはお地蔵様の駆け引きだつた。天から罰されたこの仕打ちを、一人は意識のない頭できちんと聴いていた。

そう、お地蔵様からの要求は三つあつた。

毎日欠かさず、供物を捧げる事。それは何でも良かった。とにかく、それを繰ければ、二人の魂を元に戻すとそう耳に焼きついている。そして、二つ目に一人に囁いた言葉。

7年。

それが最終期間だと言う事だつた。しかし、その事をあの時彩華であつた悠治は何故か覚えていなかつた。その事を覚えているのは、今の彩華。そう、制限のある約束。それを知つているのは、今の彩華なのである。そして最後にもう一つ……

「もちろんさ。それに間違つても、自分が悠治だつて事は言わないようにしておるしさ。安心しなよ？」

そう、この事は誰にも言えない秘密。それが7年の日々を作り上げている。誰かに知られたら最期。一生このままなのである。

「信用して無い訳では無いけど……私達は只でさえ芸能人なんだよ？いつ、この事がバレでもしたら……」

悠治の容貌をしている彩華も実は芸能人。ジョイズと書つコニーシトで歌手をしている。それは、入れ替わりが済んだ後でも、悠治がちゃんと自分の位置を確保したかった為である。だから、二人が入れ替わった後、悠治は彩華に歌手になる為の一般募集のオーディションを無理矢理受けさせた。

悠治は芸能界で働きたかった。そして、歌手志望であった。空手を習っている傍ら、ピアノも嗜んでいた。その為、音感やリズム感は良い。そして、夢は歌手。いつの日か、大きなステージできらびやかなライトの下で唄を歌いたい。ある意味目立ちたがり屋なのかも知れない。だから、彩華のこの身体でモデルと言う仕事をしている内に色々勉強しておきたかった。そして、演劇やテレビドラマで培いながら、日々歌手になった時の事を思い浮かべながら、芸能界に慣れておくのは手つ取り早いと思つていた。

それは今、叶わないけど、それが夢であった。

それとは相反して、彩華は平凡な生活を送つて大好きな人と巡り逢い、そして結婚する事を望んでいた。

親の七光りのような仕事はしたく無い。それが望みだつた。それは多分、両親の仕事に対する情熱を幼い頃から見て来た為と、その中で独り寂しい想いをして来たせいでもあつた。温かい家庭を持つのが夢であった。

それに輪をかけて、悠沿の家で生活している内により気持ちはそちらに流れ込んでいた。そう、一人は全く異なつた考え方をしている。彩華は、魂が元に戻つたら、直ぐに芸能界から足を洗うつもりだし、それに実はもう好きな人がいる。それは今はどうしてもその本人に伝える事が出来ない相手。同じユニットを組んでいる、英一と言う青年である。

心は女でも、身体は悠治。つまり、どうやつても想いを伝える事が出来ない相手な訳で、毎日仕事で逢う度に、喉から声が出そうな気分で接している。好きなんです。と……

その事は、悠治にも分かっていた。直接、彩華から事情を聞いていたからであった。でも、悠治はその事が面白く無かつた。それは、実は悠治が彩華を好きだ。と言つ気持ちがそうさせてている。複雑すぎる、想いの交錯がそこに有つた。空手を習い始めたのも、実は、彩華と一緒に遊ぶ為の工作。一人で行動する事に文句を言つ者はいなかつたが、それでもいつどんな苛めを受けても耐えられる様にな

つておきたかつたからであつた。

しかし、彩華は、まさかそんな気持ちを悠治が抱いているとは微塵も思つていなかつた。ただの幼馴染み位にしか思つていなかつた。だから何でも悠治には話せた。そして、英一の事も応援してくれるに違いないと、気軽に話したのである。

その時の悠治の気持ちは？そう、憤慨する訳にも行かなかつた。嫉妬と言う気持ちは有りはしたが……でも、告白する気にはなれなかつた。振られて、自らより去つて行く彩華を考えたくは無かつた為である。

だから一つの賭けに出たのであつた。たつた一ヶ月の賭け。それを最期に彩華を諦める事ができるか？それとも振り向かせる事が出来るか？その結果は、一ヶ月後。出来れば自分の気持ちを知つて欲しい。でも、彩華の想いは一途。不器用だし、引っ込み思案だし……実る恋がどうか怪しいが……

「大丈夫だよ。分かつてる。絶対バレない様にするつて！約束するぜ？」

今は安心して寝かし就けなければならぬ。彩華に負担が行くようにはしたくは無いが、でも、もう、悠治の気持ちは揺るがない。明日からは戦闘だ！と分かつている。これが、彩華の為だし自分自身の為だつた。

「うん。じゃあ、おやすみ……悠治」

彩華は、ちょっと不安そつではあつたが、自分の部屋に戻ろうとする。

「良い夢見ろよな？おやすみ彩華」

彩華が悠治として芸能界に足を運んだのは、強制的な事でもあった。実際、御団子を口に放り込んだ悪の張本人だとしても……未来を、悠治の夢を押し切る事は彩華の性格からは出来なかつた。それに、悠治自身の夢は小さい頃から知つていた。

何故お互いが違う環境で生まれて来なかつたんだろう？想い望む環境に？そう考へても、今さらどうしようもない。だけど、悠治と言うキャラを演じる事で、何となくこういう環境を楽ししまなかつたとは言えなかつた。

実際嬉しかつた。

特に、オーディションで出逢つた、英一と言つ存在は彩華を向上させてくれた人物だつた。

オーディションを受けたのは、一人の魂が入れ替わつてから三年後の十一歳の時だつた。何に対しても消極的だつた彩華がこんな大舞台に立つ事は、凄く無謀な事だつた。まず、書類に関しては難無く通過。悠治の口添えも有り書かれた書類は、一次審査を軽くパスした訳である。

しかし、その後の二次審査の実技試験は、人前での面接のようなモノであり、彩華を不安にさせた。悠治に言わせれば、そんなモノ適当にやれば良いんだよ。だつたが、適當と言われても？番号札3番を渡され緊張している彩華には、もう何を喋れば良いのか？そんなこと判るはずも無かつた。

そんな緊張している時、自分の出番を待つていたが、緊張し過ぎてトイレに行きたくなり、慌てて駆け出した。しかし、その駆け出した足が、同じく緊張していたオーディションを受けに来た者の足に引っ掛かり、なんと顔から思いつきり転んでしまつたのである。本当だつたら、足を出していたその者が助け起すくらいするものだが、それ所じやないと無視された。端の方では面白可笑しく笑つて

いる者の声をえ聽こえた。しかし、そんな悠治に肩を貸してくれた者がいたのである。実際こんな場面で……自分以外は敵だと認識しているだろうそんな時に、当事者以外で優しく助け起してくれる者なんていないのである。

「大丈夫か？ 緊張してるのかい？ あ、これ……」

ぶつ倒れていた彩華は助け起してくれたその人物を目を丸くして見た。黒髪が捌けた感じで目つきは少し三白眼。一見恐いイメージはあつたが、しかし、この時の笑顔は最高に優しくて……立ち上がると自分よりタツパがあつて、男らしい。きっと二つか三つ年上だろう。包容力が有る感じに見えた。

一眼見て良い人なんだなってそう思えた。だから、素直にお礼が言えた。

「あ、ありがとう。こういう所つて、緊張するんだよ……経験ないしさ……」

「経験なんてみんな無いに等しいよ。素人ばかりのオーディションだしね。どつかのプロダクションに入ってる奴なんて、数えるくらいだ。そういう俺も一般応募だしね……で、これさ……転んだ拍子に飛んだぜ？」

白い小さな手作りのお守り袋。その中に入っていた白い小ウサギのぬいぐるみが袋の入り口から顔を覗かせている。その事に気が付き、彩華は真っ赤になつてそのお守り袋を早くしまわないと『アワアワ』と慌てて奪い返した。

「見た？」

「あ……悪い。見たけど……可愛いお守りだな？ 少女趣味なのかい？ 何だか面白い奴だな」

頭をポリポリと搔きながら、少しばにかんで答える。その仕種がとても可愛く見える、と思つた。端正な顔なのにだ。一瞬馬鹿にされるかも知れないかもつて思つたから、

「可愛い？ 面白い？」

彩華は余計に真っ赤になつた。曲がりなりしも今の彩華は悠治の姿

をしている男だ。そつ言つ者に対して可愛いと言われた。それに少女趣味……

確かに可愛い物が好きな彩華ではあつたが、そつ言つ所を見られる訳にはいかなかつた。入れ替わりが完了した時、勘違いで悠治はそんな趣味を持つていてるなんて事を周りに知られたく無いだろうから。

「……君は歌手志望?」

その人物は、笑顔を絶やさず話を逸らせた。バツが悪いので話をかえたのかも知れない。そう考へると、彩華ももうその事に触れなかつた。そうする方が自然だし、人のプライバシーに触れない様に気づかつてくれたのが少し嬉しかつたからである。

そして、歌手志望だからこのオーディションに応募した。と当然の事を伝えた。その頃にはもう、トイレに行きたいと思う事なく緊張感さえも消え失せていた。

「え? うん。 そうだけど……君は?」

「俺は、実は役者志望。でも、姉貴が勝手に応募したんだよな。このオーディションに。大体姉貴の魂胆は見え見えなんだけどね?」少し赤くなつて笑つて答えた。彩華はこの青年を意外に照れ屋なのがなつて思つた。

「そりなんだ……僕もちょっと同じような所、有るんだけどね……」自分とさほど変わらない動機なんだと思つた。自分の場合は、芸能界には無関心だけど、悠治の為にこのオーディションを受けている訳ではあるが。 そうか、 そう言つ理由で応募してゐるんだ。と思うと、少し肩の荷が下りた気がする。

「君の名前は? 俺は英二つて言つんだ」

「あつ。僕は、あ……、悠治」

「じゃあ、また三次審査で会える事を祈るよ。もう出番だろ? またな!」

英二と名乗つたその青年は、まだ先の番号札を引つたげてその場を立ち去つて行つた。そして、この後二人とも合格する事となる。運命の悪戯か? 今ではジョイズと言つコニーシトで活躍していた。

#5ゲーム

「『』の後どうする?」

英二と彩華は共に歌番の録画を終え、事務所へと帰る途中だった。二人の所属するプロダクションは、そんなに有名では無い。どちらかと言うと弱小プロダクションだ。でも、この頃売れて来た一人の活躍で、うなぎ上りになつて来てその名も大分知られて来た。ジョイズ様々である。

「そうだね。何か食べてから帰ろつか?お腹空かない?」

彩華は、昨日の悠治の意味ありげな笑いをまだ気にしており、朝御飯もろくに喉を通らなかつた。何か企んでいるに違いないとそう睨んでいた。ああいう笑いをしている時の悠治は、絶対何か隠している事は判り切つている。そんな少しピリピリしている彩華を感じ取つていたのか、英二は気を利かせて、

「そんじゃあ、そこのファーストフード屋で食つてくれ」「
と、言ってくれた。芸能生活四年目。でも、まだまだひよつ『』の一
人だから、未だにこんな感じの食事。

だけど彩華はそれでも良かつた。一人でいられる時間が嬉しかつた。内気な悠治に対し、英二は何でも気づかつて接してくれる。そして、心配事があると、背中を押してくれる。時にはボケ突つ込みのような漫才をしているかのような二人。しかしこの時、その英二の口からとんでもない事を聞かされたのである。

「確かに悠治つて、彩華の幼馴染みなんだつたよな?それに学校も一緒?」

「そ…………うだけど?」

ドキンと心が鳴つた。まさか自分の事を言われているのかと思つたからである。

「昨夜から、彩華ファンが騒いでるぜ?今日のワideonシヨーで特別告知をやらかすつてさ」

「え？」

彩華には何の事だか解らなかつた。そのせいで思わず、ハンバーガーの具を『ボトリ』と落としてしまつた。

「知らなかつたのか？」

「何？何の事さ？何をやらかすつて？」

彩華は焦つた。何も聞かされて無い。でも、思い当たる事は有る。昨日の不審な悠治の行動を考えてみたら……

「今日の9チャンネルの昼のワイドショーで、明らかになるとからないとか？そんな事言つてたようだぜ？」

それを聞いた彩華は、スクッと立ち上がり、身近に時計が無いか探し。それを見ていた英一は彩華がはめている腕時計を指し示して、「これは何だい？今は2時だよ。どうした？気になるのか？」

ちょっと訝しげに英一は慌てている悠治を見た。

「あ、うん。その……やはり幼馴染みだしさ……後一時間有るよね？これ早く食べてさ、事務所のテレビ見ない？」

落ち着かない悠治を見て英一は、フーッと息を吐き出すと、

「分かつたから、今は集中して飯食えよ。ほら、こぼしてるぜ？」

『ポトポト』落としてしまつた具を指差しながら呆れて見てはいるが、悠治のそう言う所が可愛いとでも言わんばかりに、肘杖ついてはにかんでいる。

「あ、本当だ……」めんみつともなくつて！」

彩華は真っ赤になつて自分の注意力散漫さを恥じたが、英一は非難せずに笑つている事に気が付き、何だかホッとした。

こんな風に接してくれると有り難い。そして、それが彩華にとつてまた好きになる要因だつた。そして、食べ終えた二人は、その場を後にした。

事務所に戻つた二人は、彩華を先頭にテレビが有る部屋を借り切つた。しかし噂を聞き付けていた事務所の者や、その他のタレント達も駆け込んで来て野次馬の輪が出来上がつた。

そしてついにその時刻が来てテレビは、ワイドショーに切り替わった。

「今日は、突然に番組の内容を変更しまして、彩華特集を組んでおります」

女性アナウンサーが、特別呼び寄せていた彩華に顔を向ける。笑顔でこれから何を話してもらえるのか？それを期待しているようだった。

テレビの中の彩華はそれを営業スマイルで受け答えするようにしているようだが、テレビの前に陣取つていてる彩華は、気が氣で無かつた。何を言つつもりなんだろう？それが頭の中を駆け巡つていた。変な事を言わないかと不安だった。

まさか……バラすつもりじゃ？

「では、彩華さん？宣言して下さい！」

男性アナウンサーも微笑んで彩華の言葉を待つていてるようだった。「では、この場を持ちまして、宣言させて頂きます」かじり付いて彩華は悠治の言葉を待つていて。どうか変な事を言わないように！…という祈りの気持ちばかりだった。

「今日から一ヶ月間、私、彩華は全ての仕事スケジュールをキャンセルします。そして、一つのゲームをしようと思つております」にこやかにそして、意味ありげに微笑んでいた。

「ゲーム……ですか？」

女性アナウンサーは、不思議そつに彩華を覗き込むようにして見ていた。

「そうです。この一ヶ月間で私を見つけ出し、私の唇を奪つた方に永久保存版の恋人になつてもらつと言つ無謀かつ極悪なゲームです」

「！」

これには、テレビの前の彩華、アナウンサー、そして誰もの口からも言葉が出なかつた。

「冗談じゃ有りませんよ？本気のゲームです。言つておきますが、

私は空手も柔道も黒帯です。それを肝に命じてこのゲームに参加してくれる方を応募しております！そして、こちらで細かいルールを決めさせて頂きました。それは次の事項です

誰も、一言も言わずにその説明を聞いていた。こんな状態で、芸能界に新風を巻き起こす者が出るとは……しかも、彩華みたいな、見た目から想像する事が出来ないような子が？みんな目を丸くして見ていた。

「私は変装しますし、実家には帰りません。もちろん情報を流す事もしませんし、捜し出してもらわなければなりませんよ？そして、一ヶ月間どんな事をしても消す事が出来ないマジックペンを持つて行動します。そのマジックで顔に『×』を付けられた者は、その時点でゲームオーバーとなり、一度とゲームには参加は出来ません。そして、目的が達成出来た暁には必ず約束を果たします。それではゲーム、スタート！」

彩華はそれを合図に席を外し、スタスタとスタジオを去ってしまった。

「…」

悠治は何を考えているんだろうか？と彩華は思つた。そんな事をしたら、魂が戻つた時、その最悪な状況下にいる私はその者と一生共にしなければならないと言う事ではないか？沸々と悠治に対する怒りが沸き起つっていた。今から、スタジオへと駆け込んでやろうかとさえ思い立ち、腰を上げかけた時、

「悠治？彩華のところに行くつもりなのか？」

英二が、さつと彩華の腕を取つた。

「あんな事許せる訳ないじゃないか！よほどの阿呆しか考え付かないようなことするなんて！」

憤慨している悠治を落ち着かせる事が出来ない事を悟つたのか、英二は、

「じゃあ、行つてくれれば良い。だけど、きっとこのまま彩華は失踪するつもりじゃないかな？今からじゃ間に合わない。彼女は賢いし計算高い。自らをそつそつ安く売つたりする事はないと思うけど？」

この言葉に、彩華はグッと言葉を飲み込んだ。確かにそうだ。何の勝算も無しにこんな事を言い出す奴じゃない事は分かつている。きっと何か目的があつてこつ言つ事を言い出したに違いない。だけど目的は？彩華には解らなかつた。前代未聞。芸能界から追放されても決しておかしくないゲーム。

それを今から行うと言うバカげた発想。そんな事を、悠治がする訳がない。と思いたい。すると、彩華は側のソファーにドカッと腰を掛けた。

「英一ってさ？彩華のこと好き？」

その問いは、本音を訊きたいと思つた訳ではなかつた。何となく口を付いて出た言葉だつた。

「うーん。美人は苦手なんだけど。彼女の賢さは凄いなつて思うよ。周りを引き込む力つてのは、憧れだね。天性の素質つてのを持ち合わせていると思う……だけど、性格を分析すると、悠治の性格の方が好きかな？俺的には……」

『悠治の性格の方が好きかな』

彩華は一瞬顔から火が出そうなくらい恥ずかしくなつた。

「『めん。変な事訊いた……』

「謝んなよ……」しつちが照れる。でも、このままにしておきたくはないんだろう？悠沿？……悠治、実の所は彩華のことが好きなんだろ？

「え？」

彩華は否定したかつたが出来ない。好きな人は、英一だつて言えれば楽だけど、この状態じゃ、言えない。でもなんでそんな風にとらえられているんだろう？私が、悠治を好きだなんて？そんなに気に

掛けている所を英二に見せて来た事があつただろうか？

「幼馴染みだよ。好きって言う感情より、心配している父親みたいなもんだと、思う……」

自信なさげにそんな事を言ってみせた。完璧に否定は出来ないし。肯定も出来ない。だつて、悠治の事を特別な意味で好きだと云う感情は無いのだから。だから、一番納得が行く言葉を選んだような気がする。

でも、このパニクッている頭でよく思い付いたものだと自分を褒めたい気分であった。

「……………そうだね。彩華のことだし、何とかしていいよね…………」

そして、視線をテレビに移した。もう、彩華の特集どころか、現場は速やかに立ち去つた彩華の事を批評や批判している番組へと詣が変わっていた。

一瞬の出来事で、番組を建て直す事が出来ないので、番組はそのまま垂れ流し状態であつた。悠治は今頃何処にいるんだろう？
彩華は、その行方を調べなきやならない。その事だけは、確かなのであった。

その頃の悠治は、スタジオを飛び出し、直ぐさま私服を放り込んでおいた駅構内のロッカールームから荷物を抱えて渋谷の街を闊歩する事にした。

堂々と変装して誰にも分からぬ様に、渋谷の街を徘徊する楽しみなんて滅多に味わえない。と嬉し気に思つていた。これが開放感つてものだとでも言わんばかりに色々な所を見て歩いた。そして街頭の液晶パネルで放送されている、今自分が行つているゲームの批判がされている事を知り、また嬉しくなった。

「これくらいやつておけば、彩華が引退してもおかしく無いだろ？」

独りゴチながら、液晶画面に見入つていてる人々の間をかいぐぐり、歩いた。すると、何処もかしこも彩華のポスターが貼られている事に気が付く。へゝと言う感じで周りを見渡した。そして、ある一点に……その壁に並んだ彩華のポスター前でそれを眺めながら肩を震わせながら立ち尽くしている、一人の女の子に注目した。

小柄なのはすぐに分かつた。自らの背より、二十センチは違うであろう？ 中学生では無かるうかと思つた。

今日は学校が休みなんだろうか？ そんなはずは無いんだけどな、曜日を確認する。今日は、月曜日。時間的にはまあ、学校帰りと言ふ事も頷ける。しかし、何あんな所で突つ立つているんだろうか？ 悠治は、気になつてその少女の動向をじつくり観察する事に決めた。ま、時間潰しにはもつてこいの人間ウォッチングである。

すると、二十分くらいの時間が過ぎた。しかし、少女は依然とそのまま突つ立つていてる。悠治は余計に気になつてきた。何しているんだろう？ 彩華のファンなんだろうか？ しかしそんな感じは見受けられない。

着ている服はゴスロリ系の黒いフリルのワンピース。シックでスト

イックなスタイルが売りの、彩華が着そうに無い系統の服装であった。そして、三十分が過ぎる頃、やつと身体を動かした。動かしたというか、鞄から何かを取り出すと言った感じであった。そして、ポスターに向つて、何かを書き始めたのである。

何を書いてるんだろう？

今まで道端に座り込んで見ていた悠治ではあつたが興味深くスタスマタと歩き出す。そしてその少女の横まで歩いた。

しかしその事に少女は気が付いて無かった。そして悠治はちらりと覗き込んだ。

『バカ女』

ひとことポスターの端にマジックペンで小さく書き込んでいた。悠治はその通りだと思つてクククと軽く笑つた。そして、その横にあるジエイズのポスターに気が付き、今度は悠治が、ゲームで使用する為に備えていたマジックペンで英一の顔に思いの丈の悪戯書きをしてやつた。

「あのや、 Irene くらいやんないとね～落書きつてのはー思いの丈を込めてトコトンやらないとねえ～？」

少女に聞こえるように、悠治は言つてペンをポンポン手の平で跳ね上げながら、この場を立ち去つとした。満足だった。

少女は、驚きの表情で悠治を見たが、こんなに悪意の込められていく落書きをする。サングラスをして深々と帽子を被つている怪しくスタイルの良いお姉さんを横で見てしまつた為、放心状態だった。しかも女性が、英一といつ、今、人気が出ているユーチュートの男性に対するこんな事をするのはおかしく感じられた。この英一を知つているのか？それとも何かの恨みでもあるのか？だから立ち去つて行く悠治に向つて声を掛けようとした。

「あ、あの、待つて！」

後から通り過ぎてゆく……ポスターを見て過ぎ去つて行こうとする若い女の子達が、英一への落書きに気が付き立ち止まって非難している中、呼び止めようとした。が、突然後方から走り込んで来た一

団にぶつかり、その少女は思いつきり壁に激突してしまった。そして、その拍子に支えようとした身体に負担が掛かり、足を挫いてしまったのである。

「な、なんなのこの連中は！」

少女は、痛い足首を座り込んで摩りながら、突然今まで落書きをしていたその女性を取り囲むように現れた一団を、見守っていた。当の悠治は、もうこの一団がどう言う者達か察しが付いていた。ゲームに参加した者達であるのだと……しかし、見渡した限りかなり色んな年齢層である事に気が付き呆れてしまった。

「あら、一番乗りの一団かしら？ 激しいわね～どうやってここにいる事がばれたんでしょう？」

少し茶化してみるが、この人数は少ししんどいかなと考えてしまつた。しかも、こんな渋谷のど真ん中で事を起せば、また一段と参加者が増えるだろ？ でも、逃げるのはしゃくだなと思つた悠治は、張り切つたようだ。

「じゃあ、ショータイム！ レッツ・ゴー！」

それを合図に突然悠治に飛びかかる一団。

少女は、何が始まつたんだ？ と見ていたが、サングラスを外し、激しく動く事で帽子がずり落ち長い黒髪が露になつた悠治を見て、

「これつもしかして……彩華の？」

間近で見ていてハッキリとその女性がお騒がせ芸能界人と化した彩華だと知り、呆気に取られた。

眺めていると、素早い身のこなしで、挑戦者である一団の一人一人の顔に『×』マークを付けて行く。

皆、自分の事しか考えて無い為、押したり引いたりしながらの乱闘が継り広げられている。よつてこれだけの人数がいても、彩華対一挑戦者の団にしかならない。その上柔道、空手共に黒帯と言う実績が伊達じや無いらしく、交わす度にもつれて来る腕を軽く技で引き離す。

少女は、凄いと思ってその乱闘を見詰めていた。周りの者達も、何

だ、何だとその乱闘している者達を取り巻くように集まり始めた。ざわめく声に、少女はドキドキしながらそれを見ていた。彩華の事は嫌いだ。でも、いつか見せられたら……正直かつこいいと思つた。

どれほど時間が過ぎ去ったんだろうか？次第に人数が減つて来ている。既に、印が付けられた者達は諦めてその場から離れて行く。きちんとゲームのルールを守つている証拠であった。そして、挑戦者が誰もいなくなつたところで、悠治はフウ！っと息をつき、投げ捨てたサングラスを取り上げたのである。

「何とかなつたわね？」

悠治は、格闘状態のその状況から解放され、言葉を漏らした。やはり結構しんどいものだなつて思つた。が、やり始めた事はとことんやり尽くさなければ気が済まない。それが、このゲームを始めた自分の責任。そう改めて思つた。

そして、この場を速やかに去ろうとした時、さつき落書きしていた少女が座り込んでいるのが目に入り、

「大丈夫？」

と、声を掛けた。きっと今の乱闘で、被害にあつてしまつたのだと、ハツと氣が付いたからである。申し訳ないと言つ思ひがあつた。しかし、少女はそんな彩華の声を無視するように顔を背けた。

怒つているのかと思い、悠治はちょっと躊躇しながら、少女の周りに散らばっている物達を拾いながら、何とかしようと心の中で色々考えた。が、とにかく謝らなければならぬなどしか考えようが無かつた。

そんなどよつと躊躇つてゐる悠治に、少女は本当はバツが悪い思いだつた。彩華本人の前で『バカ女』とポスターに書いた事を思い返していた為である。どうか、このまま立ち去つてもらいたいと思つていた。

しかし、当の本人の思惑とは反して、

「桐原奈々子さん。っていうんだ？」

突然自分の名前を呼ばれて少女は、声の主の方を見た。驚いた。何で分かつたんだろう？

『ギクリ』として、ちょっと身を引いた。悠治はといふと、散らばつていた物の中に生徒手帳を見つけて中を拝借したのである。名前を知らないのは当然の事だが、何となく今は話のきっかけを作ろうと思つた。そうしたら氣をこちらに向けてくれる。謝れるチャンスだとちよつと考えて、覗いたのであつた。

しかし、その中からヒラリと出て来た一枚の少年の写真に気が付き、コソッと見て元に戻した。彼氏かな？位の軽い気持ちだつた。

「足、大丈夫？」

少女がこっちを見てくれたので『ホツ』と一安心した。だから、今拾つた全ての物を、この少女、奈々子の前に落ちている鞄の中に戻し、捻挫したであらう、その足を見ながら言つた。

「『めんね？こんな事に巻き込んじゃつて？』

悠治はなるべく気軽に言つた。余り心配している様子を見せるのは、奈々子の為にはならないとそう思つたからである。どうせ、今の乱闘で自分が彩華だとバレてゐるはずだし。

「……」

当の本人の奈々子と言えば、放心状態でただ彩華を見ていた。

「足、大丈夫？」

繰り返されたセリフに気が付き、奈々子は、ハツと我にかえつた。

「え？あ、平氣平氣！」

突如立ち上がつた。立ち上がれる足でも無い事くらい判つていた。

彩華の乱闘現場を田撃している内に立ち去る事だつて出来たはずだし。

でも、ここで彩華に対し弱音を吐きたく無かつたし、同情を買いたく無かつた。だから、思いつきり捻挫した足を地面で踏みならした。すると、今まで緊張していたはずで痛く無かつた足に、『キーン』と脳天に響くほどの激痛が走つたのである。

奈々子は、直ぐにその場に座り込んだ。もう立ち上がれないとそ

思つた。すると余計に自分が惨じめに感じられたのである。奈々子の、この異様な様子に、悠治は笑つて良いものか？悩んだ。しかし、

余り追求するのもなんだし、ここは流しておこうとそう思った。

「ほらっ、無理しないで肩かしてあげるわよーついでに、送つて行つてあげるか……」

その言葉を掛け終わる前に、奈々子の手が悠治の頬を鳴らしたのである。

悠治は何が起つたのか解らなかつた。突然右頬に『ピリッ』と効いた刺激を受けたくらいであつたが、確かに叩かれたのだと気が付いた時、

「触らないでよ！あんたなんか嫌いなんだから！あーもう、サイテ～～！最悪！」

突如奈々子が泣き出しそうな声色で叫び始めたのである。思いの丈言いたい言葉が口から漏れたかのようだつた。

「あたしの初恋グチャクチャにされた上に、このザマ～～もつー大つ嫌い！」

声が街中に響き渡つた。悠治には何がなんだか？言つている意味さえも解らないこの状況下に頭の中が空白状態になつた。そして、周りのざわめきが耳に届き始めた時、このままここにいたら注目の的になつてしまい、また乱闘騒ぎを招きかねない。と判断が下つた。

「私の事嫌いでも良いんだけどさ……その、注目されてんのよね……」

奈々子は、ハツと我に返つた。そして、辺りを見回す。行き交う人々が、確かに一人に注目し始めていた。『ジロジロ』見て行く者も

いれば、訝しげに見て行く者もいる。中には、「もしかしてさ、あれって彩華じやない？」

と、見て通り過ぎて行く者までいる。今自分が何を言つたのか？咄嗟に出てしまつた言葉が頭を駆け巡り、この状態から回避する事と相まって、よけいに混乱した頭が、この後の彩華の行動を受け入れてしまつたのである。

突然、身体がフワリと軽くなり、自分が空中に舞い上がったような感覚が起きた。

「え？」

奈々子は、何が起きたのか理解できなかつたが、自らを支える腕に気が付いた。そして、空が動いている。周りの風景が動いている……

「ちょっと！」

焦つた。彩華が、自らをお姫さまだっこして動き始めたのだと気が付いたからであつた。

「小さくて、軽い子で助かつたわ～」

悠治と言えば、あつさりしたものである。ま、ここから立ち去る事だけを考えればこれが一番手っ取り早い方法だと気軽に考えた結果であつた。

「家は何処？あ、その前に病院に行かなきゃね～？」

その言葉に、奈々子は呆気に取られていた。言葉が紡げない。この人は、一体どう言つ神経をしているんだろうか？グルグル頭の中を駆け回る。自分をこれだけ貶した人間を、何故こんな風に扱えるのだろうか？自分だったら絶対こんな風には接せられないであろう。とそう考える。何か不思議な感覚だつた。だから、

「教えるから、せめてだつこじや無くて、おんぶにしてくれるかな……」

赤面しながら、言葉を発したのであつた。

奈々子の家は、渋谷から山手線新宿駅乗り換え中央線から八王子まで下った所にあった。まず、近くにある診療所に行き捻挫の手当てをしてもらつた。奈々子はたまたま、保険証を持ち歩いていて良かったと思つた。でも、

「この怪我は、私のせいだから！」

と、彩華は自腹を切つてその代金を払つた。はじめは、良いよ。と突つぱねていた奈々子であつたが、余りに彩華がその必要は無いから…と押し切るので、その勢いに飲まれて結局支払つてもらつた訳である。

その後、自宅まで彩華に運んでもらつた。医者の言葉が、一週間安静との事だったからであつた。

「一人暮らしなの？」

部屋の中にまで運んで、何とかベッドに腰掛けさせた奈々子に悠治は問いかけた。

「……そうよ……」

奈々子は気が無い風に言葉を発していた。

「じめんね。中学生かと思つてたよ……」

悠治は、素直に思つていた事をそのままに奈々子に笑いかけた。

「……中学生だよ」

「え？」

悠治は耳を疑つた。

「何で中学生が一人暮らしなんかしてるの？」

正直、悠治は驚くしか出来なかつた。狭いけど何だか広く感じられる部屋。でもこれ以上突つ込んだ事を訊いて良いのかどうかなど、考えなかつた。それこそ不自然だと悠治は思つたからである。

「……恵まれた家のお嬢様には解らないわよ」

奈々子が皮肉つてそう言つたものだから、一瞬さすがの悠治もムツとしそうになつた。だけど、

「あたしの家は、今離婚調停中で、両親別居中の……あたしはそう言つ環境に居たく無いから、一人暮らしを言い出したの。一人の方が気が楽だしね。そしたらこのアパートをあてがつてくれた……変な話だけどね」

一瞬シーンとした空気が二人の間に生まれた。さすがの悠治も、これ以上は何も言えない。そう言つ環境で育つた事など無かつたからである。

無いけど……考えてみれば彩華として過ごしている間は両親が揃つた試しなど無い事は良く分かっている。本当の両親と言う訳では無いけど……他人ではあるけど、彩華としてここ数年その環境で育つた事を考えるとその気持ちは良く解る気もしないこともない。

ふと、視線を真っ黒いカラー ボックスの上に向ける。幸せであつた頃の奈々子と両親の様子が写し出されている木枠の写真立てが目に入つた。

悠治はそれを見て一瞬良案が浮かんでいた。

そんな中奈々子は思つていた。彩華は何も言えないだろうと。そうせせら笑いたい気分だった。しかし、その思いを遮る言葉が彩華の口から漏れ出た。

「じゃあさ、二週間ほどここに泊めてよー! その足じゃ、学校行くの大変じゃ無い?」

「な……」

彩華は良い案が浮かんだとばかり手の平をポンと打ち、につこりと笑つたのである。だから、奈々子は頭の中が真っ白になつた。一体何を考えているんだ? 出会つたばかりなのに……この人は常識的な物の考え方が出来ないのか? それとも、私の考え方が間違つているのか? 目眩がしそうだつた。

「送り迎え、料理、それから……そ�数回、ここに泊めてもうう間の家賃と食費は入れるから~」

「……」

奈々子は呆気に取られて口をあんぐりと開けていた。その事に気が付いてるのかいないのか？彩華は言葉を紡ぐ。

「私、今失綜中なのよね～バレンにようにするから、御願い～助けると思って！」

次から次へと勝手に事を進めて行こうとする彩華に何も言えない奈々子は頭痛がしていた。

「そうそう、この近くに衣料品を扱っている店在る～早速行かなきや～あ、カード使えるかなあ？」

奈々子の返事を聞く事なく彩華は勝手に話を押し進め、そして、そそくさと部屋を出ようとしていた。その気になつていてる事がその行動に現れ始めた時、奈々子は、観念したのか溜め息まじりに、

「分かったよ。良いわよ。うちに居ても……」

この一癖も一癖もある芸能人彩華を受け入れたのである。

かくして一方的に始まつた同居生活一日目がバタバタとして過ぎて行く。

そんな中、悠治が良案と曰したそれは、この奈々子を寂しく感じさせない時間を与えたいと言う事が念頭にあつた。

彩華を嫌いだと宣つた奈々子ではあるが、押し駆けてしまえばこちらの思う壺になる事だけは分かつた。それは、捻挫事件の時と、ポスターの件で分かつた。普通、あんな落書きしか出来ないのはおかしい。本気で嫌いだつたら躊躇つたりしないであろう。この年の子であれば、ハヂに落書きしても破り捨てても、感情つてモノはもつと素直なはずだと思う。それが、あの程度で済んでいいって事は、彼女に何かしら押さえているモノがあるからだ。と悠治は思つていた。それは、この奈々子と血つな性格だらつ。だから悠治は、興味を持つた。

考えてみれば、彩華以外の女の子と接した事はほとんどなかつた。仕事で接する女の子はライバルだし、仲良く話をする事など無かつ

たし、仲良くしようなどと考えた事も無かつた。

そう鑑みると、これは良い機会かも知れない？自分の視野を広げる事も必要かも知れない？そんな事を思い耽ると、悠治は張り切れる気がした。これからの一ヶ月間、色々と何かを楽しむ事ができる。何しろ今は彩華の皮を被っている訳だし、女の子を知る丁度良い機会では無いか？そう思つと、解放感に合わせニタニタ笑いが顔を作る。

「何笑つてるの……？」

無気味だと言わんばかりに、一丁Kの自分の部屋から覗き見る勉強中の奈々子に気が付き、

「あ……これお砂糖と塩どっちかと思つて？」

慌てて話をそらす。今は晩御飯を作つてゐる最中であつた。

「あの……舐めれば解ると思うけど……それがそんなに面白い事なの……？」

「そうね～舐めれば解るよね～あはは～」

そそくあと、舐めてみる振りをする、

「彩華……ちやんと料理出来るんでしょうね～家、燃やしたりしないでね……」

奈々子が立ち上がりうとしたので、

「あ、平氣。大丈夫！任しておいて！」

慌てて、座るように促した。

解らないはずは無い。實際自宅で両親がいない時は悠治自身が御飯を作る。

インスタントや「コンビニーの御飯は食べたくは無い、それは意地であった。自らの信念もある。そして実の所、料理は得意だった。だからこの同居は上手く行くと思つていた。

そして、ここまで突飛ないことをやつてゐるのだ。奈々子は彩華が本当は変な人だと思つてゐるはずだ。ならば、徹底して変な人を装うのも良いだろ？世間知らずで図々しい人。それが自分。

とこう人格を演じてみるのも面白い。また一つ楽しみが出来た気が

したので悠治は満面の笑みで、田先の料理にその思いを注ぎ込んだのである。

「あ、美味しい……」

意外そうに奈々子が言葉を発する。奈々子は、小さじテーブルに乗つているオムライスと、サラダなどがバランス良く配置され、見た目と味が一致した事が不思議だった。本当は、どんなモノを食べさせられるのではないかとヒヤヒヤしていたからである。

「そんなに、心配だったの？」

彩華はクスクス笑っていた。そりや、作つていてる最中に塩と砂糖がどちらかなど訊かれれば誰だって不安になるものだ。その上、彩華は親の力も有る芸能人。そんなお嬢様である彩華が料理などやつた事があるのか？それが凄く気になつていた。

「私、ちゃんと自分で御飯作つてているわよ～簡単なモノだけね？」

「あ、そうですか……」

そう言われてちょっと、複雑な気分だった。自分でも同じ物をここまで美味しく作れるであろうか？そう考えると、悔しく思える。同じ女性として。

でも心とは裏腹にきちんと最後まで食べた。美味しいし、お腹は正直だったからである。

「あのひ……何で、こんな事してるの？」

食事を済ませた後、不思議に思つてゐる事を彩華に訊いてみる事にした。

「こんな事つて、ゲームの事？」

「それしかないじゃない……」

「奈々子の世話の事かと思つちゃつた」

また、クスクス笑われる。何でこの人は当然の事がごとくこうやってふざけるのだろうか？

「楽しいからよ～つて、奈々子、勉強終わつたの？ゲームしようゲ

「ム！」

突然、テレビ横に置いているテレビゲームに目を付けたのか、彩華が話をそらした。何処までも勝手な奴だと思ったが、何か訳でも有るのかも知れないしと、今回はこの辺にしておく事にした。

大体、初対面で話してもらえる訳も無いだろう。でも、ここまで人懐っこく接せられたら（勝手な奴では有るが……）何だか古くから付き合っている友人のような気がするから不思議である。

悠治のペースにハマってしまった奈々子はこの日は結局自分が持っているゲーム機で悠治と対戦ゲームをし、夜は更けて行つた。

『悠治の莫迦ー！阿呆！脳足りんー！』と、心の中で叫びまくっている彩華は、その夜眠りに就く事が困難であつた。

何故あんな莫迦げた事をし始めたのか？その事が解らなくてイライラしていた。それが自分の勝手なら立ちだとしてもだ。こんな事をしていると言う事は、悠治自身にも何かしら考える事があつたはず。それなのにその事を追求する気にはなれなかつた。悠治よりも、自分の事を考えている。しかしその事には気が付かない。端から見れば、自分勝手が本当は誰なのか？この状況ではわからないかも知れないだろう。どちらもどちらである。

そして、彩華は明日からの事を考えていた。悠治が行きそうな所。まず、お地蔵様の所には現れるはず。今日も訪れた様子があった。そこを押さえさえすれば、悠治を捕まえる事はできるはず。しかし、一日中見張つている訳にはいかない。明日は、学校に行かなければならぬ。悠治と同じ学校ではあるが、一ヶ月間来る事は無いだろう。きっと……

ま、心配しなくとも悠治は頭が良い。単位さえ落とす事が無ければ、まるまる一ヶ月欠席しても授業には付いて来る事ができるであらう。そんな事を考えていると、

『そう言えば、何で悠治は都立になんか通つているんだろう？』ふと疑問が生じた。

『芸能界にいたいから都立なんだろうか？』

他の芸能人には悪いけど、悠治は私立の良い所に通う事ができる位出来の良い頭を持っている。もともとの脳味噌を持っていた彩華にとって情けない事だけど、それは本當だつた。頭だけでは無い、スボーツまで万能だ。自分の本来の身体でそこまで出来るなんて。と思つくり……

「うーん。考えれば考えるほどわかんないよ」

彩華は蒲団に包まって、頭を抱えた。そして、もう一度明日からの悠治追跡の算段を少しでも練ろうとした時、眠気が襲い見事に眠ってしまったのである。

「朝だよ～御つ飯だよ～ん！」

痛快、爽やかな声が部屋中に響いた。昨夜遅くまでゲームの対戦に夢中になっていた二人であつたが、こうも朝早くに起されると奈々子はゲッソリしてしまった。

「あのね、彩華……今何時だか判つてる？」

「六時だけど？」

悪びれる風も無くニコニコして彩華は楽しそうにフライパンを持つて現れた。

「学校は七時半なの……まだ寝かせてよ……」

脳天氣極まりない彩華によけい脱力してしまつ。心のママにあぐびを連発してしまった。

「でも私、学校に行く為の道知らないよ～ん。早く行～う～・奈々子は道案内のナビゲーターだよん？ よろしく！」

奈々子の事などお構い無しにますます張り切つている。そのテンションに仕方ないから付き合つ事にした。足を床に着けた時、昨日より痛みが有る事に気が付き一寸が不安になつた。

「朝はご飯が一番！ ちゃんと食べなきゃ倒れるからね～」
と、運んで来た物は、ごく普通の日本の朝食だつた。

「…………はいはい」

呆れてしまうが、口には合づ。だから、文句は言えない。奈々子は、徹底した彩華のこの様子に、

「無理はしないでよね？ 彩華、何時に起きたの？」

「五時だよ？ 何か不満でも？」

『五時になんか起きて、働くなくても……』

と言いたい所だが、その言葉を封じ始めた。

「道案内はできるけど、どうする気？まあかおんぶして運ぶとか言わないよね？」

食べ終わった食器を彩華が運ぶ、

「自転車あるよね。確か？それで一尻して運ぶわよ？何？おんぶで学校通いたい？」

また茶化している。この人は、「冗談しか言わないのだろうか？と、また脱力してしまった。

「……よく自転車がある事分かったね？」

「昨日、ここに来た時、自転車置き場に名前が有つたからね～久しぶりに乗るわ～」

何だか不安になってしまった。でも彩華は楽しそうだ。よほど変人かも知れない。

「くれぐれも、自転車壊さないよう心にね……」

引導を渡してみる。しかし、その事に気を配るどころか、

「そう言えば、ここに帰つて来たら鍵無いと入れないね？奈々子、鍵貸しておいてくれるかな？合鍵作つて来るから～」

そう言えばそうだ。鍵が無ければこの家に入れない訳だし。まあ、いくら何でも彩華の稼ぎを考えれば奈々子のなけ無しの預金なんかに手を出すとは思えないし……

「しょうがないから、貸してあげるよ。彩華は隠れなきゃならないものねえ～？」

皮肉粉れに言つたつもりなのだけれど、

「今日は、ちょっと原宿にでも行こうかなと思つてるよん～行つた事ないからね～」

「口二口している。

「セイですか……」

その後奈々子は何も言えなかつた。

学校は、ここから自転車で十分。少しふらついてママチャリを運転している彩華は鼻歌混じりに歌つている。その後ろに乗り込んだ奈

々子は、そんな彩華の様子に気恥ずかしい気持ちになつた。

彩華の姿と言えば、紺のチャイナドレスに黒くて丸いサングラスを掛けて、バンダナを頭に巻いている。何処から見てもスタイルの良い変な中国人だ。

道を歩いている人は、不思議そうに振り返つて行く。学校近くになると、登校しているクラスメイトやその他の学生がいるので奈々子は落ち着かなくなつっていた。でも、そんな視線を気にしないのか、彩華は教室まで奈々子を送つてくれた。御丁寧におんぶして……

「無事到着！何時に学校終わるの？帰宅部？」

廊下側の机の椅子まで運んだ後、腰をかけたのを見計らつて彩華は間いかけて来る。クラスの者達は不審げに彩華と奈々子を遠巻きに見ていた。

その視線に気付いていた奈々子は、早く去つて欲しいばかりに、「……今日は、四時頃終わるよ。帰宅部だからそのまま帰れると思う……」

「そっか～んじゅその頃に迎えに来るよ～ん。んじゅー……と、あ、そうそう。絶対安静にしておくのよ～ちゃんと迎えに来るから、ここで待つてなさいね！」

念を押されてしまった。だけどこの足で無理な事は出来ない事は分かつていたので、

「はいはい」

適当に相槌を打つて苦笑いで彩華を見送つたのである。

さて、今日は何をしようか？悠治の頭の中は色々考えていた。

原宿に行く事は考えていたので実行するつもりである。その後、お地蔵さんの所に供物を持って行って……そう言えば学校どうしよう？行つたら行つたで、彩華に逢つてしまつ。それはちょっと控えたい。絶対批難するだらう事は明白だつた。今は彩華の言葉は聞く無い。聴いたら今の自分を否定される事は明らかだ。そんな話はしたく無い。せっかくの自由なんだし……近寄らない事が一番の得策である。勉強遅れるかな～ 単位危なかつたつけ？

余り、単位の事は考えていなかつた。どうにかなるだらう？と安易な考え方しかなかつた。それに目先の方が大切だつた。勉強は一の次だつた。どうせ、芸能界でやつて行く訳だし、そんな事よりもっと自分の為の事をした方が有益である。

原宿を闊歩しながら、変装バツチリな姿で悠治は普段は入り込まないだろう所を見て回つた。

ウインドーショッピングも面白いものだ。何も買わなくともそれだけで楽しい気分になる。今の若者のファッショն。そして、雑貨。目を肥やしておく事も時には必要である。そしてちょっと一息入れて、喫茶店で一杯のコーヒーを頼んで一服している時であつた。一人の男が近づいて来た。どうやら、芸能界へのスカウトの男らしい。わざわざ御丁寧に名刺を見せられた。

「こう言つ者だけどさ～ 芸能界に興味ある？君みたいな面白いと思つんだ。是非一度事務所に来てくれないかな？」

えらく乗り気で話しがけて来る。しかし、悠治はサングラスを外し、「あいにく、間にあつてますんで～」

につこりと男に微笑んだ。男は、その人物が、既に芸能界で有名になつてゐる彩華だと判り、あつさり身を引いた。そして、ちょっと慌てて笑いながら、

「あはは～ そうだね～ では～」

手を振りながら、そそくさと去つて行つた。

また一人ここに彩華がいる事を知つてしまつた訳だ。いつ、また騒動が起つたか判らない。だから早々にこの喫茶店を去る事にした。今の所は追つ掛け連中や、芸能記者には遭遇して無いし、つけられてスクープ狙いの者はいないようだ。ま、少々追つかれてもビクともしない心臓を持ち合はせている悠治では有るが、奈々子みたいに巻き込まれる者が出たら困る。表参道を歩きながらそれは気になつた。早々にこの原宿を立ち去るべきかも知れない。それに、合鍵も作らないといけないし。お供物を買って、あの場所に行かなければならない。そう考へると、早速この原宿を立ち去つたのである。取り敢えず、先にお地蔵様の所に行く事にした。今なら学校は終わつて無いし、彩華に出くわす事も無い。近くのコンビニでお供え用の苺大福を購入し悠治は直ぐさまその場所に行つた。

厄介な事を言つてくれるよな～この地蔵は、毎日通つている場所ではあるが、心の中は悪態をいつもついている。そうしないと、自分この状況を受け入れてしまいかねない。

始めは戸惑つたし、彩華の成長して行く身体を感じなければならぬ。『心は男だぞ？』

いつもトイレに行く時も、風呂に入る時も、凄く緊張する。目を閉じられればいいが、そんな器用な真似など出来ない。自然と目に入つてしまつ。彩華には悪いが、これもしょうがない事だしど、今では慣れて来ていた。

それに、彩華だつて同じ境遇だ。自分の裸を見られている訳で……複雑な気分だ。ある意味裸の付き合いをしている訳である。彩華はどう思つているんだろう？その事は、全くお互い話そうとはしない。照れくさいし、今さらな感じがしていたからだ。

もしかしたら、それも有つて、悠治を男として見ていないのかも知れない。が、そこまで彩華が頭を働かせているとは思えない。色々考へていると、よけい腹が立つていた。あの時、お小遣いさえ持つ

ていれば！お腹が空いていなければ！しかし済んだ事を今さら言つても仕方ないので、祈りを捧げてこの場を速やかに去つたのである。時刻はもう、四時前。早く合鍵を作つて奈々子を迎えて行かなればならない。電車を乗り継ぎ八王子の駅近くの鍵屋で、合鍵を作ると一旦散、駅に止めておいた自転車で奈々子の通つている学校に直行した。

「奈々子迎えに来たよ～んーちゃんと安静にしてた？」

「痛いのに安静にしてなきや困るのはあたしなんだよ？……当然じゃない！」

「なら、よろしい！」

まるで、母親のような接し方。またまたゲッソリしてしまひ。そんな奈々子に、

「お姉さん？桐原さんにお姉さんが居るなんて知らなかつた～」

今朝、遠巻きに眺めていた何人かのクラスメイトがこれ幸いとでも言つかのように近づいて來たのである。

「あ、えつと……」

奈々子が返事に困つてゐるので、

「そうなの～奈々子を宜しくね～仲良くしてね？」

サングラスを掛けっぱなしの怪しい彩華は、口元を引き上げ微笑んだ。

「これから一週間、奈々子の足の怪我の為に送り迎えするので、皆さんにも協力してもらつ事になるかも知れないと、御了解いただけないと幸いだわ？」

彩華は、既にクラスの女の子に打ち解けている。サバサバしたこの女性に興味が有るみたいだ。

そう、クラスの子達は、そんな明るい彩華に好意を持つてゐるようだつた。自分にはこういう接し方をクラスの友人に出来ない。だからちょっとそう言つ彩華が羨ましい。でも、もしこの人物が彩華だと分かつたら、じつはいかないだろ？。直ぐさま引くだろ？。彩華

の存在は、クラスの女性陣に嫌われている。奈々子のようだ。

「じゃあ、失礼するわね～奈々子、はい、鞄！」

鞄を受け取ると、少し前屈みになり、奈々子をおんぶする。そして、

学校の自転車置き場まで歩いて行つた。

「合鍵作つたから、この健は返すわね～」

早速忘れないうちにと、鍵を奈々子の補助鞄にしまい込む。

「今日は、格闘しなかつたの？原宿つて人集まるしさ……」

心配をする必要はないが、自転車の後部に乗り込んだ奈々子は自宅に着くまで、今日彩華がどう行動したのか気になつていた。別に奈々子が気にする必要なんかはないけれど、何だか気になつた。

「あ、今日はなかつたなあ～これだけ厳重に変装してたらまさかって思うでしょ？」

確かにそうだ。こんなイカレタ格好してたらまさかって思うだろう。現に、クラスの皆だつて騙されていた。

「でも、スカウトされちゃつた～」

「はあ～？」

「サングラスとつたら、そそくさと逃げちゃつたけどね～」

そりやそうだ。でも、そのスカウトの人も凄い感性の人だなあ～とは思つたが、敢えて口には出せなかつた。
それから少しすると、

「あ、ちょっと待つて！」

突然軽快に走らせている自転車が急停止する。

奈々子は何故彩華が突然ブレーキをかけたのか解らなかつたが、止められた自転車の荷台に座つて待つていると、

「あはは～拾つちゃつた～」

まだ子猫なのか？ミャー～ミャー鳴きながら、彩華の腕の中にチヨコンと包まれていた。

「連れて帰つたら、だめ？ペット厳禁？」

薄汚れ綺麗とはいえないが、小さい身体で力なく鳴いている。お腹をすかしているのだろうか？捨て猫か？奈々子は不欄になつた。ま

るで親に見捨てられた、今の自分の境遇を見ているかのよつで。

「ペットは厳禁だけど、良いよ。ばれなきゃ良い訳だし……」

すんなり受け入れた。今までの自分だと、こんな子猫の一匹くらい
氣にも留めなかつたであろう。可哀想。でも、力無きものは死ぬの
が自然淘汰だ。そう思つて、その場を立ち去つていただろう。でも、
それを彩華は見つけては世話をしたいと思つてゐるらしい。こう言
う事で、奈々子の心を後押ししてくれる。それも全て彩華と言つキ
ヤラクターなんだろう。

まだ出会つて二日目。それなのに、奈々子の心は何だか満たされて
いる。不思議な女性と出逢つたものだ。鞄は自転車の前籠の中。子
猫は奈々子が抱きかかえ家路に着く。

玄関の鍵を開け、彩華は奈々子を部屋まで送り届けてくれる。内服
薬は欠かさず飲んでいる。外用薬は、彩華が取り替えてくれた。も
し、奈々子に姉がいたらここまでしてくれるだろうか？ 一人っ子の
奈々子には想像がつかない。

甲斐甲斐しく世話をしてくれる彩華が本当の自分の姉だったら……
と思つて頭を横に振る。

私はこの人が嫌いなんだぞ？

自分勝手な彩華のおせつかいや、言動。なのに、今はそう感じなく
なつてゐる。どころか、身近に感じ始めていた。これつて彩華を受
け入れているつてことなんだろうか？ 不本意だけど、だんだん混乱
して來た。

「猫の餌買つて来たいんだけど。ちょっと近くのコンビニに出て行
つて良いかな？」

彩華の言葉が聞こえているのかいないのか？ 奈々子は複雑に頭を捻
らせていた。

「奈々子、聞いてる？」

もう一度問い合わせられて、ハツと我に返つた。ドキドキと胸の鼓動
が鳴り止まない。

「あ、うん良いよ！行つて来て、行つて来て！」

この様子を少し訝しげに見ていた彩華であつたが、

「……やはり迷惑なの？」

「そんな事ない！行つて来て！私がこの子猫見てるから！」

慌てて言い返した。迷惑がるのは、猫の事なんだろうか？彩華自身考える所が有るのだろうか？ちょっと自己嫌悪しそうになる。謝つては欲しく無いし。奈々子はそう思つて言つたのに当の彩華は、

「そうだよね～迷惑だつたら初めから断るもんね～ふふふ」

騙された。やはり彩華は彩華だった。心配する必要なんか無かつたんだと改めて思った。そして苦笑いが溢れてしまった。

彩華が買つて来た猫の餌は、コンビニに置いてある手軽な缶詰め

で……

「賢沢な奴よのう～猫つて食べたら美味しいかな～？」

含み笑いをしている彩華に、

「彩華ねえ～食べる為に育てるなんて言わないわよね～牛や豚じゃ有るまいし……」

冗談で言つてるとまは思うが、彩華は何をやらかすか判らない。

でも彩華は、その缶詰めを別のトレイに移して猫に餌をやつしている。猫の餌代は莫迦にならない。でも凄く楽しそうだ。何に対しても楽しそうに接しているが、どうこう状況下でも、やはり彩華は楽しもう。そう楽しく生きてるんだと実感してしまつ。

またまた羨ましく感じられた。自分はどうだろう？何でも楽しく感じられるだろうか？いや、そう言つ感情は芽生えないだろう。そして、再び彩華を嫌つている自分の過去を振り返つた。

初恋。それは、中学一年生の時だつた。

同じクラスの学級委員長だつた岸田明彦君。

今では生徒会長をやつている。まだ、少女だった奈々子は何にでも優しく接してくれていた岸田に思いを寄せていた。

奈々子は余り器用じや無くて、感受性が高い方だった。だから、クラスの皆からも一歩引いて接していた。全く友達がいなかつた訳では無い。ただ、親友と言つ存在には恵まれなかつた。自分から話しが掛ける事は無かつたし、依頼心の方が大きかつたのかも知れない。それは、家庭環境がそうさせた。

仕事仕事で、家に止まつてゐる時間が少ない父親に、それを快く思つていなかつた専業主婦の母。家庭を顧みない父では無かつたが、奈々子を、そして母をいつしか遠退けて行つてしまつた。そして、そのうち母の心は父から離れて行つてしまい、浮氣相手に心を奪われてしまつた。それがついには父にばれてしまつたのである。

親権問題。こゝで言つ場合、父方に子供の権利を譲るものだが、母は断固拒否。仕事で、奈々子の世話ができるのか？それが当面の問題。だからと言つて、母方に養育するだけの財力も無い。それがこじれて長期戦に持ち込み今に到つてゐる。

そんな奈々子の支えが、岸田であつた。幼馴染みと言つ訳では無いが、そんなちょっと意識暗めの奈々子に軽く接してくれた。だから、期待していたのかも知れない。もしかしたら、岸田も自分の事を思つてくれるとかも知れないと。

でも、岸田は誰にでも声を掛ける優等生。見た目も爽やかで、女子には勿論人気が有つた。困つた人には必ず手を差し出していた。それが、返つて奈々子には不満だつた。心の寄り所を奪われてしまつてゐるかのようである。

もしかしたら、奈々子自身、独占欲と言つものが強いのかも知れない。自分だけを見て欲しいと言つ気持ちがそうだ。だから、思い切つて一年生の時、また同じクラスになつたバレンタインデーの時、思いを込めて告白したのである。心を込めた手作りチョコと、気持ちをしたためた手紙を添えて。

だけど、その時岸田は、

「ごめん。僕、彩華みたいなタイプの子が好みなんだ。だから、君の気持ちを受け入れられない」

あつさり振られてしまった。

それからである。彩華に対するライバル心が沸き起こつたのは……絶対彩華みたいなタイプにはならない！憧れの人が彩華だと分かつていながらそう思った。ある意味、反抗心からだつただろう。

普通だつたら好きな人の好みを研究するくらいするはずだ。でも奈々子は違つていた。着る服、考え方、振る舞い方。全て意識して彩華みたいにはならない！と思つた。

そして、不運な事に、告白場面をクラスメイトに見られていたのである。

その事は、直ぐにクラス中に広まつた。噂は、あらぬ事まで伝わつて、奈々子が岸田に泣いてせがんだ。などと言つとんでもない物までになつていて。クラスで人気者な岸田であつた為か、憧れている者は多い。だから、妬んだ者が、要らない尾ひれを付けて回つたらしい事は分かつた。

ヒソヒソ話しが独り取り残された奈々子の耳に入つて来る。普段仲良く話をしてくれた友人さえ離れて行つた。結局友人なんてそんなものだ……

世の不条理を感じていた。奈々子はその年が早く過ぎれば良いとさえ思つていた。そうすれば、春の新学期に向けたクラス替えが有る。このクラスメイトもそして、岸田とも離ればなれになれる。ひとつりとした学生生活も後一ヶ月間の辛抱だと、奈々子はその年は過ごす事になつてしまつたのである。

そんな過去を持つてゐる奈々子には、彩華みたいな今光り輝く人気ある芸能人のゲームが余計に許せなかつた。何でそんなことをして恋人を決めなきやならないのか？彩華が好きだと言えば、誰だつて喜んで恋人になるであろう。でも、こんな性格だと逆に幻滅するか？実際接してみて、彩華がまさかこんな変人だとは思つていなかつた。もつとお淑やかで、男性を引き立てて、後ろで励ますタイプだらうと思つていた。

それが……ギャップが有り過ぎて面喰らつてゐる。

「性格隠すの上手いよね～芸能人って、皆そうなの?」

「ちょっと興味半分で訊いてみた。

「うん? さあ～ね～? 人それぞれじゃ無い? それよりもあ～この子に名前つけてやらなきゃね?」

子猫の顎を撫でながら彩華は幸せそうに笑いかけて来る。またはぐらかされた? でも、そののかも知れない。みんな仕事で自分を表現してる訳だし、テレビだけが全てじゃ無い事くらい考えてみれば判らなきゃならない。

じゃあ、彩華はそれをひた隠しして今までいたのか? 何だか虚しい人生だなと思った。

「彩華はそれが地なの? あたしの前で、演技なんかして無いよね?」
ふと心配になつた。彩華は演技が出来るはずだ。なんたつて、テレビドラマで女優も演じている。

何回か見た事がある。見たくは無いけど、何故か彩華の出ているドラマは、奈々子の好きなドラマだつた。嫌でも目に入るのだ。でも、感情を凄く作品に合わせて変えられる凄く柔軟な演技力は目を見張る事ができる。どうしても引き付けられるのだ。天才なんだと思う。これが血の繋がりだつたら母親譲りである。

「演技なんかする訳ないじゃん～私はこんな奴よ～」

内心悠治は焦つていた。何かばれるような事したかな? 奈々子は不審がつてなかつたし、別段変わりが無かつたはず。莫迦な事はいくらもやつてきたし定着させたと思つたんだけどなあ～? もしかして勘が良いのかも知れないよなあ～?

「そんな事考えるよりさ～名前考えようよ～名無じじゃ可哀想じゃん?」

またはぐらかされた。でも、今ここにいるのは、確かに彩華だし、出逢つた初めから知つていいままの彩華だ。そう思い直すと、もうどうでも良くなつた。

「ポチなんてどう～?」

「それは犬につける名前でしょ……所でこの子、女の子かな?」

「う～ん？ 玉は付いて無いようだから、女の子じゃ無い？」

「彩華つて下品だね……」

「え？ ジヤあどう言えば良いのよ？」

「そ、そんな事知らないわよ！ 女の子か男の子かそれだけ言えば良いの！」

やはり、彩華は彩華だ。そう思つと何故だか安心した氣がする。不思議だ。この人といふと、自然体でいられる。奈々子の心の中が軽くなつていた。

「じゃあ、ナナで行こつー！」

「何でよ？ あたしの名前から取るなんてーー！」

「良いじやん？ ナナ～奈々子が良いつても～ー！」

了解も得ずに名前を決めている。相変わらずの身勝手だ。

「あ、ダメじやない！ ナナ～おトイレはこっちー！ 全くちゃんとしたしつけないとね～」

何だか腹がたつて來た。そして、前言撤回したい氣分になつた奈々子であった。

その頃の彩華は、学校の帰り道であった。いつも通り、お地蔵さんにお供物を持って来ている。ふと田の前に行くと、既に苺大福が供えられていた。悠治はこれしか供えないのですぐにここに悠治が来たのだと判つた。

「すれ違つちやつたかなあ～」

彩華は凄く気分が落ち込んだ。悠治に逢えるとは必ずしも思つて無かつたが、それでも一纏の望みは有つた訳で……そう考へてみるとまたまた、悠治に対し恨めしい気持ちがぶり返して來たのである。きっと私と逢いたがらないんだ。色々頭の中で考えられる事を思い巡らせた。でも、怒りが先立ち考へが纏まらない。一言で良いから恨み」との一つを言つてやりたい気分だ。

明日は学校には立ち寄れない。仕事が入つている。今度の新曲の為のレコーディングがある。

だから鞄の中からルーズリーフを取り出し何やら書きはじめるとそれをお供物の下に敷いた。明日もきっと悠治は現れるはずだ。だからその為の置き手紙を残した。

夕方の淡い日射しが彩華を包み込み、そして家路に着くようにと背中を押して来ている。だから、お祈りをしその場を去つた。明日になつたら、悠治のことが解りますようにと思ひを込めて。

「彩華？」の問題なんだけども？

その頃の悠治は、奈々子の家庭教師兼家政婦をやる事になつていた。
「何でこの公式じゃ解けないの？」

奈々子は余り頭が良い方では無かつたらしく、宿題に追われていた。それをカバーするのが、夕食を終えた後の今日からの彩華の仕事となつた。

「これはね、まず公式を使う前に一つ計算しておかなければならな

いの」

ノートの切れ端にその計算式を書き写す。

「あ、なるほど……」

スラスラと書き出されているその様子を見て、才色兼備つて本当にいるんだな」とか思いながら奈々子はその計算式をノートに書き出して公式を当てはめた。そして、その問題を解く事が出来た。世の中は不公平に出来るんだ……それが奈々子の心を落ち込ませる。

「わかんない事が有つたら、何でも言つてね？」

そんな奈々子の心情を汲み取るどころか、彩華はにこやかに微笑んでいた。その微笑みは嫌みが無くて、奈々子は少し反省した。勉強まで教えてもらつてはいるし、家事もこなしている彩華はやはり凄い人物に思えたから。

「彩華は、学校に通わなくて大丈夫なの？仕事キヤンセルつてのはまあ解るけど、学校は行くべきじゃ無い？あ……でも、そんな事したら、学校がパニックになるかもね？」

「そうねえ、行かなきゃいけないとは思つけど、行つて逢いたく無い人物もいるしさ？勉強が遅れて単位落としても、行きたくは無いなあ～」

珍しく、悠治は奈々子に本音を漏らした。別に知られて困る事は無いし、この問い合わせに対する答えをばぐらかす必要は全くない。

「逢いたくない人物？彩華が逢いたく無い人物つて一体どんな人？」

「それは秘密～あ。ナナが寝てる～寝顔が可愛いね？」

少し突つ込んだ話は流石に答えを貰えない。まだそこまでは話してもらえないんだと思つたら、奈々子は溜め息が出た。

「明日も同じ時間に起した方が良い？」

そして、話をそらされた。

「……七時に起してくれたら良いよ。六時は早すぎるしさ。もう、あたしの通つている学校は判るでしょ？」

今日の朝のドタバタはこりこりだつた。

「そう？分かつた。じゃあ、奈々子の宿題も終わつたようだし、また対戦ゲームしようか！」

いつもの彩華がそこにいた。だから再び奈々子は彩華に付き合ひの事にした。

眠りに就く時は、奈々子がベッド、悠治は絨毯の上でと決まつていた。初めは交代制でと奈々子は勧めたんだけど、悠治はそれを拒否した。御厄介になつてゐる身だし、奈々子が絨毯の上で寝る必要性なんて無い。悠治の男としての面子がその辺りに出ていた。女の子に絨毯の上でなど寝てもらいたく無かつた。

悠治には体に掛けるタオルさえ有れば十分だつた。今は夏なんだし、よほど寝相が悪く無ければ風邪をひくと言う事も無いだろう。それにこづいう待遇も面白い。何だか寝床の決まつて無い自由人のようだから、逆に今の悠治にとつて気楽だつた。

それにしても、あの時の奈々子の言葉は、今でも心に響いている。彩華には幼い頃からざつぱらんに接して來ても、それが悠治としての本心だと思われて來た。本心でも有るけど、それでも、悠治の心の中まで入つて來ようとはしなかつた。時間つてなんなんだろう？悠治の内心を暴く事が無かつた彩華。なのに、まだ逢つたばかりの奈々子はその辺りを察して來た。

上手く自分を作つてゐるバズなのに……それなのに、演技しているんじや無いかと訊き出して來た。自信が有つたからこそあの時ははぐらかす事で、何とか乗り越える事が出来た。バレたらバレたでそれはそれで良いのに。何だか肯定出来なかつた。

その方がこの同居生活は上手く行く感じがしたからである、自ら安心して生活出来る場よりも、もっと刺激が欲しかつたのかも知れない。ドキドキしながらそして、次の瞬間わくわく出来る場所。それがこの一週間生活で得られれば何かが変わるような気がしていた。そんな事を考えると、今頃彩華が何を考えているかが気になつた。きっと、お地蔵さんのお供物には気が付いてゐるであろう。悔しが

つているだらうか？それとも心配しているだらうか？悠治は、前者だらうなと苦笑いする。

学校でも、家でもきっと自分に考えを走らせているだらう。一つの事にしか頭を働かせる事が出来ない不器用な彩華だから……だから、このゲームは一つの賭けだ。さあ、彩華は自分を捜し当てられるだろうか？

夜は更けて行く。今日の事を考える事も出来なくなつた今、悠治は固い床を感じながら、眠りに就いた。

「おい悠治？」昨日渋谷に彩華が現れたつてさ。で、昨日は原宿だとよ」

レコードデイニングスタジオでプロデューサーや各スタッフに挨拶を交わして回つた彩華は悠治の動向をここで知り得た。

「どこだつて？」

「だから。渋谷と、原宿……」

問い合わせられて、英一は何だか心ここに有りずの悠治に少し苦笑いして、いた。

「渋谷では、乱闘騒ぎを起したらしい。でも彩華が勝つたらしくつて、ファンがすごい」と諦めたつてさ。原宿では起こらなかつたらしいなあ

「……ふーん。あ、でも、英一つてさ、一体何処でその情報を手に入れてるのさ？」

一瞬ホッとした胸をなで下ろしたが、それでもまだ落ち着く事は出来ない。あの悠治のことだ、次もまた事を起さないとは限らないからだ。

それにしても、自分では知り得ない情報を英一が知っているのは腑に落ちない。悠治は彩華の幼馴染みで、且つ同じ秘密を持ち合わせている同士だ。その本人が知らないのに、英一は事もなしげに知っている。

「インターネットだよ。悠治はやらないのか？それに、彩華お前に

は何も連絡よこして無いのか？」

「そうか、インターネット……僕やらないし。当の彩華からは連絡ないし……」

インターネットは情報の溜まり場だけど、わざわざやる環境を作つて無い。そう言えば、悠治はインターネットをやつてたな……あの時も、電源切つてたようだし。それで、慌ててたんだと気が付くと、イライラした感情が沸き起つた。

彩華自身に何も悟られないようにしてまで、手を回してパソコンしてたなんてと思うとよけい腹立たしくなつた。彩華はいつも悠治に隠し事などした事なかつたからである。

「なあ、悠治？ そんなに気に掛かつてるんだつたら、彩華の行方捜し俺も手伝つてやろうか？ レコードティングどれだけ掛かるかは判らないけど、力になつてやるよ……」

何故英一が語尾を弱めたのかは解らないが、彩華は、英一が進んで言つてくれた事が有り難かつた。

「有難う」

彩華はにっこりと笑つた。

「でも一つ言つておくからな？ 僕は彩華の為にするんじゃ無い。悠治の為にするんだと言う事忘れないでいて欲しい」

今度は真直ぐ彩華の目を見てそはつきりと言つた。一瞬シリアルにそう言つた英一がどう言つつもりでそう言つたのか不思議だつた。でも、彩華は嬉しかつた。仕事以外でも彩華が英一と一緒にいられるのだと思えたからであつた。

同居三日目。悠治は月島に本場のもんじや焼きを食べに行く計画を立てていた。昨日買いだめしておいた、東京ぶらり歩きのガイドブックを見ながら既に心に決めていたのである。

この日も変装ばっかりで、上から下まで真っ黒な服を身に纏い奈々子を学校に送り届け、自らの時間を有意義に使う。電車を乗り継ぎ一人で近場の旅行。一人と言う時間がまた一段と楽しい。何処でで

も人の目にさらされて来た事を思うと、いう時間つて実は必要だつたんだと改めて思えるほどにその事に思いを馳せた。

ガイドブックで気に入つた店に入る。香ばしい匂いが悠治の心を搔き立てる。早く食べたいなと思った。

もんじや焼きの心得は余り理解して無くて悪戦苦闘していたが、周りを見渡しながら、どうすれば良いのかは把握出来た時にはもう既に籠の使い方は一流だった。

満足した後は、横浜まで足を伸ばした。そして、桜木町の中華街に足を向ける。面白い雑貨が至る所に有り、気に入つたものを買い揃えると中華まんを頬張りながら歩く。

今日はこの中華まんをお供物にしようと思つた。ちょっとばかり贅沢かと思えたけれど。

そして誰も、自分を彩華だとは気が付かない。

悠治は満悦していた。が、ちょっと気に入つたサングラスに手を掛けそれを掛けようとした時、視線が自分に注がれるのに気が付いた。店の中だつた為、直ぐにその場を離れる。その後直ぐさま中華街を離れようと、電車に乗り込む時、何人かが自分を追っかけるように電車に乗り込んで来たのを感じとつた。

実際慌てた。が、どうにか振り切ろうと思つた。まさか、電車の中で乱闘騒ぎは出来ないだろう。そこまで、一般人を巻き込む事は出来ないし、追つ掛けの者達もそのつもりは無いハズだと信じたい。しかし、思惑は外れ駅構内でその乱闘は起きてしまつた。乗り換えの駅で降りたとたん、一気に押し寄せて來たのである。ここは流石にまずいと思い、悠治は駆け出した。事故が起きたらとんでもないと言つその思いから。

そして、あの宣伝の中に「いつ事を想定して忠告しておかなかつた事を後悔した。悠治が後悔などする事は滅多に無い事ではあつたが、それでも流石の悠治もこの状況下に置かれると後悔せざる負えなかつた。

そんな中、一縷の望みは次の電車の中に紛れ込む事だつた。幸い今

日は高いヒールの有る靴は履いていない。だから動きやすい。瞬発力に関しては人一倍自信が有る。それに、細い身体は人込みを搔き分けるには良い。

駆け込み乗車にはなつたが、スルリと発車する直前のドアをすり抜ける。それを追っかけていた何人かが見逃さず乗り込む事は出来たが、混んでいる電車の中までは悠治を探し出す事は出来ない。悠治はその事を考えると、少し安心した。ホッと肩をなで下ろしていた。新宿まで出るとまたもや乗り換え。中央線の電車に乗り込まなければならぬ。そして降りたとたん、また視線を感じた。どうやらその中の数人は諦めた様子はないらしい。中央線の電車まで乗り込んで来た。でも、一応常識は有るらしく、空いた電車の中で事を起す事は思つていないうらしい。安心出来た。そして、八王子で電車を降りると、一目散に改札をくぐり抜け、自転車置き場まで駆け出した。取り敢えずその事でもう追っかけて来るものはいなかつた。でも、ここで自転車に乗つてゐる事で八王子付近に彩華が拠点としている隠れ家がある事はバレてしまつた。

明日からは待ち伏せされる恐れが有る。が、だからと書いて、逃げ出す事は出来ない。それは、奈々子に対する礼儀であると思つてゐる。乱闘に巻き込まれ怪我をした奈々子を放つておいたら自分の沾券に関わる。いい加減だけど、これだけは守りたかつた。だから、直ぐさま奈々子のいる学校に足を向けた。

今日はまだ彩華はここへは訪れていないらしい。しかし、昨日のお供物が有る所を見ると、きちんとこの場所には来ている事は伺える。そして、そのお供物の下に敷かれている紙切れに気が付いた。それを手に取る。

『悠治へ。今何処にいるの？連絡下さい！』

ただそれだけの短い文章だった。連絡取りたがるのはよく分かつている。その辺りの彩華の考えはお見通しだった。でも、悠治はそのまま切れをポケットに押し込み笑っていた。

携帯は自宅に置きっぱなし。絶対連絡が取れないように封じ込めておいた。でも、こいついう形で連絡を取れるようにして来た事は、意外に彩華の頭も回るものだ。と感心はした。だけど悠治は彩華がその足で自分を捜し出さなければならぬようにしてしまった。いつまでも甘えられては困る。彩華は依頼心が強すぎるのだと思つたからであつた。

「さて、行くか！」

悠治は中華街で買い込んだもう既に冷めきつている中華まんを供えると、思う事は他には無いと踵を返し、即座に奈々子とナナの待つ家へと足を向けたのである。

「たつだいまー」「たつだいまー」

夕食の買出しを終えて帰宅した悠治は、奈々子のHプロンを借りてキッチンに直ぐさま足を向ける。

「『めん』『めん』～今すぐ作るからね～お腹減つたっしょ？」

「……野暮用は済んだの？」

「そんなものはすぐ済んだわよ～それより、この海老まだつだね？サラダだけど、オードブルのマコネ風にじょつかなつて思ったのよ

（ふふふ～ん）

鼻歌紛れの彩華は、奈々子の思惑には乗らない。彩華はいつもの通り気持ち良さそうに料理を始める。

少しくらい、本音を吐いても良いのこと思ひ。いくら、ゲーム中だと言つても年下の女の子の……それも自分の事を嫌つてゐるであろう女の子の身の回りの世話なんてしたく無いはずだ。と自分だつたら思う。義務感なんだろうか？でもこの彩華にそんなものを感じる事があるだろうか？どう考へたつてそんな気の利いた事は考えないだろひ。

そんな事を考へていると、宿題が手に付かない。思わずテレビを点けた。

テレビは今のは一コースを放送していた。ちゃんと見なきゃならない事だけど、今はそんな気分じゃ無くて、思わず民放に変えようとしたリモコンのスイッチを切り替えようとした時、自らが住んでいるハ王子の駅前の画像が田に飛び込んで来た。

「え？ 何か事件でもあつたの？」

思わずスイッチを替えることをやめた。

『今日、このハ王子に今話題の彩華が現れて自転車で走り去つた模様です……』

アナウンサーはそんな事を報じていた。奈々子は絶句してその画面とアナウンスを聴いていた。

ワイドショーでも無いこんな一コースに何故彩華のことが報じられているのか？まさか、何か事件を起したの？

料理に夢中の彩華の後ろ姿を田で追つた。でも、今日の彩華はそんな特別な事が有つたようには思えない。野暮用とは言つてたけど、それがそつとは思えないし……

『それでは、目撃者の一人に声を掛けてみました……』

『中華街で彩華を見たんよ。そして追つかけたら、この駅で降りたんすよね』

『追いかけたつて事は、あなたはあの、ゲームの参加者でしょうか？』

『そりっすよ！こんな機会ないしやー始まはマサカって思つたすけど、みんな追い掛けてるしや。これは絶対そつだつて思つたね。で、上手く逃げられたつてわけへちくしょーつて感じつす！』

『では、放送席お願ひします』

画面は既にスタジオに戻つていた。

『彩華旋風つて所でしょーか？まだ大きな事件にはなつていよいですが、始めて三日目ですから、まだこの話題は続く事でしょーね？あちらこちらで田撃証言は有るようですが、当の本人の彩華さんはこの先どうするつもりなのでしょーか？まだまだ日が離せません。では次の事件です……』

奈々子は次の事件の事などもう頭に入つてなかつた。どうしよう？と言つ気持ちの方が大きかつた。まさかこの家まで押しかけたりしないだろーか？そんな事になつたら、対処しきれない。

「彩華！今日中華街行つて來た？」

次の瞬間、直ぐさま奈々子は問ひ掛けた。料理が出来たのか、彩華はお盆に乗せそれを運んで來た。良い匂いがする。

「あ、行つて來たよー凄いわね。何で分かつたの？」

「今、ニュースで報じられていたわよーそれも、八王子駅まで…どうする気なー！」

奈々子は、バれないようにするからと言つ条件付きで彩華を受け入れた。でも、こうなつたら、『ウカウカ』出来ない。「ニュースで？ありやまた困つたねーあ、冷めないうちにどうぞ？」絨毯の上に正座すると、彩華は箸を操り既に食べるモードに入つている。緊張感なんて微塵も感じられない。そんなのんびりした彩華に思わず乗せられて、

「あ、そうだね……」

一口炊き込み御飯を口にする。

「美味しい……じゃなくて！バレたら、ここにまで押し駆けて来るじゃない！」

乗せられてしまつた奈々子は、そんな彩華の様子に苛立つたかのように返した。が、全く気にしていない様子である。

「奈々子は～私を追い出したい？」

突然目を瞬かせて懇願するような視線を奈々子に向けてきた。これは、彩華の罠だと思ったが、ここを直ぐに出ていけなんて言える訳ない。追い出して困るのは奈々子自身だ。

「迫り出したい訳じや無いけど……その……田立たなによつに行動出来ない？」

一体外での彩華はどう振る舞つているんだろう？自分の知らない、目の届かない所での彩華は？

「田立たないよつに行動してゐるんだけどなあ～滲み出でるのかしら？」

「あたしには、変装してるとこから既に田立つてゐると思つけど？普通の服着たら？その方が溶け込めると思つけど……」

「普通の服ねえ～」

食事の途中で、彩華は自らの服を取り出し始めた。

「これなんかは？」

「……」

「じゃあ、これ？」

「……彩華？訊いたあたしが莫迦だつたわ」

どの服も普通の服には思えなかつた。

「うーん。もう外出禁止にしようか？」

奈々子は頭が痛かつた。

「外出禁止になつたら、奈々子を送り迎え出来なくなるわよ～私は嫌だもん！」

それもそうだ。彩華の言つ事は正しい。

「じゃあ、せめてここ、八王子から出ない事にしたら？」

「それは無理。私はそんな事出来ないもん。色々用事もある訳だし？」

既に開き直り始めているらしい様に見えているかも知れないが、悠

治には大事な毎日の日課が有る。

「そんなに出なきやならないの？大人しく静かにしておけば良いだけじゃない？」

奈々子はそんな彩華になんとか思いとどめられる事を考えてもらつたかったが、そつ言ひ訳には行かないらしい事は分かつた。それが野暮用なのだろう。

「やりたい事はやらなきゃ勿体無いじゃない？」

「勿体無いつて……人生長いんだよ？まさか、不治の病とかいうんじゃないよね？」

嫌味のつもりだったが、

「そんな所かも知れないなあ～人生長いようで短いんだもんね～樂しむ事はいつでもマジでやりたいのよ」

不治の病なんてのは嘘だらう事はすぐに解る。ただの言葉のアヤであろう。だけど奈々子には解らない。何をそんなに思つ事が有るんだろう？

でも、悠治は彩華としての今の自分の姿が後一ヶ月を切つている事を知つてゐる。今が正念場だ。自分と彩華の問題は解決出来ていない。それにまだ、この場所を突き止められた訳ではない。ギリギリまでこの生活を楽しみたい

気分だった。

「大丈夫よ。奈々子は何も考えずにいて良いよ。私は何とでもなるからさ？」

悠治は再び食事を摂る事にした。これ以上言つても水掛け論だと察していた。

その事は、このゲームの被害者である奈々子にも判つてゐる。だけど、間違つてゐると思う。キスで……、ゲームなんかで自分の好きになる相手を決めるなんておかしい。一体彩華の頭の中はどうなつてゐるのであるうか？もしかしたら、エイリアン？地球外生物なのではなかろうか？

そこまで考えていた時、ふと我に返つた。何で、このあたしが彩華

のことを心配しなくちゃならないんだろう？ そうだ、今こいついう事になつてゐる時点で、迷惑を被つてるのは奈々子自身だ。怪我させられて、家にまで人を入れ込んで。

そりやまあ、彩華の御飯は美味しいし、勉強見てもらえるし。得してないとはいいけないが、奈々子にとつてみれば、恋敵みたいなものである。それなのに何故？

食事を摂りながら考えてはみるが、全くその答えは出て来はしない。そんな奈々子に気が付いてないのか？ 彩華は色々な事を話し掛け来る。奈々子はその事に適当に答えてはいたが心はそこには無かつた。

彩華のことを、受け入れている？ それとも、気に掛けている？ 何でこんな気持ちになつているのよ！ 奈々子は、混乱した頭で片づけら
れている食器類を目で追つていた。

悠治、来たんだ……お決まりの苺大福は無かつたが、彩華は、夜にこのお地蔵様の所に来て悟つた。手紙が無いからであつた。なのに、それに対する返事は何処を見ても無い。徐に自らのズボンに隠し持つてゐる携帯の着信を見てみても、悠治からのものはなかつた。意地でも彩華には逢いたくは無いらしいし、連絡を取るつもりも無いらしい事がこれではつきりした。

「何考へてるのよ！ あの莫迦！」

一瞬そう叫びそうになつたが、突然の着信に気が付き、受話器をとつた。思わず携帯を落つことしそうになつた。

「もしもし、悠治か？」

着信の名前と、その声で直ぐに英一だと分かつた。

「今話して大丈夫か？」

「あ、うん。外に出てるけど大丈夫だよ？ ビツしたの？」
さつきまでの憤りが消え失せていた。

「あのな、彩華がハ王子駅周辺に現れたつて事だぜ？ ニュースで言つてたから確かな情報だろう。ネットでも大騒ぎみたいだな」

「は、ハ王子？ 何でそんな場所に、ゆ……彩華が？」

思わず悠治と言ってしまった。そうになつた。

「さあな？ 自転車で逃走した所を見ること、その辺りに隠れてるんだ

もつた」 悠治？ 行つてみるか？ 付き合つぜ？」

「あ、…………うん。 そうしたいけど、明日から」「三田は僕の学校試験なんだよ……」

「あ、期末試験か……そつまつ時期だものな。じゃあ、俺が行つて張り込んで来ようか？」

「でも、英一の学校は？ 試験無いの？ 単位は？」

何だか気が引ける。これは悠治との問題なのに…… そんな形で、ましてや彩華がやらなければならない事なの。」

「俺の方は試験来週からだからな。別に問題は無こと。悠治に問題なければ、明日からハ王子駅周辺を当たつてみるよ」

「でも、悪くない？ せつかくの学園生活だろ？ 僕がいる訳でも無いのに、そんな……」

「悠治に問題無いんだつたら、気にするなよ？」 これは俺がかつて出てるんだ。気にしなきゃならないのはもつと他に有るぜ？ 彩華とられてしまつよりは、良い事だろ？」

英一は、彩華の想いを知らない。だからこんな事を言つてしまえるんだろ？ …… ちょっと切なくなつた。

「あと、言つておかなきゃならない事もある。俺…………お前の事が好きなんだぜ？」

「え？」

耳を疑つた。今なんて言つた？

「一度言わせるなよ…………だから、お前が好きなんだつてば」

「え？ ……えへへ？」

突然の告白に訳が解らなくなつた。それは、恋愛対象として言つているのか？ それとも友情なのか？

「それって、告白してるつて事…………なのかな？ 僕、男だよ…………いや、中身は女なんだけど……」

「三度聴きたいのか？安っぽくなるぜ？」

「でも……変じや無い……？英二一いつて、男が好きなの？」

「……お前だから好きなの！」こちだつて悩んでたんだ。でも彩華には取られたく無いつて気持ちの方が勝つて……今言つておかないと、何だか取り返しが付かない気がしてな。それに、お前が悩んでいるのを考えると、悠治は彩華が好きなんだろう事は、一目瞭然だし？で、お前の気持ちを知りたい。嘘は付くなよな？」

「ほ、僕は……」

言つてしまつて良いんだろうか？でもこんなのは変だし……彩華の心は揺さぶられた。心は両思いなのに、嬉しく感じられない。それは、悠治の皮を被つていいからなのか？

この先、入れ替わつた時、英二は悠治を好きになつたままでいる事になるんだろうか？そんなのは許せない。し、悠治もそんな事は望んで無いだろう。返事が出来ない。でも今しておかないと、この先こんな話をできる機会は無いかも知れない。

「僕は、その……彩華のことは……何とも思つて無い事は確かだよ。それ以上の事は何も言えないけど。でも、英二の事は好きだよ。友人として……でも、解らない……何て言えば良いのか……」

最善の事を言おうとして自分でもこんがらがつた。こんな時、悠治がいたら何て言うだろう？自分を上手く操る事ができる悠治なら？一体どう対処するだろう？そう言えれば、悠治から恋愛の相談なんてされた事など無い。その必要性が無かつたからなのかな？それとも、自分で解決して来たのだろうか？自分が知らない悠治がいる事に気が付き、少し虚しく感じられた。

「悠治？困つているのか？……悪かつたな。でも、今言つておかないと、こちらの気持ちを彩華にぶつけそうなんだ……それだけは分かっていて欲しい。女に焼きもち焼くなんて変だよな？ははは……乾いた笑い声だった。

「良いよ。今の言葉で十分だ。明日から暫くの間、彩華を張つてみる。じゃあ、また連絡する」

「あ、うん……ありがとつ

結局、自分ではどうする事も出来ず、英一が話を切り替えてくれた。自分の性格を知っているからだとそう感じると、よけいやるせなかつた。

何でこんな事になつたんだる? 今まま自分が悠治として生きたら、英一は自分の事を愛してくれるのか? だつたら、今までも良い事なかも知れない。

でも、それには覚悟が必要だ。自分はもう彩華として生きて行く事は出来ない、そんなのは嫌だ。

「悠治……聴いて欲しい事がたくさん有るのに……」

彩華は天を覆う星空を一度見上げて、そして家路を急いだのである。

#1-2 探偵・アンティーケ・ゲーム

四日目。それは昨日と何も変わらない朝だった。忙しそうに朝御飯を用意してくれる彩華は、今日の予定を考えながらイソイソしている。

「今日も出かけるの？」

「そうね～ちょっと出かけるかも～駅前にアンティック屋さん有りでしょ。結構店構えがイケてるし？そこでお買い物～奈々子つて、ゴスロリ系つしょ。そう言うので私が見繕つて買って来てあげるよ」「買って来てもらつても、使えるものにしてね……彩華のセンスってちょっとと考えものだもの……」

「まあ～！失礼ねえ～この私のセンスを疑うの？」

「今着ているもの考えれば、誰でも疑うわよ」

今日の彩華は、ヒップピー系の服装をしている。この服装から考えて、ゴスロリを理解出来るとは思えないからだ。

「ゴスロリは確かに理解出来て無いわよ？でも、奈々子に似合う物を買つてくれれば言い訳じゃ無い？簡単、簡単！」

「簡単つて……」

奈々子はそこまで言つて口を噤んだ。確かに変な格好をする彩華ではあるが、これでもモデルでデビューしてる訳で。着こなしあは上手い。センスが無ければあの業界で生きて行く事なんて出来ないはずだ。

「良いよ。任せわ」

結局奈々子は肯定した。それに昨日の今日で、遠出するような事はしそうに無い。ホッとしているのも確かだった。

「じゃあ、決まりね！さあ、学校急こう！」

彩華はそつと決まつたら奈々子をおぶつてドアを開けた。また一日が始まる。

悠治は奈々子を送り届けたその足で、駅前近くに有るアンティークショッピングを訪問した。外觀は今時の子達の心を搔き立てるような店構え。思わず足を踏み出した。が、オープンするまでに時間がまだ有る。考えてみたら、普通お店って言うのは十時から開くものであつて……今はまだ八時前。仕方ないので、一度奈々子の家に戻り洗濯物をし、ナナの世話をして出直す事にした。

再び訪れた時は、もう人がその店に足を運んでいた。悠治も負けじとその中に入ると、色々な物を見て回る。しかし、今一つこれと思うものが無かつた。外觀と人の入り具合に惑わされたなと思い、仕方なく中央線に乗り、吉祥寺駅まで出る事にした。あの南口からさほど行かない所に、確か良いアンティークショッピングが在ったなと思い出したからである。

しかし、その背後に彩華のゲーム参加者が目を光らせていた事など思いもしなかつたのである。

悠々自適に奈々子の言い付けなど忘れて少し遠出をしてしまった悠治は電車に揺られながら、イメージを膨らませていた。こういう時間は楽しい。他人の為に何かをプレゼントするつて言う楽しみはなかなか味わえなかつた。

今までこういう事が無かつた訳では無い。彩華に何かプレゼントをと考へるが、しかし、イマイチピンと来るものが無かつた。それは、自分の姿をしている彩華であつたからかも知れない。

でも今度は違う。ちゃんとした女の子だ。だから、イメージがすんなり出て来ていた。それも、ゴスロリ好きと言つハツキリ趣味が判る子だからかも知れない。

電車は目的地へと着く。悠治はすぐに腰を上げ南口から街に降りようとしたその時、

「彩華！いざ！」

数人の男どもが後方から走り込んで悠治の回りを取り囲んだ。

「もしかして、ゲームの？駅がバレちゃ仕方ないわね～で、ここで

やる？それとももつと広い所に行きましょうか？」

周りを見回す。ロータリーこそ無いが、狭い道に建物が並んでいるここでは対処出来そうもない。

「人の迷惑つてのも有るのよね～井の頭公園まで走って行こうか？」
と言つと、直ぐさま先を目指して走り込んだ。

男どもは我先にとその後を追う。そしてその影に隠れて変装した英一が後を追つた。

「！」まで来れば、ゲーム出来るわね？じゃあ、スタート！」

彩華は以前と同じくサングラスと上着を取ると、軽快に立ち回りする。今回は、力自慢の者が多く苦戦氣味だったが、自ら築いて来た技で全てなぎ倒し、顔に思いつき『×』印を付けてやつた。

所々、傷が出来て血が滲み出ているが、そんな事感じる暇も無い。この騒ぎに参加者が増えて来た為である。英一は、その乱闘騒ぎを直視していた。

「見かけと違つて勢い有る奴だなあ～まあ、この調子だと先が解るな」

その予想に反せず、悠治は全ての挑戦者に『×』を付け終わつた。
考えてみると、渋谷での路上のゲームより激しかつたような？

「はい。お終い～残念だったわね？もつ、挑戦は出来ないわよ？心してその顔を毎日見る事ね？」

せせら笑いながら悠治は、もと来た道を戻る。そして、目的を思い出し、店探しを始めた。記憶を辿りながら……

そんな、悠治の後を英一は気付かれないように追い掛ける。何だか探偵にもなつた氣分だった。が、これも悠治の為だと思うと、彩華の行動を観察しなければならない。ある意味これは重要な任務なのである。

「有つた～ここだ！」

店の建物自体は古びているが、中は色んな貴重品を扱っている。悠

治自身も何度も訪れた事がある。ある意味お気に入りのお店だ。そして色々見て回った時、ある一点に目を引かれた。

「これ良い！絶対奈々子に似合つよ！」

ボソリとこぼしながら、悠治は自分で試着してみた。首回りピッタシの黒色のリボンの先に、十字架が施されているチョーカー。一見何て事ないかも知れないが、銀色の十字架の装飾が精密で綺麗に施されている。

「これにしよう！」

悠治は楽しそうに何度もヒツピー姿でそのチョーカーを身に着けている。その様子を英一は不思議そうに隠れて見ていた。

『何故あの格好で、チョーカー？』

疑問が溢れて来る。あの服装には絶対合わないとそう思つたからである。というか、彩華には似合わない品物だ。もしかしたら、誰かにプレゼントするのか？それなら納得出来る。

物陰から見ていた英一ではあつたが、お勘定を終えて店から出て来る彩華に気が付き、直ぐさま身を隠す。

『バレては無いよつだな？』

確信を持つと、彩華がまた吉祥寺を離れんとして電車に乗り込むのを見届け、その後、隣の車両に乗つて追つた。

彩華は真直ぐハ王子駅で下車した。英一もその後を追う。すると、時間を気にしているのか？彩華は腕時計を見ていた。そして、近くのスーパーに足を運んだのに気が付き、慌ててその後を追う。

『人参に、ジャガイモ、牛肉に玉葱……と』

この食材で何を作るかは料理をしない英一にもすぐに分かった。カレーか、シチュー。でも、シチューって事はあり得ないだろう。季節はもう夏に入ろうとしている。

キャッシュマーでお金を払つと、普通に袋に詰め込み、そのまま店を出た。警戒心が無いのか、あちこちの店並みを見ながら行動している。そしてまた時計を見ている。何か用事でも有るのであらうか？

それとも約束？英二は何度も彩華の後ろを気にしながら歩く。すると、近くの自営の本屋に入った。

ここでは、雑誌を片っ端から読み漁っていた。ジックと隠れて観察する訳にもいかないし、英二も近場にあつた雑誌を手に取り読む振りをしながら観察する。時間はもう四時前になつていて。昼食も摂らず、彩華は平然としている。お腹は空かないのか？普通摂る物を摂らないと、人間イライラするものだが、どうやらそう言う様子も無い。ただジックと熱心にのめり込んでいる。が、また時計を見ると慌てるかのように、店を出て行つた。英二もその後を慌てて飛び出した。

彩華は、そのまま駅近くに止めていた自転車に跨がると、買い物袋を前籠に乗せ走り出した。英二はたまたまその道脇に止まっているタクシーを呼んで、彩華の後を追うように促した。

一体彼女は何処に行くと言つのだらう？これは、興味でも有り、悠治の為の捜索だ。

別段問題は無いのだが、何故かこのまま追いかけていいものだらうか悩む。でも、ここまでやつてしまつたからには、最期までやり遂げなければ……その一念で彩華を追つた。すると、彩華が近くの学校の門をぐぐり抜けて入つて行く所を確認し、タクシーを止め、そこで降りる。

校門の所には『美空学園』という名前が刻まれていた。

流石に中に侵入する訳にも行かず、その場で彩華が出て来るまで待つていた。そんな中数十人の生徒達がゾロゾロと出て来る。ここは私服可龍な学校なんだと思い少し安心した。なるべく目立たないよう気を配りながら、時々中を覗き込む。サングラスだけの変装だけど、自分が英二であるという事は誰も気付かないようだったのでホッと思を吐く。

それから待つ事二十分。彩華が自転車に、一人の女の子を乗せ、出て来たのを確認する。素早く走り出て来たので、その後を追い掛け

る事は出来なかつたが、情報を得る事はできる。その後から出て来た一人の生徒に、今出て来た二人の女性は誰なのか？それを尋ねると、

「ああ、あの子？うちのクラスの桐原奈々子って言つ子で、運転してたのはそのお姉さんだつてさ～何か奈々子が怪我したとかで、ここん所ずっと送り迎えしてもらつてるつてさ～お姉さんスッジへ面白い人でさ～」

たまたま問い合わせた女生徒が同じクラスの子ドライミングは良かつた。色々と情報がとれる。が、

「ねえ、お兄さん。英一に似てるつて言われない？」

ヤバいと思いそれ以上は問い合わせず、英一は近くにある公道にてタクシーを拾つた。

何故、嘘を付いてまでこんな事をしているのか？彩華に妹がいるなんて話は聞いた事は無い。何かを隠しているのだと思つ。怪我している、その桐原奈々子という女の子の為に、わざわざ動いていると言つ事は、それなりの事が有つたはずだ。

タクシーの中で、色々考えていたが結論的には、彩華と桐原奈々子に怪我と言つ共通点で接する何かが有つた事だけは伺つ事は出来たのである。

「はい！プレゼント～」

彩華は、わざわざ買つて來たチョーカーを奈々子に手渡した。

「あ、この装飾、素敵～！」

中を開けて取り出した瞬間、奈々子は喜んで身に着けようとしたが、

「でも、これ、本当に良いの？買つて……」

「その為に買つてきたんじゃない！着けてみせてよ～一田でこのチヨーカー奈々子に合つなかつて思つたのよ？白黒白黒～」

「あ、ありがとう」

奈々子は嬉しそうにそのチヨーカーを身に着けてみる。今日の黒いフリルの服にも合つ。そう思った。

「彩華。センス良いね～何で分かつちゃうんだり？～」

「悔るなれ！私を誰だと思っているの？」

鏡の前に座っている奈々子の後ろに立つて、彩華は腰に手を掛け納得した表情でニコニコ笑っている。鏡越しでその様子が分かつた。ので、ちょっと照れくさかつた。今の私の顔、笑っていたものね……バレちゃったかな？素直に喜んでるの……

「さて、夕食の準備するね～あ、その前に洗濯物入れなきゃ～ナナ、ちょっと退いてね？」

奈々子の恥ずかしい表情を汲んでか、彩華はバタバタ動き始める。「判つてゐみたいだね……」

同居生活まだ始まつたばかりで、こんなに身近に感じるなんて、嬉しいのか悔しいのか、もう解らなくなつて來たけど、奈々子は、この彩華を完全に受け入れていた。嫌つていたのは事実だけど、本物はこんな人なんだつて知つた時から本当はもう受け入れていたのかも知れない。

実際、暴言は色々吐いて來た。でも、彩華はそんな言葉にも動じない。『じく自然に（ちょっと問題ない所が無いとは言い切れないが）接する事ができる。

その内、彩華に自分の本当の気持ちが話せる事があるだろうか？友達の一人として接する事が可能かどうか？ちょっと考えて、試験勉強の用意をし始める奈々子であった。

「夕飯出来たよ～今日はカレーとポテトサラダでい！」

一時勉強を中断して、テーブルを挟み二人は晩御飯を食べはじめる。そして、ちょっとテレビを点ける事にした。

『本日、この吉祥寺で、彩華のゲームが繰り広げられる事件が有りました……』

ニュースの時間だった。アナウンサーは、流暢に話している。その事件を知り、奈々子は思わず口の中の物を吹き出しそうになつた。

「彩華！」

「……はい」

奈々子に釘を刺されていた事をこじでばらされてしまった。彩華は取り繕うように、

「だつてさ～あのお店、私がこれって思う物が揃つて無かつたんだもの～」

言い訳がこうだと奈々子も怒る気が失せるが、ふと、奈々子は彩華の腕と手を見る。

「何？怪我してるの？」

所々切り傷、擦り傷が目に入った。

「何で事ないよ～仕事中つて訳じやなし？このくらいゲーム挑んだんだから当たり前っしょ？」

のほほ～んとしている彩華の顔を見て、一言引導を渡した。

「明日から外出禁止！絶対禁止！何が有つても禁止！」

「えーっじゃあ、奈々子の送り迎えは～？」

「……それ以外禁止！」

「買い物あるじやん！」

「買い物は許す！でも、直ぐそこのスーパーで！」

奈々子の顔が見る見る真っ赤になつていた。

「じゃあ、分かった……そうする……」

バツが悪くなつて、悠治はそれを受け入れた。けど、隠れて何かしようつて思つていた。奈々子の目が届かない範囲で……

まず、地蔵の所には行かなければならぬ。奈々子を早く寝かしつけて、または早朝の行動。これだけは何が有つても欠かす事は出来ない。

「何か企んでても、絶対阻止してみせるわよ～あたしをなめないよう！」

「へいへい」

とにかく、返事だけは返してきた。

奈々子にしてみたら、実際土日しか彩華の行動を見守る事など出来ない。その他は、学校が有る。見届ける事は出来ない。分かってい

るけど心配になる。大怪殺でもしたら……

「そりゃ。捻挫少し良くなつたみたい！」

そこまで考えて、奈々子は話を摩り替えた。

「どう？ 肿れが引いて来たんだよ？ びつこはひくけどや。見て？ ちよつとずつだつたら歩けるの！」

食事が終わった奈々子は、その場に立ち上がり彩華の横に座つて足首を見せる。

「あ、本当、大分良くなつたね～」

足首の腫れが目立たなくなつて来ているのに『仮』が付き、彩華は田を見開いて喜んでいた。

「彩華さ～リハビリがてらに、少しずつ歩く練習したいの。土日付き合つてもらえるかな～？」

「あ、うん良じよ……でもどうする？ 買い物とかだったら、歩いても平気かな？」

「そうだね。ジッと家に籠つているのもなんだし、気分転換がてらにそうしようか？……で、彩華に訊きたい事があるの」

突然の事だけど、後一週間余りすれば彩華はここを出て行く。その前に訊いておきたい事があった。

「どうしてこんなゲームしてるの？」

奈々子は再び隠さず、单刀直入に訊いた。

「ゲーム……そうね～氣分が向いたら奈々子には話してあげるよ」

と、悠治ははぐらかし、食べ終わった食器を片し始めた。

まだ話す事は出来ない。でも、いつかこの事は奈々子には話しても良いと思つていた。

「試験明日からでしょ？ 一夜漬けの！」

でも、ちょっと嫌がらせを言つてみる。

「悪ついでござましたね……一夜漬けで！」

ツンツンとそつぽを向く。でも、自分から話してくれるなんて言いつとは思わなかつた。だから、心中でクスリと笑つて試験勉強に熱中する事にした。

「……と、面うり具合なんだ」

その頃の彩華は、英一からの情報を入手していた。試験勉強中だつたけど、この電話はすぐに取り上げて聴いた。

「桐原奈々子さん?……そんな子、彩華の回りでは聞いた事無いけど……一応中学校には行つてみることにするよ。でも、当分先になつちゃうな。試験は一日で終わるけど、来週月曜は仕事有るじゃん……張るのは、火曜日だね」

「俺は来週から試験だから付き合えないけど、一人で大丈夫か?」

「僕と彩華は幼馴染みなんだよ?直接会えば何とかなるだろ?と思つよ」

思つよじや無くて、何とかしなければならない。もづ、その時の事を考へると悠治を一発殴らないと気が済まないだろ?なーとか思いながら受話器を握りしめていた。

「ありがとう。英一……迷惑掛けたさ?」

「言いつこ無しだぜ?」ひちは悠治の為にやつてている事だしさ。気にすんなよ?」

「うん。じゃあ、またね。英一も試験勉強頑張つて。おやすみ」携帯の電源を切り、彩華はホツと息を吐いた。ま、女の子と釣るんでいる限りは問題が無い。ただ、問題はゲームの事だつた。

今日も、吉祥寺で一騒動が有つた。このままじゃあ、身を減ぼす事になりそうだ。今はまだ何とかなつていてるかも知れないが、これから先、何かとんでもない事に巻き込まれそうな予感がする。とてつも無い不安。

その勘は当つていた。この一ヶ月の間に待ち受ける最大最悪の大きな壁として……

五日目。それは悠治にとって退屈な日であった。始発でお地蔵様の所まで行つた以外は、ずっと奈々子の家に籠りっぱなしであった。昨日の夜、奈々子が試験勉強を終えて寝入るまで、起きて最終の電車でお地蔵様の所に行つた。だから、寝不足気味で朝は隈を作つた目元隠しの為とも言わんばかりに、サングラスをかけて出掛けた。御供えされている供物を見詰めながら考えてみると、彩華と会わない時間が気にならない自分がいる事に気が付く。好きなはずだった。それなのに、こんなに離れているのに、会わないでいるのに何故気にならないのだろう？

帰りの電車に揺られながら色々と思いを巡らせる。しかし答えは出る事が無い。そして、奈々子を学校に送り届け、朝御飯の片づけ、洗濯物を終わらせ家のんびりとお茶を濁らせている今、またその事を思い巡らせていた。

僕は、本当に彩華を好きなのか？ただ、幼馴染みの延長でそう思い込んでいただけなのではないだろうか……放つとけない子をただ心配して。

そう考へていて今の環境だつて、奈々子を心配している訳で。僕はお人好しなのでは無かるうか？とさえ思つ。窓から差し込んで来る陽の光が眩しくて、そして、悠然とただそこにある空の青さが心地よくて、思わずそれを見上げながら絨毯の上に大の字で寝つ転がる。「外に出たいなあ～」

思わず零してしまつた。ここまで天気が良いと外に出たくなる虫が悠治の心を搔きぶる。そしてスクッと起き上がり、自転車の鍵と家の鍵を持つて、まだ買い出しには早いが、出かけようと動こうとした時、部屋の中の一点に視線が集中した。

ナナが或る物を手で引っ搔こうとしている。

「奈々子……生徒手帳忘れて行ったんだ……」

ベッドの横に転がり落ちている手帳を手に取った。

今思い出してみると、これが引き金だったんだよなあ～とクスクス笑つた。

一ページ目を開いた。奈々子の写真と名前が記載されたページ。自分を見てもらおうと考えて思い付いたのが名前を呼ぼう作戦。すぐに反応してくれた。あの時は、写真を見てしまい直ぐ閉じてしまつたけど、今はこれをじっくりと見る事ができる。

次のページには、校歌が載つていて。まあ、何処の学校の生徒手帳もこんな物だ。そして次のページからは、校則などの事を事細かく書き記されている。

悠治はいつの間にか出掛けた事も忘れて、じっくり腰を下ろしナナに手を掛けながらベッドに寄り掛かつてその生徒手帳を読み始めた。実際、悠治が通つていた中学校に比べれば羨ましくなるほど校則が緩い。制服じゃ無くても良いし、髪型だつて自由。今思い出してみれば、奈々子のクラスの子達は、個性溢れる感じだつた。髪の毛の色、服装。全てが自由で、この学校に入つて慣れてきたら後ろ姿を見ただけでもそれが誰かつて事が判るだろう。それに、バイトも可。と言つ学校は少ないのであろう。校則の厳しい学校を出た者であれば憧れて当然だろうなと思える。

そして生徒手帳を隅々まで見て納得した。

それから、見て行く先に現れた写真。あの時すぐに隠した写真を再び手に取つた。あの時は、彼氏かなと思つたけど、学校に送り迎えしている際、この人物を目にした事は無い。彼氏と言つ訳では無いんだと思つとシゲシゲと見直してみる。奈々子が好きな子何だらうなあ～。とか思いはそつちに傾いた。

小綺麗な服装に、整つた顔立ち。淡い茶色がかつた髪の毛が陽の下で撮られた写真であるから、綺麗に煌いている。優等生っぽいけど、センスは良さそうだ。もしかして隠し撮りか何かかな？一人だけ映つていて写真だもんな～あの時気付けば良かつたかな？彼氏だつたら、一緒に写つてるはずだし。

そして、思い出せる全ての事を思い返していた。あの騒動が起きた時、自分の事を嫌いだつて罵つた時、奈々子は何を口走つてた？初恋がどうとか？余りにも昔の事に感じられ、ハツキリとは思い出せない。でも、あの言葉は確かに自分に対する嫌悪であつたはず。この子と彩華としての自分。何がどうして繋がるのか？その辺りまではつきり掴み取る事は出来ない。

そして、その写真を元の所に挟み込もうとした時、指先がぞりりとした。裏を見ると、名前が書き込まれていた。

「岸田明彦……か」

その名前を書き込んだのは奈々子であろう。少しおみが有る、癖の有る字に見覚えが有つたから。

そして、その写真を表にして見返した。だんだん何故だか腹が立て来る自分に気が付き、あれ？と思い返した。これって、嫉妬なのでは無いだろうか？彩華が英一を好きなんだと言つて相談して来た時と同じ感情。だけど、あれ？変だなあ～あの時とはちょっとだけ感情が違う気がする。不安。何でこんな気持ちになつているんだろうか？奈々子とはまだ会つて五日目だぞ？だんだんとイライラして来る。そして、胡座をかいだ膝の上に腕をつき考え込んでいた。

彩華は、自分と魂を入れ替わつてからと言うものの、鏡を見て話をしている感じで……幼い頃から知つていて、今まで好きだったからと言う思いだけで接して來た。だから、これは今では義務感として思い込んで來た事だったのか？彩華はどんぐさいし、頼り無いし、自分で自分の事を上手く表現出来ないし。そんなところが可愛いし、助けてやろうつて気になつっていた。ような気がして來た。

でも奈々子はどうだ？確かに、器用な所は無さそうだけど、言いたい事は言つし、悠治自身に首を突つ込んで来るし、ダメな事はダメとはつきり意思表示してくれる。それは、悠治を独りの人間として前向きに接してくれている訳で……何だかそれを考えていると嬉しく思う。悠治はウキウキしているのが分かつた。

そして、改めて心を整理し直して、奈々子のテーブルの上にあるペ

ン立てからボールペンを取り上げると、生徒手帳の一一番後ろに有るメモ用に用意されている項にペンを走らせたのである。そして書き終えると、立ち上がった。

「さて買い物に出しに行って来るか～」

一つ伸びをしてゆっくり足を動かした。外は快晴。思い切つて玄関の戸を開ける。そして、鍵を掛け自転車置き場まで向った。

#14 英一？悠治？

六日目、七日目は土日。奈々子は試験も終わり、後は夏休みを待つばかりという状況である。

「買い物、直ぐそのスーパーまで行こうか？」

リフレッシュした奈々子の心が手に取るようで、悠治は少し気が楽であった。

「痛くなつたら、ちゃんと言うのよ！」

「分かつてるって！でも、リハビリは必要でしょ？少しふらーい無理しないとダメじゃん？」

久し振りの外出に奈々子は上機嫌で悠治の横に並んで歩いている。改めて見ると、本当に小さい子だなつて思う。人込みの中で捜すのは苦労するかもなあ」とか勝手に想像していた。

「駅前はヤバイからね。このくらいが一番安心出来るよね？」

奈々子は心の中で、彩華には黙っているけど、一週間の同居生活を思いきり楽しみたいと考えていた。そして、彩華の本当の気持ちを訊いてみたいとも思つていた。気持ちと言つよりも、真実を知りたい。もっと彩華を知りたいと思つていたのである。

「今日は何にする？」

「中華料理が食べたいなあ～」

甘えるのも良い。それを上手く聞いてくれる彩華は、聞き上手。何でもできるくせに、阿呆な事ばかりしている。でも、そう言つ彩華が面白くて……飽きる事なんてあり得ない。

「中華か～簡単な物でも良い？」

「うん。任せる！」

友人としてこの人を一人占め出来る自分が、とても恵まれているなんて思える。

今までは、恋敵としか思つてなかつたのが嘘のよう。芸能人でも人は人だと思えるし、何より飾らない彩華の性格が好きなのだと改め

て思ひ。

もし、彩華が芸能人で無くても、その気持ちは変わらないであろう。そう考へると、今までの自分が凄くちっぽけな存在だつたんだなって思える。そして、心の中で「ごめんなさい」と謝れる。決して口には出せないけれど。

「どう? 足は……」

「うん。 平氣く 帰りまでもちゃんと歩くよ!」

スーパーの中を歩き回つて本当は痛く無いって事は無いけれど、我慢出来ない事は無い。何よりこの時間が楽しい。彩華と色々な物を見て回つて、食材を選ぶ事が出来るなんて思つて無かつた。

一人してあれこれと買い込むと、キャッシュカードでお金を払い外に出る。一日一日が早く過ぎて行く。もうこのまま彩華が自分と一緒にいてくれる事が出来るなら、何もいらないのだとさえ思える程、奈々子は彩華といふ時間を大切にしたかった。家族とも思える。お互い隠し事は有るけれど、でも、それでも、彩華は一番の友達だと思っていた。

八日目。その日もいつもと変わらない日が過ぎて行く。月曜だから奈々子は学校に行った。帰りはちゃんと彩華が迎えに来る。クラスメイトは、もう彩華に解け込んでいた。彩華の変わった服装に目を見はらせながら「冗談を飛ばしている。

「お姉さん本当、面白い人だねー!でも、桐原さんには似て無いんだ?」

察しの良い子は不思議そうに彩華と奈々子を見比べたりしている。

「奈々子は可愛い子だから自慢の妹なの~」

それを見越して彩華はフォローする。

「似て無い姉妹なんて山ほどいるしじょ? 皆が皆似てたら、気持ち悪いじゃん? あはは」

そして、クラスメイトとの団欒が終わると、奈々子を自転車に乗せて帰宅する。

「試験結果出たの～見て見て～今日は前より良い点数だったのよ～。百点と言つ訳じゃ無いけれど、奈々子にとつては良い点数なのであるわ。

「彩華が指導してくれたからかも知れない。ありがとウ～。」
いつに無く上機嫌で奈々子は笑つている。

「奈々子も受験生だものね～頑張らないとね？」

「そうなのよね～気が重いなあ～あ、そつ言えば彩華は何処の高校なの？」

そんな個人的な話はした事無かつたけど、訊いてみる価値は有る。

「大東高校だよ」

「大東高校か～都立だね？彩華くらい頭良かつたら私立くらい受けているのかと思つた…」

意外な高校だなと思う。そのくらいだつたら、奈々子も受けた受からない事は無い。レベル的には中の下にランクインしている学校だからである。

「幼馴染みがそこ受けたから。それに、単位は適当にくれるしむ～芸能活動もしやすいの」

それを聞いて、なるほどなつて思つ。

「あたしも、来年そこ受けるよ～その頃には、流石に両親の件も片付いてるだらうしさ？」

まだまだ、働くつもりは無い。それに、彩華がいる学校だつたら、楽しいだらうなつて思えたからそつ言つた。

「そうよね～同じ学校にいたら、会う機会多くなるものね……」

ちょっと悠治は寂しい気持ちになる。奈々子は彩華としての自分に好意を示しているし、もし入れ替わりが完了してしまつた時、悠治でいる自分に心を寄せてくれるかどうかなんて解らない。悠治として会つた事など無いのだから。

「あ、今日歌番組が有る日だね～チャンネル変えて良い？」

「あ、うん」

夕飯を終えてのんびりしていると、二つの間にか八時になつていた。

「本日は、今人気沸騰中ランギング一位のジョイズのお一方に来て頂きました~」

司会の男がそんな事を言っていた。そんな司会に、これ録画番組だろ~と突っ込みを入れたかった。が、敢えて言わなかつた。そんな悠治に、

「そう言えばや、彩華？英一に恨みでも有つたの？」

「え？」

「だつて、ほら~出逢つた田、英一にだけすつこ落書きしてたじやない？」

今頃思い出した。確かに英一にだけ落書きしたつけ。今はそんな事はもうどうでも良くなつていたが、ふと、テレビ画面を見て、英一とはこの先運命共同体で仕事していくんだなと思つと、今までの事は水に流して、これは良く観察しなければならない。

「あ、そういえばそうだつたね~恨みか~今ではビリでも良い事のよつに思えるけど、恋敵だつたのよ~」

思わず口を滑らしてしまつた。

「へ？」

奈々子は耳を疑つた。彩華が言つた言葉の意味が解らなかつたからだ。

「へ？」

もう一度問い合わせるつもりで、言葉を見失つた。

「あちやーーーま、いつか。実はこのゲームもさ、本当は私が好きな相手を振り向かす為に仕組んだ事だつたの」

「こんなゲームしなくとも彩華なら選び放題じや無い？振り向かすとかそんな……ちょっと待つて？彩華が好きな相手つて、一体？」
本当だつたら、ここで嫌味たらしく突つ込む事も出来たが、奈々子の頭の中は混乱の渦だつた。英一が恋敵で、振り向かせたい？

一体彩華は誰が好きなんだ？そんな混乱している奈々子に、

「奈々子は、ジェイズの一人のうち、どっちが好みのタイプ？」

突拍子の無い事を問いかけて來た。グルグル回つている頭にこんな

質問は奈々子を余計に動搖させた。

奈々子の顔を覗き込んで珍しく真剣な顔で問い合わせて来るから余計混乱して……

「え……えっと」

俯きながら、なるべく彩華の顔を見ないようにして……

「ん?」

どう答えよつか悩んだ。本当は、英一の方が好みと言つ者に近い。容姿とかと言つうのでは無く、性格が英一の方が自分を引っ張ってくれそうな感じだからだ。悠治は少し大人しいし、友人としては成り立つが?

「えつと……えつと……え、英一かな……」

言つてはならない方の名前を言つてしまつた気がする……シマツタと思つた。

きっと、彩華は不機嫌な顔をしているに違ひ無い。そう思ったからこそ、全身から流れ落ちて来る冷や汗を背中にひやりと感じた。彩華の顔を見る事が出来なかつた。しかし、

「やっぱ、そうよね~女の子ってああいうタイプの方が良いよね~
ほ……私には良く解らないけどさ……」

ちよつと待て?問題発言だぞ!奈々子は後ずさりしてしまつていた。

「彩華さあ~もしかしてだけど……女の子が好きなの?あ、違つたら~」めん!~

「ん?……女の子~?あ、まつさかあ~そんな訳無いじゃん~あは
ははは!~」

悠治は危なく自分が彩華だと言つ事を忘れかけて話ををしてしまつている事に気が付いた。だから必死になつて言い訳しなくちゃと思つたけど、それも逆効果になると思い立つて、

「さてと!明日も学校だよ~もう寝るか!」

この話を忘れてもらおうと、話を寝る事に置き換える。

「え?寝るつて……まだ八時半だよ!まだ眠く無い!~

「床、貸してもらつわね~一週間バタバタ忙しかつたから、今日は

疲れちゃつた~」

奈々子の意見など無視していつもの我が儘彩華を演じる悠治は、ヨロヨロと立ち上ると、毛布を手に取り寝る準備をしている。そんな勝手な彩華でも、何故だかいつもの彩華らしく無い様子が手に取るよう理解し、奈々子は一瞬躊躇つたが、

「あ、うん……」

彩華の言つた通りに寝る準備を始める。

ジェイズと彩華。この組み合わせは一体どうなつているんだろう? なけなしの頭で考えてみても答えは出ない。それにこれ以上問い合わせも出来はしない。彩華と接している時間は他の見知っている者達より短い。そして、彩華は既に寝る体勢を整えている。

奈々子は、ベッドに身を預けると暫くの間色々考えを巡らせていたが、結局解らずついで、いつの間にか襲つて来た睡魔に勝てず、そのまま眠りに就いた。

上りの最終列車に乗り込むと、悠治は忘れてはならないお地蔵様の所に行つた。

奈々子が寝入るのを確認して出て来たから、確かに安心出来る。それにこの時間だと、ゲーム参加者が現れる事も無い。

地蔵には、また毎大福を供えた。彩華もここに訪れている形跡がある。そして、連絡をとつた一田田から先、メモを残す事は無かつたが、今日はどうやら置いているらしい。

『悠治へ。明日から、悠治の搜索を始めます。今度は絶対逃がさないからね。覚悟しておいて! それから……悠治で有る私に、英一が告白してくれました。どうすれば良いのか悩んでます。相談したいの。このままじゃ、英一に告白しかねない。助けて!』

今回は長い文章だつた。

「そつか……彩華の恋は成就してるんだ……でも、悠治としての彩華に告白したとあっては気が休まらないだろうな~」

今夜の話の中で、奈々子に危なく疑問を持たせてしまつた訳だし…

：一度彩華に逢つて何とか話はしないとなあ～自分が悠治に戻つた時、英一に惚れられるのも恐い気がするし。ノーマルなんだぞ僕達はーと一時ヤケになりそつだた。

「さあ、帰つて寝るか～最終電車に間に合わなくなるし

雲も無い夜空に星が瞬く中、悠治は彩華からの置き手紙をポケットに滑りこますと、その場を立ち去る。

明日か……上手く探し当てるよ～彩華ーそんな思いで、悠治はその場を後にした。今夜のネット上での彩華捜索隊のホームページで何を囁かれているか知る事もなく。

九日目。朝は清々しい一日の始まりだった。奈々子は悠治が来てから初めて一人で起きた。昨日早くに寝たものだから、自然に体内時計が反応したらしい。

「早いね～奈々子！」

「昨日早く寝たからかな？ 寝起きが良いよ」

と言いながら、今日学校へ行く為の服をあしらつている。微妙にだけど、昨日とは違ったコーディネイト。それを楽しんでいるのがキツチンにいる悠治にも解る。

「さて、朝御飯も出来た事だし、食べよっか？」

彩華が今日来る。きっと、ここ八王子の駅までは……

いきなり気合いで入る。奈々子との同居生活がここまでになるのか？ それとも、最稜まで続ける事ができるのか？ そんな事を考えながらテーブルに向ひ。向き合つた奈々子の顔をシラジミと見つめていると、

「何？ 彩華。顔がにやけてるよ～あたし変？」

「気にしないで。食べて、食べて！」

元気良く勧める。

「彩華は食べないの？」

「さつき、つまみ食いしたから～平氣一奈々子の食べっぷり見てる方が面白い～」

「何。その食べっぷりって……」

奈々子がツンッとそっぽを向く。こうこうやり取りが面白い。反応は直ぐ返つて来るし、素直。初めからこうやって接していればもっと簡単に接する事が出来ただろう。短い間なのに何だか凄く長かったような気がする。それだけこの同居生活が楽しかったのかも知れないと振り返る。

初めは、やけにこく子かなつて思つた。もっと物静かで……でも、

思いつきり叩かれた。嫌いだつて言われたよな？今もそんなんだろうか？

嫌われてるんだろうか？

好意は示してくれてるけど、実際口に出して好きだと言われた事など無い。そして、生徒手帳の岸田の顔が頭を過る。

「奈々子さー今でも、私の事嫌い？」

「ぶつ！」

奈々子が吹き出しそうになつて、悠治を呆れて見返して來た。

「本当に嫌いだつたら追い出しちゃうよ！脳天氣なんだから～そつちこ～、もつと本音で接するへり～したら良いいじゃな～」一いちそうさま～」

全て食べ終わった奈々子は、学校に行く準備を済ませて、ヒヨコヒヨコと動き回つていて。何処までが彩華の本音なのか？何処までが本当の彩華なのか？昨日のやり取りで解らなくなつた。

初めはどんな性格だと思つたし、「冗談も本気だと思つていた。けど本当の彩華はオブラーートに包まれていて……奈々子には見せてくれてなかつたのかも知れない。だから本気でむかついた。きっと、彩華を本気で受け入れてしまつていたのだ」。

「ちゃんと接するから、まだ、待つててよ」

悠治は奈々子に聞こえないようにボソリと咳く。今の奈々子の言葉で十分だった。

「おはよー！」

奈々子のクラスは騒然としていた。今か今かと奈々子達がやつて来るのを待つていたかのように。しかし、悠治がいつものように、奈々子を連れ立つて入つて来るや否やシーンと静まり返つた。

「どしたの？」

悠治はいつもワイヤワイと集つて来る女の子達が、今日はやつて来ない事に気が付き、近くに居た子に問いかけた。がしかし、遠慮しているのか拒絶しているのか？手を振つて、教室から出て行く。

「何だろ？ 今日は変ね〜」

悠治は奈々子に耳打ちした。奈々子もこいつのクラスメイトの反応は訳が解らなかつた。が、

「チャイムも鳴るだらうし、帰りなよ。お姉ちゃん?」

とにかく、今日一日様子を見ようと思つた。何事もなければ良い事だし。わざわざいの場所に彩華を止める必要もない。奈々子は席替

放課後、怒濤の乱闘が起ることも知らずに……

そして、当然のように放課復はやつて来る。奈々子は、ホームルームが終わつて、鞄に全ての荷物を詰め込み彩華が来るのを待つていた。

しかし、クラスの子達は何だか不自然だ。奈々子に話しかける事などなかつた今日一日。しかし、放課復のチャイムが鳴り一気にクラスの半分。後で考えれば、男子がいなくなつてゐる事に気が付く事になる。

「桐原さん！」

無気味だった、話しかけられるのは今日初めてだった。そしてクラスの女子全員が奈々子の席の周りに集つて来たのである。

え? どうしたの? こんなに集まつて……」「

お姉さんって、本当に彩華だったのね！

怒りで倒ると、彼の口は興味深々な様子だ。

で な 何言ってるのよ！んた詰無しシャン あれは あたしの如

言い繕うのも一苦労しそう。

「でもさ? あれば彩華だつて! で、学校中の男子が薦してたやつ

クラス中がワイワイと騒ぎ始めた。奈々子はシマツたと思い窓際からグラウンドを見下ろした。

校門から自転車に乗つて彩華が入つて来ようとしている。それを察した男子がそれを取り囮もうと必死で走りよつていた。

『バレた～！』でも、なんで？怪しい服装で彩華だつてばれる要素なんてなかつたのに？

彩華は、自転車置き場に行くと、昇降口に向おうとしているらしき。そして、取り囮む中学男子に気が付いた。

「彩華！バレちゃつた～逃げて！」

二階の窓際から奈々子は必死で叫んでいた。クラス中にその声は響く。もちろん、女生徒もこの事にやつぱり噂じやなかつたんだと、窓際には押し寄せて來た。野次馬とはこいつのものであらう。

「あら、バレちゃつたの？」

奈々子に手を振りながら、周りの人数に怯まない。もう慣れたとも言つ感じであった。

悠治は、仕方ないとサングラスを外すと、

「腕に自信の無いものは退いてなさいね？怪我するわよ～？これだけの人数を相手にするんだから、手加減なんてしてられないからね～んじゃ、ゲーム。スタート！」

忍ばせていたペンを取り出すと、御丁寧に手招きを始めている。その様子に、

「あ～もう一煽つてるし～止めに行かなきや～！」

奈々子はギュウギュウと押して来る女生徒達を搔き分けて、必死でグラウンドに駆け出した。止めなきや～その思いだけで足首の腫れはもう良いけれど、まだジッコを引かないと歩けない。でも、奈々子は必死で階段、廊下をひたすら走つた。

周りから見ると急ぎ足くらいのペースかも知れないけど、奈々子にはこれが精一杯だった。

「ダメだよ。こんな事……間違つてるよ……」

奈々子は彩華にそれが言いたくて、この騒動を止めたくて走つた。

どれだけ時間が掛かつただろう？昇降口で外に出られる靴に履き替える。そこから見える騒動がけたましく耳に入つて来る。

たつたこれだけの時間で、悠治はもう二分の一の人数の顔に『×』印を刻んでいる。でも諦め切れない者、まだ乱闘を続いている者達が取り囲んでいた。そんな中に、奈々子は潜り込もうと足を運んだ。「ダメ！彩華！こんな事してどうするの！何の解決にもならないよ！」

叫んでいるのに、彩華にはその声が届いていない。押され、引っぺがされ、奈々子はその輪からはじき出される。

しかし、一人の男子生徒が、

「やめたまえ！僕はこんな事は許した覚えはないぞ！教室に戻るか帰宅したまえ！」

奈々子の肩を引き寄せ、前に進み出る。その人物が、憧れて告白した、現生徒会長の岸田である事は、慣れ親しんだ声を聞いた瞬間で判つた。

騒動は、岸田の一聲で一時止まった。

そして、岸田はその輪の中に進んで入り、奈々子を彩華の側に連れて行つた。

「奈々子！それに……あなたは？」

写真で知つてはいるものの、わざと問い合わせる。奈々子はこの岸田のことを悠治が既に知つているなんてことを知りはしないのだから……だから敢えて問い合わせた。

「桐原さんの言う通りだと僕も思いますよ。こんな莫迦げたゲームはあなたらしくない」

「御親切にどうも……あなたは紳士なのね？」

実は嫌味のつもりだった、僕らしくないってどうして言い切れるんだ？ちょっと癪に触つたから。こんな奴が奈々子の想い人だと考へるとよけい気分が苛つく。でも、岸田の言う事は最もではある。

今、彩華がそんな事を考えているなんて、奈々子は思いもよらなかつた。そしてこういう形でまた岸田と対面するとは考える事など無

かつた。

『やつぱりかつこいいなあ～』

俯いて奈々子はあのバレンタインデーの事を思い返した。良い事はなかつたハズなのに、思いはやはり岸田に向けられている。心の何処かで忘れられないのだろう。感情は、どうする事も出来はしないんだ？止まつた乱闘は、三人の方に向けられている。

「僕は、あなたの事に興味が有りました。ここでお会い出来たのも何かの縁ですね？お近づきの印に握手させて頑いてもよろしいですか？」

岸田は、彩華の側に歩を進めると、友好の印とでも言わんばかりに右手を差し出した。そして、一枚目の顔立ちで二口リと微笑んでいる。

悠治は苦々しい思いで、スッと右手を差し出した。その事で、二人の手は繋がれた。

奈々子はその有り様を見て複雑だつた。彩華にはこいつの態度なのに、あたしにはこういう態度で接してもらえなかつた。彩華に嫉妬してしまいそうなその心を封じ込めて見守つた。が、しかし繋がれたその手を、岸田は手繩り寄せ、一気に彩華を引き寄せたのである。

「え？」

奈々子は頭の中が真っ白になつた。

岸田が、彩華の意表を付いたかのように腰を抱き止めると、彩華の唇を奪おうと一気に迷う事無く唇を近付けたのである。

外野は一斉にどよめく。しかし、その事を予測していたのか、それとも油断を怠らなかつたのか？悠治は左手に握りしめていたペンを岸田の端正な鼻の穴に突つ込んだのである。

「あんた、ダサいわよ～こんな手に乗る彩華様じやないの～したとかな事考えて、じついう行為に及んだのは褒めてあげたいけどさ？言つてる事とやつてる事が全く違うわねえ？」

悠治は『アカンベ』と舌を出し、クルリと踵を返す。

「あ～あ、そのペン使えなくなつちゃつたなあ～良いよあげるわ！」

必要無いものね？」

悠治は言いたい事を言つと、奈々子の横に身を寄せようとする。奈々子と言えれば、複雑な思いでその行為を見ていた。

自分が好きだった、尊敬していたその人物の本性を見た気がしたらである。そして、身体を強張らせていた。でも、岸田がプライドを傷つけられたと、反撃に出て来たのを見逃しはしなかつた

「この僕にこんな恥をかかすだなんて！」

怒りに満ちたオーラが周りを取り巻く。

「彩華、危ない！」

奈々子は咄嗟に声を張り上げたのである。岸田は、悠治の後方から襲い掛かっていた。悠治は、奈々子のその声に気が付いたのか？それとも予測していたのか？

「甘い！」

半身を捻ると同時に、岸田の一の腕を掴み取ると、綺麗な背負い投げが決まった。ドスンと言う地響きで岸田は地面に投げ付けられたのである。

「黒帯持つている私に何かしようなんて思わない事ね。あなたがなりダサイわよ！」

手の平をはたくようにパンパンと手を打つ。その様子を見ていた周りの者達から、ドッといつ笑い声が上がった。自らの学校の生徒会長でもあると叫うのに、この行為は許されない行為だとでも言わんばかりだった。

「さてと、帰るうか？あ、それともこの岸田君に思いつき落書きする？」

奈々子の目の前に、真新しいペンを取り出し手を差し伸べた。奈々子はまだ整理の付かない頭で、今の現状を把握しようとしていた。

「いやや、こいつだろ？奈々子の初恋の何たらって……実はさ、渋谷での乱闘の際、生徒手帳の中身押借してしまっしゃってたんだな。これが……」

彩華は、鼻の頭を搔きながら答える。

「『んよ？』」
「『んよ？』」

「『んよ？』」

奈々子はその言葉を受け止めた後、自然と涙が滴り落ちてしまったのである。

「あ、『んよ？』泣かないでよ～」

悠治はどうやつたらこの涙を止める事ができるかと悪戦苦闘していたら、

「良いの……もう良いの……これでもう元壁に吹っ切る事が出来たから……」

ポロポロと涙が次々に流れ落ちて来る。でも奈々子は笑おうと必死になっていた。けど、今までの自分を振り返って、大声で泣き始めたのである。悠治はその奈々子の肩を抱き締めて泣き止むまで支えてあげようと思つていた。が、

「わーっ」

という大歎声で、その行為はお預けを食らわされた。頭上の方から、グラウンドから、大きな拍手と喝采が奈々子と悠治に向けられたのである。

「あらあ……」

奈々子もその事に目を見はらせた。野次馬の教室から観覧していた女の子達。そして、ゲーム半ばの辺りを取り囲んでいるその者達は、一斉にこの出来事を喜んでいた。

「一気に味方が付いたのね～何か嬉しいような？悲しいような？」

悠治は、そんな中手を振つてその歎声に答えようとしている。

そんな様子を、校門から入つて来た一人の少年に阻まれた。

「彩華！」

呼ばれた自分の仮の名前に、悠治はビクリと身体を強張らせた。

「その声は……」

せつかくの盛り上がりに水を差すその声の持ち主は紛れもなく……と校門がある方角へぎこちなく振り向く。やっぱり、と覚悟していた事を思い出した。

「『』の声は……じゃないだろ？」「

「あ、バレちゃったのね～にしても良くてこじが分かつたわね？」

周りは、何故ここに？と言わんばかりにその人物を見ていた。もちろん、奈々子も同様である。

「帰るよ！」

耳許で思いつきり叫ばれ、悠治はげんなりして、呼ばれた方の耳に手を押しやつた。うんざりとでも言いたげで、その態度にその本人はよけい怒鳴る。

「あれって、ジエイズの悠治だろ？ 何でこんな所に……」「

周りの者達は今度はその事で野次馬状態になっていた。

「うつ。判つたわよ～良いからちよつと待つて！」「

悠治はとにかく彩華の口上に今は乗れない、と、奈々子の方に振り向く。そして、躊躇いがちに、

「『』めん。『』いう状態で……私帰らなくつちや……一週間同居守れなかつたけど平氣？」

「あたしならもう平氣だよ。ほら、もう『』んなに歩く事出来るしね？」

奈々子は強がつて思わずそんな事を言つてのけた。彩華の事を止める事は出来たはずだけど、何より自分の目が曇つていった事の反省もあつた。だから思わず、涙が溢れて来た。

「でも、彩華がいなくなると寂しくなつちや……」

最後くらい素直な言葉を吐き出しておきたい。もう『』やつて逢つて話す事が出来なくなる前に。

そんな奈々子の事が手に取つて判つた悠治は、思わず奈々子の肩を取り、自ら唇を奈々子の頬にあてがつた。

「え？」

奈々子は驚きの余り、疑問符が頭をぐるぐる駆け回つた。

「じゃあね！」

周りは、奈々子と悠治のその行為にドッキ歓声が沸いた。何故こん

な事をしたのか、奈々子の頭では計り知れなかつたが、そんな奈々子を背にし、悠治は彩華に指図されるように移動を始めた。

「全く……いい加減にしてよー自分一人だけの身体だとでも思つてるのかよー」

彩華はブツブツ文句を垂らしている。それを悠治は聽かない振りをした。

もう、奈々子には会えないだろ？か？ただそれが気掛かりで、聽かない振りといふにはちょっとばかり意味合いは違うけれども……そして、ハツと思い出した。

「奈々子～！」

再び奈々子を振り返ると大きな声で呼び掛ける。

「え？」

奈々子は未だに、さつき彩華がした行為に慌てていたが、「守れる約束！って物があつたら守る？あ、守ってくれる？」

「約束？」

「そう。絶対に守つて欲しいのー奈々子なら守れるって信じてるー！生徒手帳の最後のページなんだけど、八月一日に見て欲しいのー！絶対にそれまでは見ないで欲しいのー！そしたらまた奈々子に逢いに来れるからーそれと、ナナは預かっておいてね。あ、鍵は私が持つてて構わないかなー？」

悠治は、大声でそう言つと後ろ髪を引かれる思いで奈々子を見ている。奈々子はその様子が彩華なりの嘘の無い真剣な言葉なんだと思ひ、

「うん！判つたー絶対に約束は守るからー任せて！ナナの事も、鍵の事も許すー！」

その言葉を受けた彩華は、ニッと小狡そうに微笑むとウインクを投げかけた。

そのちよつとふざけた所は彩華のお得意の行為だと分かっているけど、奈々子は何だか嬉しかつた。

そして、校門の所に止めてあるタクシーの中に彩華と悠治は消え去

つていく。奈々子はいつまでもその後を見送った。周りに学生がいなくなるそれまで、ずっと。

奈々子はこの彩華との約束を守る事になる。岸田の写真は破られるが、ラストのページにだけは決して手をつけなかつたのである。彩華との約束を破る事は無かつた。

タクシーを降りた後、彩華と悠治は直ぐさま地蔵がある場所に共に向つた。そして、お互い今後の事を話す算段を立てるつもりであつた。

そんな中、不機嫌な彩華とは裏腹に、悠治は上機嫌で冗談を繰り返していた。

「何、そんなに不服そうなのさ？ もしかして、奈々子に妬いてんの？」

悠治は、もう彩華の事は友人……幼馴染みの一人としか思つてなかつたから堂々と言える言葉である。

「あんたがどうなるうと私の知つた事じゃないわよ…ふざけないで！ でもその体は私の物なのよ。少しは考えて行動してよ！」

「へいへい～で、僕にどうしてもらいたい訳？ それに良く解かつたな～あの場所にいること。探偵でも雇つたのかい？」

悠治はしらばつくれるだけしらばつくれるつもりだろう。はぐらかすのはこの悠治の特技なのだから。

「え、英二」がかつて出てくれたのよ。やうしたら、悠治の居場所を突き止めてもらえた

「彩華つてさ、何でそんなに依頼心しかないのさ～はあ～英二も大変だつたろう」……

呆れるしかする事が出来ない。自分で調べる事も出来ないのか？

「私だつて自分で足運んで捜すつもりだつたのよ。でも、試験はあるし仕事だつてあるし……」

こうして客観視してみると、本当に言い訳大王だな～と思える。

悠治は彩華のそういう所が苛立たしい。今までそういう所があったけど、その時は自分がどうにかしてあげていた。今度は英二か…

…大変だぞ？ちょっと英一に同情する。

「で、英二から告白されたって？」

話を擦りえる。今やうじんな話をしてもこの彩華を変える事なんて出来はしない。

「あ、うん。そうなのーどうしたら良こ？」

英一は悠治としての彩華を好きなのだろうか？それとも、男としての悠治が好きなのだろうか？その点を知る必要がある。これは、今後の彩華と悠治の問題だ。

「そりだなあ～僕が悠治に戻った時そのままになってしまったら困るものなあ～」

そう。それが一番の問題。仕事相手が自分に好意を持つてしまったら仕事所じゃない。

「なあ～こういつ事つて出来るかい？」

「何？良案が浮かんだ？」

少しは頭を働かせつゝてのつーて毒づきたいが、自分でもう良い案は浮かばないなら、なおさら彩華には無理だひつ。

「今日、僕（彩華）の両親に逢つてこいつ言ってくれるかい？彩華は近くのマンスリーマンションに越すからその横に悠治をあてがつて下さいと」

「で？」

「とにかく、こいつ事態だ。僕（彩華）の両親は納得すると思う。どうせ、自分で引き起こした事態だ。自分で解決するだひつと思つだろう？あの両親だし」

「うん。で？」

「僕は変装して、ジョイズの元で働く。決して彩華だと言う事を悟らせないし、悟られるようにはしない。下働きでも良いからね。その辺りは彩華がちゃんと事務所に掛け合つてもいい、手はずを整えて欲しい。それくらいは出来るだひつ～出来なくてもしてもらわな

きや困るんだけどね。で、英一には、僕が彩華だとちゃんと知つておいてもらおう」

「うん、うん」「

彩華はただ、悠治の言つている事に頷くだけだつた。

「彩華と悠治は何の関係もない。英一は彩華みたいには鈍く無いらしいし？ そしてある程度の見聞をしてもらえればそれだけで良い」

「でも、英一は私が悠治を好きなんだつて思つてているんだよ？ そんな事可能かな？」

ここまで来て彩華はハツと思い出した。悠治は恐竜並みに判断が遅いぞと突っ込みたい気分だ。

「そう。そんな事思つてるんだ英一は……」

彩華と悠治を取り違えていにしても、やはり英一は結構勘が鋭いなあと思つた。

「でも私は、ちゃんと否定しておいたけどね」

「あつそ……」

今まで彩華を甘やかして来た自分が情けなくなつた。何でこんなに鈍いんだろう……率直な言葉にしか反応出来ないなんて。

「でも、まあ、僕が彩華に好意を持つてないと知る方が良いだろう？ 初めからそんな氣があつたら、とても出来ないぜ？ 下働きなんて……それに、僕の性格が解れば英一だって何かしら考える所あるだろう？ それに僕としても、これから先英一とは仕事を共にしなければならなくなるだろう。解るかい？ 今の内に相方の事を知る必要性があるんだ！」

それがいつかは教えてやらないけどね？ 心の中で思いつき舌を出してやつた。このくらい覚悟してもらわないと、今までの自分を否定する事になる。

「あ、英一」と一人きりになる事があつたら、僕が上手い事仲裁に入るよ。彩華には対応しきれないだろうからさ？

「そ、そうだよね？ 判つた。とにかく私がしなければならない事は

……今夜、私の両親に掛け合つて今の事を話してみる。で、事務所

には悠治の仕事をあてがうみたい話を通す。それで良い?」

何となく納得している彩華に、

「じゃあヨロシク! 僕は今日、近くのお寺の片隅にでも宿作って寝るよ~ば~い

こんな風に一方的に話は纏まつた。

「あ、それから僕の携帯取つて来て欲しいんだ。それも宜しくな~」

こうして二人の密談は終わった。明日からは、新生活が始まる事になる。そしてこれが、悪夢への始まりになるのであった。

#16 彩華、マネージャーになる

「今日からこの事務所で働いてもらひ結城礼子君だ」「初めてまして結城礼子です。こちらで働くせて頂くことになります。解らない事がたくさんあると思いますが、宜しくお願ひします」彩華と話し合つた日から二日後。悠治は彩華の補助マネージャーとして働く事となつた。

「へ～何だか彩華みたいな子だな？まさか本人だつたりして？」印象のある目元のメイクを少しほかし、髪型をウイッグでおかっぱに誤魔化したにもかかわらず、ある一人の男がそんな事を言い始めた。でも、その言葉は直ぐに冗談だと解る。まさかこんな事務所で働くはずもないのだから……

「じゃあ、マネージャーの野口君と色々話しあつてくれたまえ。悠治のお勧めが効いているが、これからは、今売り出し中のジェイズの補助マネージャーなのだから、気合を入れて働いてもらわないとな？」

「そうですね。では宜しく。野口圭です」

サラリーマンの鏡の様な野口が右手を差し出し言葉を発する。

「あちらの部屋で具体的に今後のスケジュールを話しましよう」あちらと言つても、ただ仕切られた衝立の部屋だ。少し埃っぽいし、無意味に雑誌が積み重ねられている部屋である。

「そうですね。宜しくお願ひします」

悠治は二口りともせずに、ちょっと芝居がかつた真剣な表情で野口の後を追つた。

「おい、悠治～あれつて、彩華だつて言つたよな。良いのか？こんな所で下働きなんかさせて……」

英二は彩華の耳許で他の者に聞かれないように注意を払つて問い合わせた。

「あ、うん。平氣……だと思つよ。本人が言い出したんだから、何

とかするつしょ？」

余りにも軽々しい、ちょっと突き離した言い方が、今までの悠治の言葉とは思えないで英一は不審がっていた。

あれだけ大騒ぎして彩華を捜し出したのに今度は補助マネージャー？何か話し合いでもしたのか？彩華から言い出したと聞つのも余りそう考へることは難しい。

確かに彩華は頭の回転が早い。いつも仕事も簡単にこなしてしまってやうである。でも、あれだけ自分をアピールしていたゲームをこんな所で隠れなければならないなんて考へるとは思えない。

悠治が誘つたのか？確かにここだつたら彩華を隠しておけるし、騒動は起こらないだつ。でも、英一はこの事が面白くはなかつた。悠治の元に、彩華がいるからである。恋敵とやはり思つていいのだから。

「あと、僕引つ越ししたから。彩華の部屋の隣に。あいつ田を離すところかな事しないからね？」

余計イライラする。なんでそこまでして彩華の肩を持つんだ？これが幼馴染みと言つものだらうか？男女の幼馴染みと言つものがよく解らない英一には、ここまでする悠治を訝しげに見詰めていた。

「何？何か変かな？」

「焼けるなと思つたんだよ」

「え？だつて、幼馴染みなんだよ、これくらいしなぐちや、あの彩華だからね。見張つてないと困るんだよ。もともと家が隣だし、両親同士が仲が良くなつてね。頼まれたつて事も有るんだ」

なるべく、英一とは距離を保たなくつちやならない。そつしたくはないけれど、悠治からの助言でも有る。鈍い彩華であつても英一から言葉を逸らせなければならなかつた。

それに、今英一に、

『好きなんだ』

と言われでもしたらそれに本音を返してしまいかねない。でもそんな事は出来ない。彩華の身体に戻る為の試練だから。

「さてと。それじゃあ、今日はスタジオへ行かないとな？」

野口と悠治が戻って来た。彩華はホッと息をつく。「これ以上英二と二人きりで話しているのは困る。

「英二さん、悠治さん。車を用意して参りますから、ここで待つていて下さいね？」

悠治はそう言うと、そそくさと事務所の駐車場へと向つ。

「車の運転が出来るなんて良かつたわ～」

野口は有り難いと思つてゐるようである。そういう雑務を任せられるからであった。

悠治は、今年の春の彩華の誕生日に車の免許を取得した。だから、こういう雑務を引き受ける事は問題なかつた。車の運転くらいなんて事は無い。逆に、こうして運転する機会が有れば、ペーパードライバーなんて事にはならないから、まさに都合が良いのである。

テレビ局入りしたジェイエズの二人はすぐに控え室へと案内される。

「今日は、生放送だから気を付けて下さいね？」

悠治は慎重に一人に話し掛ける。これが彩華だとは思ひもしないだろ。演技もここまですると彩華は笑いを堪え切れない。

「ま、お一方は慣れていらっしゃるとは思いますが、一応忠告です

「あ、うん。ありがとうございます」

英二と悠治はメイクをし始める。そして、用意された衣装に着替え終えると、スタジオ入りまでの時間をのんびり過ごした。

マネージャーの野口はすぐに他の出演者達に挨拶をして来るからと控え室を出て行く。当然悠治も行くものだと思つていた。今日は悠治の仕事始めなのだから。しかし、どうやら今回は野口のみで行動するらしい。

「初めてまして、英二さん？」

ここには三人だけ。だから、悠治はこゝそとばかりに英二に話し掛けた。

「あ、初めてまして……悠治からは色々噂を聞いてました」

英一は少しづつ肯うなづいて答えた。

「私の事調べて下さったそうね？」「んな奴だけど仲良くなれてないね？」

「そうですね……仲良くさせて頂きます」「余計つつけんどんにされる。根に持っているのかなと悠治は思ったが、

「悠治は、私のただの幼馴染みですよ？」

悠治なりにこいつ待遇を受けると、ちょっととからかいたい気分になり、意味ありげにそんな事を言つてのける。

「そう……らしいですね」

こいつやつていちいち幼馴染みを言い訳にされると氣分が悪い。すると、彩華に悠治に告白した事を相談しているのかも知れないと考えが及び、回りくどく、

「悠治は彩華さん？あなたに何か言いましたか？」

「何かつて、何ですか？私の後を探偵気取りでつけた事？」

悠治はクスクスと笑つてみせる。英一の言いたい事は手に取る程よく解るが流石にここのは、彩華を立ててやらねばと思つた。

「あ、僕飲み物買つて来る~」

これ以上聴いてられない、彩華は控え室から外に出た。悠治なら何とかしてくれるだろ？と、後を任せたつもりだらう。

「！」

突然席を外した悠治に英一は、やはり彩華に話しているんだと気が付いた。英一の顔が少し引きつっているのに気が付き悠治は、彩華のアホがと苦笑いをした。

どう繕うかと頭を働かせようとしたが、先に英一が切り出して來た。

「悠治、俺があいつの事好きだつて告白した事、話したんだな？そ、うだろ？彩華？」

もう既に、彩華さんではなくつている。悠治は苦笑いしたくとも流石に笑えない。

「どう思う？こいつ事私がどういつ話の事じゃないけどさ……英

「は悠治の何処が好きなの？あんな情けない男なんて私だったらお断りだわ～」

悠治も負けじがらじと、英一を呼び捨てしている。ま、本音話している時にこいついう事を気にするものじゃないけれど、やはり張り合いたいじゃないか？長い歳月、彩華を好きだった事への一つのけじめだつた。

「だつてあいつ、可愛いじゃないか！」

「可愛い？あつはははは～確かに可愛いわね～少女趣味もほどほど尽きる事無いし？阿呆だし～鈍いし～」

「それって、悠治を莫迦にしてるつてことなのか？」

その言葉は心外だとでも言わんばかりに、悠治に対抗して来た。

「莫迦にはしてないわよ～あの子らしくて言つてるの。長年一緒にいれば良く分かっているわよ～そう言つ所に気が付いているんだつたら別に言つ事はないわね」

悠治は、この英一がそう言つ彩華をちゃんと知つているんだと事が分かつてホッとしていた。男だから好きだと言つんじゃ、困るけど。

「ただ、男を好きになつていると言つんじゃない事だけ解れば、私は別段口出しうるつもりは無いわよ～」

「え？ 悠治は男だけ？」

「ま、確かにね。でも、男に惚れる人種つてのいるでしょ～？やう言うのとはちょっと異質っぽいじゃない？英一の場合？」

そう。だから悩んでいるのでしょうか？と彩華は英一に田配せする。「だから悩んでいるんだよ。こいついう事つてないからな～実際三回告白してるんだ。でも悠治からはその返事を貰つていない」彩華が、よくその告白に応じてないものだと悠治は感心した。あの直情莫迦なら返事してそうなのに……でも流石に入れ替わらないと彩華自身気分も晴れないだろ？

「英一？私つて勘が凄く鋭くてね。こいついた類の事に関しては天性の予知ができるのよ～」

悠治はショックがない。一つ人肌脱ぐかと進言する。

「予知？」

「やべ、ソーシャルアートカードがあつたら呑つてあげても良いんだけどさ、でも無くとも解る事だから一つ言つておくわ」「何？」

「今は想いは届いてるけど叶わない。でも、ある時期が来たら、あなたはちゃんと手に入れる事ができる。ただし……」

そこで悠治は一息入れた。

「ある意味成就するけど成就しない。それだけよ」

英一には悠治が言つた事の半分も解らなかつた。成就するけど成就しない？それは、どう言つ意味なんだろうか？悠治との事なんだろうけれど、想いは届いているけど叶わない？それは、やはり悠治は自分の事を快く思つてないって事なんだろうか？でも、ある時期が来たら手に入れる事ができる……解らない。

「ま、気長にやつてみる事ね？一応言つておくけど私は英一の味方だからね～でも、悠治に何かしたらその時は黙つていなかり……私の力は知つているでしょ？それが、私にできる幼馴染みとしての悠治への好意よ」

軽くウインクしたところで、彩華が戻つて來た。頭を搔きながら英一は今までの彩華との話を考へてゐる。これから仕事だと言つのにイマイチ乗り気になれない。

「あの～ジュース飲む？」

彩華はこの状況下少しオロオロしていた。

悠治は一体英一と何を話していたんだろうか？席を外しておきながら氣になつて来る。しかし、悠治はにっこりと笑つてゐる。ま、全てを悠治に託してこの場を外したのだし、文句を言つ事など出来はないのだ。だから、少し元気の無い英一に、

「もう出番だつて野口さんが言つてた。スタンばらないとね？」

背中を叩いていつも通り振る舞つ事にした。

こんな風に過ぎて行く一日。彩華はドジをよくする。それをカバーするのが英二。チグバグな感じはするけど、意外に上手くいっている。スタジオの端からそれを観察するのは凄く面白い。やはり、芸人としての悠治の洞察力は鋭かった。そのスタイルが、このジェイズを愛してくれるファンを作るのである。

「ほんと、仲がよろしいんですね？お一方は？」

スタジオ内の司会者もそう言つ所を気に入っているらしい。

もし、彩華と自分が入れ替わらずにこの英二とコンビを組んでいたならば？ こういう風にファンには愛されていないかも知れない。戻った時、演技でもしながらこのコンビを上手く作り続けなければならぬだろう。そう思うと、何だか難しい気がした。

彩華のボケは天然だから成り立つているしなあ～今からボケの作り方を研究せねば。と、番組の最中ずっと二人の様子を客観視してい る悠治であった。

「お疲れ様！」

野口は、控え室に戻るといつもの儀式でも有るかのように同時に二人に声を掛ける。

「僕、また歌詞忘れた……」

彩華はすまなさそうに、英二と野口に謝つていた。

「良いつて事よ。何とか繋ぐ事出来たしさ？」

英二はそれを上手くなだめている。ユニットである以上、もちつもたれずだと言わんばかりだった。それがコンビの鉄則なのである。悠治も納得して、二人にその旨を伝える。

「今日は遅いから、私がお一方をお送り致しますわ」

悠治は、自ら進んで野口に伝える。確かにこれから先の事を考えると、この一人を送り届けるのは自分の仕事だろう。

「そうね。夜も遅い事だし、運転出来る礼子さんに送つてもらつたら？」

野口もその言葉を受け取る。本当だったら、マネージャーの管轄な

のだろうけど、野口は運転が下手らし。一度ベンツにぶつけた事があるとか？ 有能だけれど、こういう事はしない方が無難だろう。マネージャーの癖にと思えるが、彩華も英一も、今まで不満を垂れた事は無いらしい。そしてテレビ局を離れる時、

「先に悠治を送り届けますから」

悠治は彩華を後にする、ろくでもない会話が飛び交うのではないと心配だつた。それに、車を自分のマンションに置いておく訳にはいかない。そう思つたからこそ、先に彩華を送り返した。

「彩華？ 念のため、携帯番号教えておいてもらえるか？」

悠治が彩華を送り届けると、英一は少し経つてからちょっと控えめに問いかげた。

「あ、うん良いよ～英一だつたら問題ないしね？ 何か相談事が有つたらいつでも連絡くれて良いから。いらっしゃね？」

「すまない」

すると、交差点で待ち時間が有る時にスケジュール帳に番号を書いて渡す。英一はそれを直ぐさま携帯電話に登録した。

「……俺の味方つて言つてたけど、本気でそう思つているのか？」

英一は登録を終えると、ワンコールの電話を悠治に送つた。

「今送つたの、俺の携帯番号だから……」

「了解。登録しておくわ。私、結構嘘付くけど、これは本当。それにしても英一つてさ、テレビで見るより意外と臆病なのね？ もつと男らしいかと思つてたわ」

「芸能人やつてたら、そう見えるかもな？ これでも役者志望なんだよ。俺」

「へ～そなんだ？ ジャア、歌手やりながら俳優目指す訳？」

交差点の信号が青に変わり、まだ雑然としている夜の街を再び車で移動し始める。

「そななるな～本当は一本に絞りたいんだけど、事務所がうるさくてね。今成功しているんだから、もう少し待ってくれって頼まれて

るんだ。彩華は色々な方面で活躍してゐるから、いつこうつ気持ちは解らないかも知れないと

その言葉は受け入れかねた。悠治は歌手になりたいのだから。でも、自分の意志とは反する事をやつていると云つては共感出来る。「ま、この先どう転ぶかなんて考えるより、今を生きた方が最善の策よ」

「……それは言える」

「望みは高く持つ事も大切だけどね？」

「そりゃそうだ！」

そこまで話すとわだかまりが解けて、一人して笑った。

「意外だつたな～頭の働く切れ者だと俺思つてたけど、いつやつて話すと、彩華つて普通なんだな～あんなゲームまで仕掛けといてさ？」
「普通？確かにそうかも知れないね。自分を作るの大変でさ～いつの間にかこういう技を拾得してしまつた訳よ。ほとほとどれが本当の自分が解らなくなるけどね？」

「別に作らなくても良いんじやないか？」

「芸能界にいるのよ？作らなくてどうするのさ～周りは敵ばかりなんだもの」

英一の指示通り、ハンドルを右に切る。

「確かに敵ばかりだけど。信頼関係つてのは演技で通用するものじやないぞ？時には本音ぶちまけた方が良い時だつてある」

「そう云つて英一は本音ぶつける事つて有るのかね～？」

「あるわ。正直に生きていつもりだ。だから困る事がたくさん有る」

「悠治の件とか？」

「そうだな……」

「余り深く考えない方が良いよ。成るものさぢやんと成るんだしさ

「それも一理有るな……あ、俺の家ここだから、どうも悪いな」と、止まつた先は築十年と言つ感じのアパートの前の道。

売れて来たのにこりう所で一人暮らしか……地道に苦労しているんだなと悠治は思った。英二への印象が少し変わった気がする。

「次は明後日の雑誌の仕事が有るからね。それから、五日後には、マキシシングル用のカバー写真も！また連絡するから、暫くの間は学校に行つて勉強に励む事ね？」

車の窓ガラスを下げ、それ越しに英二にこれからスケジュールを伝える。

「分かつた。でも後一週間もすれば、夏休みか～補習が有るかも知れないけど、大丈夫だろ？」「

「スケジュールに穴が空かない程度に、学校に行つておく事だわ。じゃあ、おやすみなさい」

悠治は窓ガラスを上げ、この英二の自宅を去る事にした。

今日一日が慌ただしく過ぎて行く。でも、欠かす事の出来ないお地蔵様の所には行つた。そこには既に、彩華が供物を供えていた。

「悪党！帰つて來たわね～」

「悪党つて何だよ！人聞きの悪い言葉使つくなよな！」

マンスリーマンションの一角に宿を取つてゐる悠治と彩華。二人は隣同士に部屋を借りてゐる。悠治が言つた通りの事を彩華は実行したのであつた。

「ママは嘆くは、パパは深刻になつてゐるは、あの日の心地悪さつて悠治には解らないでしょ？あ～もう最悪～」

「んな事言つたつてさあ～もうこいつちやつたものはどうにも変更する事なんか出来ないつしょ？」

諸悪の根源の悠治は別段反省するような姿勢が無い。

「撤回なさい！今直ぐ！」

「出来ないね！それは！」

悠治は、戸口でこんな事を話すのもなんだと、彩華を部屋に入れる。

「」の間からそばつかり言つてるな。彩華は少し他の事に頭働

かせるよ? 苛つこいと、ほけやすくなるや?」

クククと悠治は笑う。他に気が散つて、歌詞忘れるなんてのも、仕事やつてこの資格ないと思われる。ま、それも悠治がやらせてこるとほいえ……

「パパとママにあんな心配をせむなんて……いくら私の家庭が芸能一家だからって許される事じゃないわー。悠治が直に会つて怒られてみなさこよー!」

「彩華は、どうせ芸能界引退するんだろ? だつたらこれくらいからかして引退した方が良いってー印象悪いけどな?」

つい本音がでた。

「引退するのしないのは別問題でしょー。それにもつと普通に引退したいわよー。勝手にこんな事やらかしてん人が言わないで欲しいわー!」これはもうヒステリーの域に達している。と悠治には分かっているので話を逸らそうとした。

「英ー! ……と仲良くする為にもこれは必要だろ?」

「え? 英ー?」

話を変えると静かになる。なんて単純な奴なんだと悠治は心の中で苦虫を潰した。

「お前なあーあんな話をしてる時、席を立つなよなー。英ー、僕に彩華が話したつて気付いたぞ?」

この言葉は彩華にダメージを与えたらしい、暫く黙り込んだ。そして一言、

「どうしよう?」

だから、始末におけない。自分で何も処理出来ないんだから……でも、じゅうじゅう彩華であるからこそ放つとけないのだ。今にしてみれば、幼馴染みとだけど。

「じゅーちは上手く話しておいた。彩華が相談した事は余り気にはして無いよつだつたけどな。あばたもエクボつてやつだろ? でも、普通じゅうじゅう事を異性に話して聞かせるのは相手にとつて不愉快だと呟つ事考えとけよ? ただでさえ、英ー! にとつたら僕(彩華)は恋

敵だと勘違いしてるんだから…」

「あ、うん……分かった。気をつけるよ……で、何とか成るものなの？」

「何とか成るじゃ無くて、するものなの！って、いつも場合無理だけどなあ～考えてみて分かつた事は、英一に彩華をアピールさせておく事だ。で、僕はお前達の側で見守る事にした」

「いつても、入れ替わり完了の期限を判つている悠治だからいつもができる訳で、彩華にとつたら何の事だか解らない。

「英一は、彩華の性格が好きなんだと判つた以上、中身が変わったらもしかしたら、彩華を好きになつてくれるかも知れないだろ？それも、一種の賭けだけどな？」

そこまで話して、

「英一は、美人は苦手なんだって、前話してくれたこと有るよ。丈夫なのかな？入れ替わつてそんな簡単に私を好きでいてもらえるのか解からない……」

彩華は弱音を吐く。

確かに容姿つてのは、気になるものだろ？誰だつて見た目から入る訳だし。でも、そう言つ域を英一に超えてもらわなければ困るのは、悠治だつてそうだ。男に惚れられているままなんて考えたくはない。世のそう言つ関係の人達には悪いが、やはり困る要因だ。

「一つ言つておくけど、僕には今好きな子がいる。それも、彩華として知り合つた子だ」

「それつてもしかして……あの中学生？」

「そう！桐原奈々子ちゃんつて言つ子なんだけどね。今度もし奈々子に会う事がある時は、悠治として逢わなければならぬ。それに、奈々子が僕を好きになつてくれる可能性なんて無いに等しい。相手は彩華として認識してる。奈々子には好きだつて言われた事など無い。解るか？彩華だけが苦しい思いしてる訳じゃ無いんだぜ？」

自分の事にしか気が回つていしない彩華の頭を冷やさせるにはこれを言っておくべきだと思つ。少しくらいこは、悠治の想いと言つものを

考へてもらいたいものだつた。

でも、今話聞いて少しひらには気が付けよ?上等なヒントを言つたんだから?

でも、彩華は、気が付く事は無かつた。悠治として逢つ。と言つヒントに気が付かないなんてよほど頭の回転が悪いのだろう。か、あの時悠治が奈々子に言った言葉を把握していないのであるつか?

「そうだよね? 私だけが辛い訳じや無いんだよね?」

少し彩華の頭が冷めて来たらしく。このままじゃいけないと考えは及んだのだろう。

「そう言う事だから、ま、僕の気持ちも伝えたんだし? 部屋に戻つてこれから的事考えな。とにかく、英二とは上手くやつて行けそうだと思つて、心配する事は無いよ。彩華は彩華らしく振舞つていれば良いとだけ言つとくわ」

悠治がこれ以上ここに彩華を置いておへ事もなんだしと話の腰を折ると、彩華はその場を去る。こつして、暫くの間は何とかなるであります。悠治はそつ思つてこつた。

#17 悠治誘拐事件

一日後、歌番組用の雑誌の取材のスケジュールが入っていたので、悠治は一人を車に乗せ事務所に入った。そして、野口を乗せ、取材用に設定された場所に急ぐ。

「礼子さんこっちへ……」ちらが担当の原口さんです

取材担当者を紹介され、悠治は頭を下げる。頭を下げるなんて滅多に無い事なのに、悠治はいとも簡単にこなす。その様子を彩華、英一も見ていたが、自然すぎたので思わず笑いが溢れた。

「では……」

始まつて一時間。長たらしい取材に悠治は座っている椅子から転げそうになつた。

周りは結構話に華が咲いているようだが、どうもこのノリについていけない。何でこんなに長いんだ?と思いつながら聴いてると、どうやら彩華の『のらりくらり』した話し方に問題がある事が原因だと分かった。でも、それを楽し気に盛り上げカバーしているのが英一。ま、こういう一人だから何とか成り立つてているのだろう。端から見ている分には辛いが、取材陣が楽しいのならば問題は無いだろう……しかし、こんな彩華がよくオーディションに合格出来たものだな?よほど他の者達に適任者がなかつたかだ。欠伸しそうになつて、直ぐに口を紡ぐ。マネージャー補助としての立場に気が付いたからである。

「さて、この後はもうスケジュール無いから解散ですね?」

三時間にも渡つた取材。聴いてるこちらはいい加減眠くなつていたので、悠治は思わず野口に進言する。

「あら、何処かでお茶でもして行きませんか?せつかく時間も有る事だし?」

「経費ででしょうか?」

悠治は、ちょっと嫌味を言つてみたくなつた。小さな事務所なのにこいつら事にお金をかけるなつて言つの！

「 そうですね。経費で落としましょ。では何処に行きたいか、決めて下さい？」

決めて下さいって……悠治は結局運転しなくちゃならない。乗つてる方は気が楽だらうけどーと毒づきたいけれど、

「 悠治さん、英一さん？どちらまで行きたいですか？」

引きつりそつうな笑顔を隠して悠治は笑つた。

それから三日後はマキシシングルの撮影。曲のイメージからも受け取れる、夏らしく、晴天で良かつたと心から思う。

炎天下にレフ板は眩しかつたが、彩華も英一も撮影を快く引き受けやつている。この日は少し遠出して湘南の海に来ていた。夏休み前だと言うのに、遠巻きに人が集まつて来ていたが、撮影陣はそれを上手くあしらい撮影始めた。

何も湘南で撮影しなくても、沖縄とか、ハワイとか……と思うけど、そこまで資金が出ないのであらう。悠治にしてみれば、ちょっとこの撮影は不服では有るが、一日で帰れる所で無ければ困るのは、地蔵の事があるからだ。

一日に一回必ず訪れなければならぬなんてなあ～彩華のモデルの仕事で海外とか、一日で帰れない場所とか指定されても絶対行かなかつたものである。せっかくの旅行も今までした事が無い。なんて面倒な話だらう？こんな事まで見通されているのかと思うと、腹が煮えくり返りそうだが、自分が時いた種だしこいつも心の中で納得する。

天の啓示に抗う事など出来はしないのであるのだから。

にしても、余りにも気持ちが良い。ここで、泳ぎに行きたいなあ～なんて言い出す事も出来ないし。タオルを被つて日陰を作るだけで止まつた。何だか残念な一日である。

こうやって、ジョイズの仕事を片つ端からこなして来た悠治であったが、世間はついに夏休みに突入した。

学校の補習に行けない悠治は、単位を気にしなければならないが…ただでさえ、期末試験を受けていないしで考えなければならない事は山ほどある。が、これは最終的には彩華が背負つて行くものであると知っているので余りそこまで考える気にもならなくなっていた。

彩華は朝早くから学校に補習に行つてゐる。自分のツケをちゃんと払つてくれている訳だ。思わずニマリと笑う。こういう悪知恵は人一倍の悠治だからこそできる技である。彩華がいくら出来が悪くても、堅実にやつていいだけ問題は無い。後は、彩華が引き受ける問題だ。きっと驚くだろうな」とか考へると、冷房の掛かった部屋で寝つ転がつて雑誌を讀んでいる自分が本物の悪党のような気がして来る。

「悪党上等！」

思わず口に出していた。この時の悠治は知らなかつた。期日まで後一週間。じつはこう考へをしていの自分に跳ね返つて来るしつペ返しと言つものを……

「今日も悠治は家で寝てるつもりかな？」

学校の補習を受けに行く為に彩華が玄関でぼやいていた。

ここでの一人暮らしにも慣れた。自分で作る食事はそんなに美味しいと言う訳でも無いけど、結構何とかなるものだとそう思う。時々、悠治におかずの作り方を伝授してもらう事も有つたが、教えてもらったものは一通り作る事はできるようになつた。

これだけは、不器用な彩華にとつて自慢したい事である。料理が上手くなれば、良いお嫁さんになれる。その下準備だとそう思つていた。

そんな事を考えながら玄関のドアを開けた。しかし、突然視界を覆つた物体に跳ね返され、玄関に倒れ込んだのである。

「いつた……」

玄関に立っている知らない男。それに気が付き、「誰?」「

「悠治だな?一緒に来てもらおう!」「

二の腕をきつく握りしめられて彩華は何が起こっているのか分からなかつた。とにかく、これは尋常な事では無いと悟つたまでは良かつたが、逃げ道は無かつた。

「黙つてついて来れないならば……」

後ろにも誰か居るのか?一本の碗が、彩華の顔に近づいて来る。

『布?』

白い木綿のようなものを彩華の口元にあてがつて来る。そこまでは覚えていた。が、その後の事は一切覚えていない。何だか薬物の匂いをかがされたらしい。事は解る。けど……

ボーッとした頭の中は直ぐに暗闇の中。身体が宙を浮いているような感覚。それだけだつた。

「電話だよー電話だよー出てちょうだいなー」

繰り返し携帯の着信音が耳に届く。昨日は遅くまで起きていた為、悠治はこの着信音がウザくて仕方なかつた。どうせ彩華だろうと思つて、手繰り寄せたその着信が、英一からの物であると気が付くと、「あ、ごめん。寝てたー」

直ぐに目が醒めた。

「悪い。悠治に電話してるんだけど出なくてさ。そっちにいるか?」

「悠治?うつん。今日は補習で学校に行つてるんだけど……変だね?この時間にまだ帰つて無いなんて……」

「いつも、この時間なら大丈夫だつて言つてたから、掛けたんだけど……そうだな。変だな……」

「隣、行つてみるわ~ちょっと待つて、折り返し電話するから」

悠治は、そう言つと玄関から外に出る。そして、彩華の部屋の呼び鈴を鳴らした。が、一向に出て来る様子は無い。

「地蔵の所にでも行つてゐるのか？にしても、英一からの電話に出ないなんて事、彩華がする訳ないんだけどなあ～」

ポーツと考えていた。そして、彩華の玄関のノブを回した。鍵は掛かつて無かった。

「鞄が転がつてゐ？ビーナスだんだんびっかり忘れて行つたなんてあり得ないしなあ～」

不思議に思つたが、自分の部屋に帰らうとした時、頭を殴られた感覚に陥つたのである。

『悠治の身柄はこちらが預かつた。彩華自身で捜しに来い！警察には連絡入れるなよ！』

悠治の部屋のドアの内側にパソコンで打ち出した用紙がセロテープで貼り付けてある。

「しまつた！彩華！」

悠治は、彩華が誘拐された事に今になつて気が付いたのであつた。

「『めん。英一…悠治……誘拐された！』

自室に戻るや否や、悠治は携帯で英一に連絡を入れる。

「悠治が誘拐？一体どひして！」

考へれる事はただ一つ。彩華のゲームが忘れ去られた訳じや無かつたと言う事だ。

ここ数日補助マネージャーとして働いたり、マンションに隠れていった為すつかり忘れていた。平和すぎる日々に頭が慣れ切つてしまつていたのだ。

どうしてここが漏れたのか？それは解らないが、いつもやつて悠治の部屋の中に貼り紙を残している限りバレてしまつたのであらう。そして、彩華ではなく悠治を狙つたのは、幼馴染みである事を利用して犯行を行つた為であらう。それしか考えられない。

もしかしたら、奈々子の学校での騒動を見聞きした者が、彩華を説得出来る唯一の人物が悠治だと聞き習つたのかも知れない？

考えれば考えるほど、要因は色々有る。今回の件は、悠治にとつて

の失敗であった。

「私のゲームが原因だわ、きっと……どうしよう？」

流石の悠治もこれには頭が働かない。どうやって見つけろって言つんだ？犯人の目星もつきはしない。場所も解らない。

「ちょっと待つてくれ。落ち着けよ、彩華？」

「落ち着けたって……落ち着けるはずないじゃない？」

「分かった。今からそっちに行くから事情を話してくれ」

意外に落ち着いている英一に少しホッとした。きっと返されるかと思つたから。

「電話回線か、ケーブル引いてるか？」

「うん。それは大丈夫……」

「俺専用のノートパソコン持つて行くから、それまで待っていてくれ」

「ネットでもする気？」

「一番手っ取り早いからな……きっと、ネットで検索掛けられると思つ。最近騒ぎはなくなつていいようだけど、この手のは、きっとネット絡みだと思えるんだ」

「分かつた。じゃあ、待つてる」

悠治は、英一が来るまで待つた。実家に戻れば自分専用のパソコンが有るが、持ち出す為に戻る訳には行かない。こんな時今まで、自分が言い出した事を曲げる事は出来なかつた。最後まで貫き通さなければ、このゲームを終わらす事は出来ないからだつた。それが、悠治のエゴであった。

一時間後、英一は言つた通りノートパソコンを持ち出して悠治の部屋にやつて來た。

「ケーブルで良い？ わつき、契約しておいたからすぐにでも使えるわよ？」

「うん。サンキュー！」

英一はテキパキと配線を結んで、ネットを稼動させる。

「で、何処から検索するの？」

「彩華に組みする物を片つ端から並んで行く。何処かにじぶん並んだらうづからな？」

それからは、念入りにチェックして行った。

しかし、該当する物はことじ」とく違っていた。

「でも、何処かに無くちゃ、探しに来いなんて言ひ文句はつけられないだろ？」

「確かにそうね……しかし、このゲームがこんな誘拐事件にまで発展するなんて……」

その通りだつた。言うなればこれは犯罪だ。それをこんなに考え無にするなんて、馬鹿げてこむ。

「警察は動かせないからなあ」

「でも、仕事があるでしょ？ 悠治がいなければ、事務所だつて誤魔化しきれないわよー」

「そこを逆手にとるんだ。警察がダメなら、じりじりはじりのやつ方が有るだろ？ それに君は彩華だ！」

「やうだけど……一体どうやって？」

「じりじりのはじりだ？」

ボソボソと英一は悠治に話して聽かせる。

「なるほど。警察がダメなら、これしか無いわねーちょっと携帯で話さなきゃならないけど。良い？」

言つや否や、悠治は彩華の父親の携帯に電話を入れた。

「判つてこるわよーそれより聞いて！ 大事な事なのよ……」

叱られるのを覚悟でかけたけど、急用の話は、父親を黙らせていた。一通り話し終えると、

「じゃあ、パパ宜しくねー」これは、悠治の為でも有るんだから。今まで悠治には色々世話になつて來たでしょ？ お小言は全てが終わつてから聞くわよーじやあー」

これ以上話を聴いてる暇はない。直ぐさま電源を切る。

「テロップの件は聞き入れてくれたわ。私が彩華で良かつたわね？」

自分に言い聞かせる気分だつた。

「これで、こちらのホームページにアクセスしてもうえれば、話がつけられるわ」

「その言葉を受け入れて、英一はホッと息をつき、絨毯もひいて無いフロアーに胡座をかいた。

「いつ頃流れるんだろうな？それまでに、ホームページを作らないとな……」

英一は慣れた手付きでホームページ作成に励んでいる。

「簡単で良いだろう？どうせ、緊急ものだし」

一応、彩華のホームページになる訳だ。お伺いをたてなければならぬいだらつ。

「良いわ。なり振り構つてられないからね」

悠治は真剣に答えた。テロップが流れたのはそれから三時間後だった。もう、既に夜の九時だ。

『緊急告知！彩華のゲームはまだ終わつて無い！つわもの共…いざ勝負！アクセス先は……』

「さて、これを見る人がどう反応するかよね？それに一番肝心のは犯人がこれを見ていれば良いけれど？」

「見てもらわなきゃ困るな。たつた一回だし、見逃されたら一貫の終わりだぜ？」

そんな英一のセリフを聞き、悠治は大事な事を今ハツと気がついたのである。

「もう、全てが終わつたんだ……」

そう、悠治が発したこの言葉は、拘束されている彩華のことを考えたからだつた。

全て、自分勝手な行動をしたばかりに……これは天罰なのかも知れない。彩華は、地蔵の所に行く事が出来ないはずだ。それは、地蔵との約束を違える事になる。つまり、悠治と彩華が入れ替わる事は

出来ないと言う事なのだと。

入れ替れない。それは、未来が無いと言う事になる。今もし彩華が死んでいたとしても、生きていたとしても、一生自らの器に入る事は出来ない。僕達は、どうする事も出来ない。

彩華に凄く悪い事をしてしまった。叶つかも知れない恋を、ぶち壊した。どうすれば良い?……一生このままどうしようと言つんだ?自分はもうどうだつて良い。奈々子の事を忘れて、仏門の道を歩く事だつてできる。

それで償いきれるのであれば、こんな命くれてやつたつて良い。でも、彩華は?彩華を不幸にする事なんて出来はしないんだ。これ以上、自分がやつた事の不始末をつけられない状況を作る訳にはいかない。せめて、彩華には幸せになつて欲しい。

「終わりつて……まだ何も解決しないだろ?何、悲観的になつてるんだ?彩華らしくないぞ?」

既に自棄になつていた。ここで、全てばらしてしまつのも良い。悠治は彩華で、彩華は悠治で……だけど出来なかつた。

そうだ、まだ勝負を捨てる訳にはいかない。彩華は生きているはずなのであるのだから。生きてる彩華に申し訳ない思いで一杯だつた。

「あ、ごめん、ちょっと混乱しちやてさ……」

そうだ。英一も、いつもたつてもいられないはずだろ?それをこんなに落ち着いていられると言つ事は、それだけ彩華を信じていたいのだろう。

「賞利誘拐と言つ訳じゃない。犯人は、彩華をターゲットにしている訳だ。つまり、彩華が行かない限り犯人からのゲームは終わらない。そして悠治は戻つて来ない。時間は、一週間。どうする?持久戦だぞ?」

英一は、真剣に問いかけて来る。そりやそうだ。悠治が関わっているのだから……

「それは大丈夫。こつちも受けて立つわ。でも、英一?悠治が仕事に出れなければ、問題が起くるわよ?事務所にはどう言い繕つとも

り？」

「それは任せて貰うよ。悠治は旅立ちましたとでも銘打つて、ファックス流しておぐ。その間は俺も動けないな」

「じゃあ、私に手を貸して！当分ここに居てもらう事になるけど……平気？」

「あ、でもそれはまずいんじゃ……？」

「構わないわ……あなたは悠治が好きなんでしょう？そんな人が私が何かするとは思えないものねえ？」

悠治はやつとここまで来て笑う事が出来た。せめて、入れ替わりが出来ないとしても、彩華と英一の味方になつてあげたいと思う。そういう言う世界に足を踏み込んで良いだろう？

変な事だけど、変じやない。好きな者同士上手く行けば良い訳なのだから。

そんな事を考えていると、

「早速アクセスして来たぞ……」

簡単なホームページにアクセスし飛び込んで来たメール。

「悠治は手厚くもてなしているよ。早速こういう方法で連絡取ろうとした事は褒めてあげるね。で、良ければこんな映像が有るんだけど見るかい？アクセス先は……」

英一と悠治は直ぐさま、そのアクセス先のアドレスを打ち込み、そして裏ホームページへと入り込んだ。

どうやら、自家製のビデオカメラで撮った映像だけを取り込んで成り立たせているページらしい。色々な項目が有る中、本日の項目に当る日付けを選んでクリックする。すると、何処かの港が映し出された。遠くに大形の船が見える。そして、目を布で塞がれた彩華らしき人物がその画像の前を横切った。そこまでで画像は切れている。「これは、悠治が生きていると言う事を言いたいんだろうか？」
英一は不思議そうに問いかけて来た。

「いや、この場所に悠治が居るって事を言いたいんだと思うわよ？」

港ね……まだ陽が落ちてない位だから、結構前に撮っている画像だわ……つまり、東京近辺だと言つ事よー」

「やうか……なるほど。」この辺りだと、港つて何処になる?」

「英一は、そこまで言つて、今入ったホームページを記憶させている。「地図が有れば一番良いんだけど……明日買いに行って来るわ。丁度良く、直ぐそこに本屋有るしね。今日はこれ以上犯人からアクセスして来る事はないでしょ。寝ましょ? 英一、「ベッド使って良いよ、私、ここで寝るから……」

悠治はフロアーにそのまま横になる。

「ここは、彩華の部屋だろ……良いよ。俺がこっちで寝るから……」「良いのー! 使つてちょうだい! 私が巻き込んだんだから、これくらいさせてよー」

その前に、一応憎たらしい地蔵の所に顔を出して来るか……もうどうでも良い事なんだけど、この責任は自分で払わなきゃ気が済まない。

「ちょっと、買い物出し行つて来るけど、何か必要な物有るかな?」「出掛けれるのか?」

「まあね。いつもの日課だからしようがないのよね」

『日課』と言つ言葉に、家に顔を出すのだろうか?と思つたらしい。英一はそれ以上突つ込んで問い合わせなかつた。

「じゃあ、一週間寝泊まりするだけの服と、携帯歯ブラシ買つて来てくれるか? レシート渡してくれると、こつちがそれを計算して払うから」

でも、悠治はその支払いは気にしないでと言い放ち、一つ念を押す。

「それじゃ先に寝てて……私は適当に寝るから気にしないでね」

その夜から戦闘が開始された。

「帰つて来たら、床で寝てるんだもん！怒るわよ！」

次の朝は、けたたましい怒りの声で英一は目を醒ました。

結局ベッドは使わなかつたらしい。悠治が起そつと思つても気持ち良くなれてるし、それを遮るなんて出来なかつた。

「はい！御飯！」

適当に作った御飯を英一に渡す。英一は、寝起きが悪いのかモゾモゾと這いずり回つてゐる。しかし、何とか御飯を食べ終わつた頃には、目が醒めたらしい。

「昨日、あれから見てたんだけど……」

「ああ、あの映像？」

「昨日の映像以外の日付けを確認したんだ。そしたら……」

「何これ！」

それらは、悠治のこの一ヶ月をストーカーしたのか？全て映像として映し出されていた。

「犯人は、ゲームには参加せず、彩華を追い掛けこづやつて映像に撮つてたみたいだな」

悠治は気持ち悪い思いをした。こんな映像を撮つてゐるなんて、ゲームに堂々と参加した者達に比べて陰険に感じられた。

「それからコレ！昨日の映像だけ……」

英一がダウンロードしたのか、その映像をまた見ている。

「この奥に見えてるの、横浜ベイブリッジか、レインボープリッジか？大きな橋のように思えるんだ」

薄ぼんやりとして、霧が掛かつたかのようなその映像は余りはつきりしないので、悠治にはよく解らなかつた。

「そうなの？」

「これだけだから判らないけど、この辺で大きな橋としたら……間違いないとは思つたな」

英一はそこまで考えて、途方に暮れた。

もしさうだとしたら、その辺りを背景にした港ね……

「地図買つて来たら、当たりをつけよう。それに、今日もしかすると、また映像更新して来るかも知れないし、そちらの方も確認しておくよ」

お互いの話がついたところで、悠治、英一はそれぞれお互いの配分を決めて、結論に到る為に動き始めた。

「……」ら辺に見えてるつて事は、川崎か横浜。多摩川の下流付近の

「うが……」

を付けチェックする。

「あの辺りに港なんてあつたか？」

せるしか無い。

「こんなに広いと、何処だか解らないな」

一島つゝ為に舌口一バーの手を伸ばす。

「不愉快だけど、親父に頼むか……」

「警視庁総監やつてゐる……」

苦笑いして、溜め息を漏らした。

「芸能界に向でーるのー。」

悠治は今知らされた事柄にあんぐりと口を開けて驚いた。

「俺、三人兄姉の末っ子でさ……一番上の兄貴は弁護士で、姉貴は検事。そんな中で育つたからあぶれてる訳よ。で、昔から俳優に憧れててさ?この道に入りたかったのさ。姉貴は賛成してくれたんだ

けど、両親はそんなヤクザな仕事を反対してね。勘当状態。だから一人暮らししながら励んで行こうかなとか思つたり……人それぞれだよな?」

確かに、親の反対は当然だらう。悠治はいたたまれない思いを英二に抱いた。

「結構逞しく生きてるのね?」

「でも、これはやはり俺達だけじゃ解決出来そうに無いな……奥の手に、親父に出て来てもらわないといけないかもな?」

その言葉に、悠治は両親に頭を下げる英二の姿を思い浮かべると何だか気の毒な気がした。

「それは、奥の手に取つておくようにしようよ? 何も頭下げるなんてしなくても……」

「しかし、これは立派な誘拐事件だぜ? 犯罪だ。敵がどう思おうと、やはり打つ手は考えておかないとな?」

「でも、奥の手に取つておくのよ! それからでも遅くは無いわ? ねえ~ それより映像の方はどう?」

再びホームページを開く。

「これ、今日の日付けじゃない? 見てみようよ!」

その日付けをクリックすると、立ち並ぶ空きの倉庫の列が露になつてゐる。その内の五番倉庫のシャッターの前に彩華が両手首、両足を結ばれて座らされている。そこで、また映像がストップする。

「あんなに立ち並ぶ倉庫なんて一体何処よ?」

悠治はイライラしながら英二に問いかけるが、解らない。

「この映像だけどな? 人がカメラを持つてゐる訳だらう。で、誰かが悠治を誘導している。少なくとも一人以上の人が関わつてゐる可能性があると言う事だと思わないか?」

「あ、そうね……一体何人がこんな事してるんだろう? 悠治、大丈夫かな……」

悠治自身こいつの画像を見ていると彩華が不憫で仕方ない。ちゃんと御飯は食べさせてもらえてるのか? 脱水症状なんて起して無い

だらうか？だんだん心配になつて来る。

「やはり、これは親父に頼むしか無いかもな。これだけで警察本庁が動くかどうかは解らない。極秘で捜査してもらえるのなら、相手も解らないだらう？こんなガキの騒動に大人を加えるのは些か不満だけどな……」

悠治の事を心配しているのが手に取つて判る。だけど……

「ねえ、私のホームページに行つてみてよ。誰か掲示板に情報入れてくれるかも知れないし？」

情報ね」と英一は思つたが、実際掲示板は大賑わいであつた。リンクとして張つている、あの裏ホームページの映像を、不審に思った者達が集つていた。中には、悠治が誘拐されていると言う事まで感じ取つた者までいる。皆が皆色々な情報を寄せていた。

「彩華？これつて、良い具合に情報拠供してくれる者がいるかも知れないぜ？」

「私もそう思うわ！」

俄然やる気が湧いて来る一人。

「色んな人がこのホームページに目を向けてくれている。きっと、この事件は公になる事だろう……事務所に知られるのは時間の問題だけど。警察に知られると、場所を移動する恐れは有るな……まあ、知らせた訳じやないが、気をつけなければならない」

「でも、これなんかは立派な情報よ？」

「埠頭の名前が書かれてるな……」

「私、そこに足運んでみる。英一はここで待機してて。何か又情報が入つたら、携帯に連絡ちょうどだい！」

悠治は直ぐさま行動を開始する。しかし、その場所に行つてみたは良いが、何の手がかりも得られなかつた。

次の日も次の日も、そのホームページは倉庫の中で、柱に縛られた悠治の姿しか撮られていなかつた。見覚えが有る倉庫ならまだ良いがそう言う訳では無い。だから一人には全く解らない。

どうやら、あの立ち並んだ倉庫の五番倉庫の内部なのである。しかし何も解決する事なく日は過ぎて行く。次から次に情報提供者が彩華のホームページに訪れては書き込みしてくれてはいるが、どれもその倉庫の物では無かった。悠治がひたすら情報の通り動いてはみるが、全く手がかりはない。

そして、この事は、一般人達の中で噂となり伝わっていた。中にはジェイズの悠治のファンまでも訪れるようになつた。

悠治の誘拐事件

そう言う事で、ワイドショ―にも取り上げられるようになつた。悠治も、英一もこの事件を振り払うように行動しはじめる。英一はもう悠治の部屋から外に出る事は無かつた。

マネージャーの野口はそんな事実は無い……と世間に訴えている。悠治は休暇を取つて旅に出ていると発言していた。ファックスでそう告げられていたから当然だつた。それは結構抗力はあるが、ファンは心配だろう。英一に連絡して来た時も、勿論そう言つた。そうしないと、警察が本当に動き始めるであろう。そして、一週間はあつと言う間に来た。時間が足りない。ついにゲームの最終期限が来てしまつたのである。

その日まで悠治は、お地蔵様の所に毎日通つていた。彩華の無事を祈る為であった。もう、入れ替わる事は出来ないとこもこういう形で反抗してみたかった。その反抗が、地蔵に届くかどうか解らないが、彩華の分まで祈りを捧げる。夜に朝に、一度はそこに通う事になつていた。

期限日それは、悠治と英一の神経をすり減らしていた。そして徹夜でその日を迎える。

色々な情報提供者がいてその場所に悠治は時間が許す限り何度も足を運んだ。しかし何も手がかりなく一週間は直ぐに過ぎた。せめて、相手がこんなまどろっこしい事をしなければ、悠治は足をすぐにも向けられるのに……と一人ゴチ、英一にまた情報が入るか

も知れないからと言いおきをし早朝、家を出た。

本当だつたらこの日を最後に入れ替わりが完了しているはずと、この期日をこれほど恨んだ事は無かつた。

でも、足を向けた先、そこには一人の老女がお地蔵様の収まつてゐる祠を掃除している。そしてぱつたり顔を合わせた。

「お前さんかい？」この地蔵にお供物をいつも持つて来るのは？」

見知らぬ老女は、顔中の皺を寄せニコニコと笑い掛けてきた。

「そうです……けど……」

悠治は何故この老女が笑つてゐるのか？その理由が解らなかつた。

「このお地蔵さんは、女性には優しくての？」

「女性に優しい？」

んな事ないぞと言いたいが、老女の手前そんな事は言い出せなかつた。

「知つどるか？」こびりつてこの祠が建てられたか？」

「いえ？」

考えてみれば、そんな事氣にも止めなかつた。そんな事を考へるより、自分自身の事にしか頭は回らなかつた。

「大昔の事じやよ。この場所で一人の女性が恨みを持つて死んだそうじやよ。好いた男に裏切られ、死を選んだとか。好いた男には、他に女がいての。それも有力な力を持つ貴族の女での、もう何も信じられない、男を殺して自分も死のうとした。しかし、道連れにする事叶わぬ死んだのはその女だけだったとか……それからじやよ、ここで自殺者の遺体が一時期数体転がつたのは……男と言う男を連れにする様になつた。だから、供養する為にここに祠が作られた。ま～そう言つ訳じやよ」

そんないわく付きの話がこの地蔵に有つたのか……と初めて聽いた。

「女性に優しい地蔵ですか……」

「そうじやよ？ 拝んでおく事じや。きっとその想いは届くじやうつて？」

そう言つと、見知らぬ老女は掃除を終えてその場を去つた。

悠治はもしそれが本当なら、いつも通り彩華の事を思い祈る事にした。もしかしたら、期限を決めたお地蔵様の言葉が自分にしか聴こえなかつたのは……彩華の期限と言つモノが最初から存在しなかつたのかも知れない。

ならば、こうして罰を受けた自分だけの抗力が有るかも知れない？ 悠治は、そこまで考えて今日中に何とかケリを付けなければならないと考えた。時間は、あと十一時間。悠治は、この勝負に挑む。それが当たりか外れか？ そんな事は解らない。でも一縷の望みを持っていたかった。

そして、一つの案を講じた。もし入れ替れるのなら、至上最高の演出をしてみたいと思いを巡らす。そして、直ぐさま英一の待つマンションへと駆け出したのである。

「彩華！ これを見ろよ！」

「何？」

悠治が帰つて来るなり英一は、悠治をパソコンの前に招く。

「今日付けの映像で、倉庫の端を拡大したら、名前が書かれてあつた」

拡大され、止まつた映像に、微かだが書き込まれている。

「これが最後の手がかりだ！ すぐに出発だ！」

「そうね。でも、英一寝てないでしょ？ 少し休んだ方が良いわ？」

この一週間ずっとこの状態でホームページ観察と、映像に目を見張つていた為、一人の疲労は凄まじかった。

「彩華もな。目の下、隈出来てるぜ？ らしくない」

「私の方は良いの！ メイクすればこんなに消えるんだから。

これは貴重な最後の手がかり。これを突き止めるしか無いわ！」

時間は刻々と過ぎて行く。でも、最後の力だけは温存しなければならない。

「私は、タウンページを片つ端から洗つてみる。もう、使われて無い倉庫だとしても、名前が解れば場所も解るかも知れないからね？」

悠治は、タウンページを一気に調べはじめる。眠いけど、疲れてるけど、望みは最後まで捨てちゃいけない。お地蔵様の事を少し信じてみたい。これは最後の賭けだった。

入れ替わりが叶うか叶わないかの最後の賭け。だから、フロアーに「ゴロンと横になつた英二を見届け、直ぐさま行動を開始したのである。

「有つた！」

タウンページを片つ端から一つ一つ確認して行つた先に、その倉庫に関係有りそうな名前が書かれていた。英二はその悠治の言葉に、飛び起きる。

「何処だ？」

悠治の肩ごしきらそのページの番号を確認するように覗き込んでいる。

「メモつて。番号言いつから……」

英二は直ぐさま近くに有るメモ用紙にその番号を書き留めた。もつ、夕方に近い時間帯だつた。

「電話してみる。もう使われて無いかも知れないけど……ダメもとだ！」

携帯を取り上げると、英二はその番号を打ち込み電話した。この電話が繋がりますようにといふ感じを込めて。

暫くすると、

「判つたぞ！横浜の第二埠頭だ！倉庫は今は使われて無いけれど、事務所はまだ潰れて無かつた。運が良かつた……」

英二は大きく息を吐いた。

「今直ぐ出なくちゃね……あ、そうそう、これだけの事やらかしてくれたんだからさ、犯人には、ちゃんとけじめ付けて貰わないと気が済まないわね～」

悠治は不敵な笑いを浮かべながら、言い放つた。

「彩華？何を企んでるんだ？」

「私達が芸能人として動ける事。証明しておかなければね～さて、電

話するから！」

悠治は直ぐさま携帯を取り上げ何処かに電話をかけはじめる。そして、車を使う為に、英一の事務所に行くと言い始めた。

「英一を乗せて行くくらいはできるじゃ無い？このくらいこはせてもらうわね。野口さんには適当に繕つておくから！」

何かを企んでいるようだが、英一にはその真相は解らない。テレビ局を動かすつもりなのは解る。が、その時、どう行動するといふんだろう？

「一Jの時間からだと、着くのは深夜になるわね～ふふふ～」
悪意とも言える不敵な笑いが溢れている。ブツツン切れてしまつて
いるんじや無かるつか？とさえ思い、英一は一瞬彩華が恐く感じられたが、

「少しJで待つて。車回して来るから」

言うや否やメイクを施し、礼子の姿に変装し始め、ドアを開けて走り出た。英一は呆気にとられて、ただ視線の外に彩華を送りだしたのである。

一時間後、悠治は車を携えて帰つて來た。

「野口さんには、口裏合わせておいた。悠治を捜しに行くから、車貸して下さいと言つておいたわ」

手回しが良い彩華に、

「捜しに行くね……失綜したのは悠治にひとつマイナスだけど、まあ、今はこれで良いか……」

相槌を打つて、英一は運転する悠治の助手席に乗り込んだ。

「第一埠頭までのナビゲーションは宜しくねー」

「あ、もちろんさ」

そんなナビゲーターの英一の言葉以外は、他に話す事が無かつた。始めの内は、一人とも黙まり込んでいたが、渋滞する首都高に乗つた頃には、悠治が今の状況を和らげるようになつて英一に話し掛けた。

今までの、このゲームの意図を、英一に話そとそつ心に決めたからである。

「私ね、このゲームを始めたきっかけは、悠治に私の気持ちを知つて貰いたかったからだったの」「？」

「あいつってさ、莫迦がつくくらい鈍感でしょ？私の気持ちなんか分かつて無かつたのよ」

「それって、彩華は悠治が好きだつた。てことか？」

「英一には彩華が言いたい事をすぐに理解した。

「俺の勘は正しかつたつてことか……不思議だつたんだ。でも、悠治も彩華のこと好きなんじや無いか？俺の勘は結構良い方だけど？」

その言葉に、悠治は苦笑いした。

「悠治にはもう好きな人がいるのよ。そして、今の私にも好きな子がいる」

「彩華が好きな『子』？子つて……」

「それはいくら英一であつても言えないけどね？企業秘密だから」

悠治は、英一が疑問に思つている事が分かつて無かつた。『子』と言つ響きに疑問を感じてゐるなんてことに……

悠治が奈々子の事に考えを巡らせていて、思わず口をついて出た言葉だった。

「ふーん。で、その事で今は心変わりしていろつて事なんだな？」

「ま、そう言う事ね～だから、英一は安心して良いのよ？」

「悠治が好きな人つてのは？一体誰なんだ？」

「それも企業秘密。大どんでん返しつてのは、最後の最後にとつておくモノでしょ？違う？」

英一には、悠治のその言葉が解らなかつた。でも、何だか今までのわだかまりが消えている事に気付き、

「嫉妬するのは、何だか自分が醜くて嫌だつたけど……いつもして、彩華に話してもらえてスッキリした氣分だよ」

しがらみが、複雑に絡まりあつた糸が……スルスルとほざける。そ

んな感じがした。

「また一つ予言してあげるわ。あなたの恋はちゃんと叶つて事……でも、それを受け止める事ができるかどうかはすべて英一次第だつてことだからね……助言は以上よ」

悠治は、英一を見て笑っていた。彩華と悠治が今まで仲良くやつて来れたのが、今の英一には判つた。こんなにお互いを尊重しているならば、全く異なつた性格の二人でも上手くやつて来れたのだと。「さて、もう十時ね。後一時間有れば辿り着くわね？見てらっしゃい。」の怒りは百倍にして返してあげるから！

悠治は話を切り替えた。車の時計が田に入つたのである。後は、目的を達成するのは時間の問題。全ては当地に着いてからだ。そつ思ひと、悠治の中の血がかなりの勢いで流れ始めていたのである。

#19 決着・乱闘・入れ替わり

「着いたわね……」

確かに、映像と同じ倉庫の立ち並ぶ場所。辺りに灯りが無いが、そうだとはつきり分かつた。二人は、その中の五番倉庫へと車から下りると向つた。

静かすぎるその倉庫までの道のり。生きた心地がしないほど、鼓動が脈打つ。

閉ざされている倉庫のシャッターを『ガラガラ』と押し上げると、オイル缶の奥にライトが灯つている場所が有つた。

薄ボンヤリだが、そこに彩華が縛り付けられている。悠治と英二はスタスタと中に入り込んだ。

「私が彩華よ！このゲームを誘拐事件にまで発展させるなんて、私自身の価値を何だと思っているのかしら？」

人影の無いその場所に足を向けると、悠治は周りに潜んでいるどう敵に大声で問いかけた。

そして礼子の姿を暴露するかのように、ウイッグを投げ捨てた。すると一人のオタクっぽくてヒヨロヒヨロした人物が姿を現した。手には、ハンディーカメラを携えている。この騒動をきちんと撮り逃さないようにと思っているらしい。その十メートル先に彩華がグツタリとして紐で柱に縛り付けられていた。

「こんな奴に誘拐されたの？ 悠治……」

これくらいなら、いくら力が無い彩華でも罠には落ちないだろうと考えると、呆れてしまった。しかし、その悠治の奥に五人ほど男がナイフや、鉄の棒、チェーンを片手にシャキシャキと出し入れしながら現れたのである。

「なるほどね……『イシラなら納得出来るわ』

まだ未成年であろう？悪意の有る顔つきをした連中が悠治の前に足

を運んできた。彩華は、縛られた手足と、口にかまされている布で返事出来ないので、縦に首を振つて肯定の意志を示す。どうやらこの連中には逆らえないのだろう。彩華には……と思つていると、連中の一人が、そんな彩華の腹を蹴りあげる。

「何するのさ！この莫迦野郎！」

悠治は、今彩華にした行為を非難した。が、相手は気に止める様子は無い。そして、本題。と言つように話し始めた。

「さて、彩華？ここまで来たんだ。悠治を助けたかつたら、俺達に従うんだな？」

と、うめき声をあげている彩華の顎をしゃくり上げて、首元に一本のナイフを突き付ける。

「武器が無いと喧嘩も出来ない軟弱者なのね～男として情けないんじゃない？」

悠治の怒りはマックスに達し始めていた。

「ゲームのルールにそんな事は無かつたよな？」

また一人がこれ見よがしに言つてのけた。

「肩にそんな事言われたく無いわね～」

いちいち勘に触る事を言つてくれるなと思い、悠治は憤つたが、

「彩華？少し落ち着けよ……」

英二が、悠治の肩に手を乗せて來た。こちらからどう言おうと、ただ単に相手を刺激させるだけだと思つてゐるらしい。

「そつちにいるのは、英二かい？ボディーガードのつもりでついて來たのかも知れないが、お前に俺達が止められるかね？」

また一人が話し掛ける。

「いいから、一人でこっちに来い！」

悠治は、限界に達していた。そして、その言葉を受け入れようとした時、

「彩華！」

英二は、良案が有るという風に悠治を引き止めると、耳許で囁いた。

「……分かったわ。任せて！」

悠治は、その言葉を受け入れ、今度は軽やかに足を踏み出す。

「今は、悠治は関係ないでしょ？私に用が有るんだつたら、あんた達がこっちに来なさいよ～恐くて近寄れない？」

この言葉には、五人も力チンと来たらしい。悠治と彩華の距離の半分まで悠治を取り巻くように進んで来た。

「で、誰が私の恋人になりたいって思つてている訳？」

悠治は、あつけらかんと言つた。その言葉に、五人はお互に視線を泳がせていた。五人はそこまで考へていなかつたようだつた。

そんな時、『ピーッ』と英一の指笛が鳴り響く。

それを合図に、悠治は一番手近にいる者のナイフを持った手を踵落としで叩き落とす。そして、御丁寧にペンを取り出し、『×』をその者に書き込むと、転げ落ちたナイフを取り上げ、彩華が縛り付けられている柱に向い走るとロープを切り解放した。

英一は、彩華が動くと同時に、駆け出し、鉄の棒を持つてゐる一人の男に背負い投げを掛けると、その男は受け身も出来ず、ドスンという大きな音を立て転がる。それと同時にカラカラと鉄の棒は転がつて行つた。

「体育の柔道が役に立つ事があるなんて思わなかつたぜ？」

まさか、こんな乱闘騒ぎに自分自身加担するとは思わなかつたが、流石に武器を持っている者と彩華一人では対処は出来ないだろう。

「悠治」めん～ドジつちゃつたよ～もう私お腹ペコペこ～

猿ぐつわされてた布を取り外すと同時に、彩華はボゾボソと話しだす。

「良いよ。もう黙つてな？この酔いはちゃんと、僕受ける心構え出來てるんだから……」

辺りは騒然としているから一人の会話など気にしてはいない。彩華は力無く、そこに蹲る状態で座り込んでいたままだつた。

そんな彩華のポケットに奈々子の家の鍵を滑り込ませる。

そんな時、ざわめきと大勢の足音が鳴り響いて來た。そして倉庫の外から急にライトで照らし出されたのである。

『「こじがそつなのでしょつか～？」』

一人の男がマイクを持つて、実況放送を始めた。その後を追い掛け
るかのように、ライトの下カメラが数台入り込んで来る。

「さて、やつとお出ましか～？んじゃま、彩華としてのワーストの仕
事して来るか！」

悠治は口走るといきなり立ち上がり、残りの男共の方に走り出す。
まだ四人。顔に『×』を付けていない。英一は猛然と健闘している
が、このゲームは彩華のゲームだ。だから、その仕事を取られまい
と駆け込んだ。

「ちよいとお兄さん？私はこっちよ？」

肩に手を掛けると、ナイフを握りしめたその右腕を捻りあげる。護
身用の決め技であった。

「この腕、一生使い物にならないよ！」してあげよつかしら？
こぼれ落ちるナイフを倉庫の端に蹴り飛ばすと、締め技に入る。
「いっつー！」

悲鳴をあげる男に、

「ここのくらーい我慢出来なくちゃね～酔いはちやんと抜ける仕組みな
の、この世の中は！」

そして、体落としをかます。相手が伸びたところで、顔に『×』を
書く。

後三人！

「英一！後はこっちに任せで！」

彩華は叫ぶと、英一は、

「恨みはこっちも同じだ！いらん気は回すなよな！」

今まで我慢していたモノを吐き出すとでも言ひたげに、英一は相手
を殴り倒している。

『これは凄い！彩華のゲーム最終日！これを見逃す事など出来ませ
ん！テレビの前の皆様～今直ぐチャンネルはこのままでいて下さい
！』

生放送？英一は彩華の魂胆がここで分かつた。ならば、トロトロンや

つてやるつじや無いかと立ち回る。

「ほい！彩華～こつちは片付いてるぜー！」

一人の男を悠治の前に放り出す。悠治は、

「お生憎様だつたわね～」

また一人『×』を付ける。

残り一人。

英二と、悠治は一手に分かれ相手を始める。

『何ど、ここに英二が居ます！どう言つ事なのでしょうか？そう言えば、ここ一週間、ジェイズの活動が無かつたのは、この彩華と関係があつたのでしょうか？おや？あそこには、悠治のようですね！』

カメラはズームで悠治を映し出していた。

『何だかやつれています！大丈夫なのでしょうか？あつと、今ナイフを持った青年が彩華に飛びかかりました！』

実況中継は悠治の思惑通り進められている。まるで、悠治が主役とでも言わんばかりであった。

その頃の奈々子は、深夜のその番組に釘付けだつた。ニュース速報で、彩華の騒動が生放送されると知らされてチャンネルを変えたとたん、この騒動が映し出されていた。

「彩華……またこんな無茶して！」

心配で、でも心はドキドキと鳴っている。やはり、彩華に惹かれている自分に気付く。

明日、約束の日が来る。生徒手帳の中はまだ開封して無い。何があるのか？知りたいけど、約束は約束だ。だから、絶対に見ない。

「彩華！頑張って！」

奈々子はナナを膝に乗せ観戦していた。

この日のこのチャンネルの視聴率は、『ゴールデンタイムの視聴率を上回っていたのである。

「彩華！こつちは片付いたぞ！」

立ち回っていた相手の意識が失せたところで英一は納得したのであらう。身柄を彩華に渡そうとした。しかし、彩華の方は苦戦していた。何年も前に無くなつたであろうと思われる、チヨーンの武器を振り回され、彩華は相手との距離を縮める事が出来ずにいたのである。

懐に入り込めない。どうにかしてあのチヨーンを止めなければ！何か方法が無いか考えていると、悠治の両の端に鉄の棒が目に入った。これを使うか？滑り込んで棒を取り上げると、ぐるぐる回つているチヨーンに放り投げる。すると、上手く絡まり、もうそのチヨーンの抗力は失せ果てた。

「さようなら！つと

怯んで拳を振り上げている相手に悠治は、瞬発力を生かし懐に入るとい、鳩尾に一発当て身を食らわせた。

「ぐほつ！」

相手は海老のように背中を折り曲げそこに崩れ落ちる。

「喧嘩は道具で片を付けるんじや無いわよ！やるなら素手にしどきな。時代が違うのよ？」

滑り込んで汚れた衣服を叩きながら悠治は、中指を立てていた。

こうして、残り一人の顔に落ち着いて『×』を書きこみこの騒動は一件落着したのであった。

『御覧下さい！彩華が勝ちました！手許の時間はまだ十一時五十八分です。このままゲームは終わりなのでしょうか！』

アナウンサーは、報道を続けていた。何の真相も掴めずにはこの状態をただのゲームだと知らしているのは、問題だが……

そんな時、その報道陣をかき分け、ゾロゾロと警察が入つて來た。その様子を悠治が気付き英一のもとに駆け寄つた。

「遅いぞ。親父……」

英一がそんな事を咳いていた。

「いつ、知らせたの？」

「彩華が、車を取りに言つてた時にな。もしもの時の事を考えてね……実際、怪我人てる事だしな？」

周りを見渡す。確かに怪我人が出ている。大した怪我とは言えないけれども怪我人は怪我人だ。

「悠治ん所行かないと……」

英一には柱に背を持たせかけて、座り込んでいる悠治が目に入った。今直ぐ駆け出そうとしている英一に、

「あ、その前に……」

時間は、五十九分。最後の最後にとつておいた時間を使う氣に悠治はなつっていたのである。これも、何かの因縁だろう？　こういう事になつて、もう入れ替わりが出来るかどうかなんて解らない。でも、賭けてみようとそう思った。もし、入れ替れなくても……

そんな中、報道陣のカメラはこちらを映していたり、警察の方に気を張つていたり右往左往している。今が最高のチャンスだった。

「悠治の事は心配無いから！それより英一。大事な事を言わなきやならないの。ちょっと耳貸して……」

悠治は、頭一つ大きい英一に少し屈んでもらつた。そして、不意を付き、「！」

見事に悠治は、彩華の身体で英一にキスをお見舞いした。

その行為に英一は何が起こったのか解らず固まつてしまつた。

時刻は八月一日午前零時。

そして、脳天に今彩華にキスされている事に気が付いた英一は、それを押し退けた。

「な……何を！」

英一は真っ赤になつて何を口走つて良いものやら解らなかつた。

「ん?……あれ? 英一! どうしたの?」

「どうしたのじゃ無い!」

「何怒つてるのさ? あれ? それより、僕に何してるんだりう? さつきまで柱に縛り付けられて……お腹蹴られて、彩華に助けられて……」

彩華は、自分が今までされていた事を思い出していた。

「何言つているんだ? おい! しつかりしろよ? 彩華?」

「彩華? 何言つているの? 僕、悠治だよ?」

彩華はまだ氣付いて無かつた。自分が悠治と入れ替わつた事を。

「? ……もしかして……お前本当に悠治なのか?」

英一は、混乱した頭を整理しよつとしていた。

「悠治だよ~何、莫迦な事を……」

と、自分の手を見る。

「あれ? 僕の手こんなに細かつたつけ? それにこの服……」

彩華は、驚いたかのように、自分の顔を手で触つていた。悠治としての顔とは全く別人のような手触りを感じ、

「英一? 僕……もしかして彩華になつてゐ?」

それに対して、頷いてみせる英一。

「やつた! 戻つたんだ~!」

突然跳ねながら喜びを隠しきれない様子の彩華に、

「戻つた?」

「話せば凄く長くなるんだけど……あ、その前に、告白の件。あれ、僕……あ、ううん、私であつてもちゃんと好きでいてくれる? 私はずつと英一の事が好きだったの!」

思いきり良く、ハッキリと彩華は告白した。そして、その返事を待つた。

「それは……ちょっと待つてくれ? 今、頭が混乱して……」

どう接すればいいのか? 悠治が本当は彩華で、今まで悩んでいた事が全て洗い流されて。白紙の状態のその心に、迷いが有る。

だからジッと彩華の顔を見詰めたまま硬直していた。そんな意味ありげに向い合っている二人に、突然カメラが近づいて来た。

『突撃インタビューです！いつから英一さんと彩華さんは出来上がつてたんですか？』

辺りの騒動の中、この様子を捉えていたカメラとアナウンサーが取り囲んだ。

「あ！これ全て、テレビに撮られてる！」

英一は、真っ白な頭の中が現実の世界に向けられ、よけい混乱してカメラの前に手を差し出して抵抗した。が、もうその現場は撮られてしまつたのだ。

英一は喜んで良いのか？それとも、嘆いて良いのか判らなかつた。でも、今まで、予言として悠治である彩華から言われて來た事を鑑みると、なるほど。こういう事だつたのかと理解がやつと出来た。そして、見事に一芝居打つた頭の回転の早い悠治に少し感謝した。これから先どうなるか解らないそんな状況下で。

当の悠治は、他の怪我人と一緒に救急車で運ばれた。一週間の彩華の苦痛が身体にしみ渡っている。これも、仕方ない事だと思いながら病院のベッドに横になった。今夜はこのまま入院。脱水症状で身体が上手く動かないからであつた。

理由はどうあれ、駆け付けた両親にはこつひどく叱られ、マネージャーの野口には、ここ一週間旅についていた事の理由を問いただされ、良い事など無かつた。

けれど、今頃彩華と英一も問いただされているんだろうなと思つて少ししたり顔をした。

幸せになるのだったら、それ相応の代価を払わなきゃね？それに関しては、自分自身も然りである。

そんなベッドの中で、悠治は、彩華のポケットの中に滑り込ませた鍵を取り出すと、横になつてそれをマジマジと見つめる。入れ替わりが成功した。これで、悩みはもう無い。

「あ～今日は退院出来るんだろつか？」

日付けの変わった今、眠れずにする自分に気が付き今日、奈々子の所に行かなきゃならないと言つ事を思い返していた。

「寝なきやな」

疲れが蓄積されていいるその身体をベッドに落とす。そして、深い眠りが悠治を誘つた。

次の朝のスポーツ新聞。臨時の雑誌は一気に売れた。そして、テレビニュースの芸能界の話題は彩華の騒動で、英一と彩華が実は『出来ていた』と言う見出しが後を立たなかつた。

大人から子供まで、その話題は尽きず、一日が過ぎ去る。

実際、英一も彩華も否定しなかつた。これから先、どうなる二人なのか？それはこれから問題だが、取り敢えず悠治はその事に安堵

を覚えていた。それから退院した足で、直ぐに奈々子の元に走つたのである。

奈々子は、朝からテレビを点けっぱなしであった。この騒動の裏に、悠治の誘拐事件が絡んでいたと知るのも時間の問題だつた。そして、今日解禁出来る生徒手帳を、鍵を掛けてしまつておいた引き出しから取り出すと、ベッドに腰を掛けてその最後のページを見開いたのである。

『前略。奈々子様。うーん。話せばとてもなく長い事になるし、今の時点で本当の事はまだ言えないんだけど、とにかく一ヶ月後のゲームが終わつたら全て片が付くので、その時になつたら逢いに行きます。逢つて驚くとは思うんだけど、まだ本当の事話して無い事あつて……それを話さなければならなくなつて思つてる。奈々子が良ければ、こんな奴だけど、友人になつてもらえると嬉しいなつて思つ。奈々子以外の女の子に友人がいなかつて……それがこれから的人生のスタートになる。そんな自分を前向きに考えて行きたいから手助けして欲しい。それじゃ……一ヶ月後。悠治拝』

奈々子は最後の行に有る悠治と言つ名前に驚きを隠しきれなかつた。が、思い当たる節はいくらでもあつた。

彩華が悠治であつたら、説明が付く事。そしてジェイズが絡んでいた事。

詳しく述べて彩華がここに来て説明してくれなければ確實に理解をする事は出来ない。でも、彩華が悠治だつたら？英一を恋敵としていても不思議では無い。そして、好きだと言つていた相手は多分悠治である彩華だつたのであろう。魂が入れ替わつていた？それがどうしてそんな事になつていたのか……そんな事は考え付かないが、漠然と理解した。そして、またテレビに釘付けになる。

この騒動で、彩華は芸能界を引退する表明を出した。この人が本当

は悠治だつたのか？だから、あの時……『美空学園』に出現した時、あんなに怒つっていたんだと想像した。

そして、悠治が病院から抜け出したと言う報道がなされた。

「彩華…………うん、終治はもしかして……？」

奈々子があんな身体でここに来るなんてあり得ないと思っていた時、玄関のチャイムが鳴った。

「！」

胸がドキドキと跳ね上がりそうなくらい緊張した。そして、

裏返り、そんな声を落ち着かせようとして、奈々子は玄関のドアを開

二十九

そこに顔を出したのは、まさかの悠治だった。奈々子は田を見開い

「あ、やうやく。」
「おまえの隠すところが見つかったぞ。」
悠

治?」

赤く染まる太陽の光が 懇意の姿を映し出す
「ハニ」 夕方

脱走して来た病院。まだ動ける身体じゃ無いけれど、約束したのだ

から黒たさな毛色。

その腰帯を脱ぐがいい。ああ、アーヴィング。

「生徒手帳見たんだね？」

テレビの中の甘い整った顔がゆっくりと微笑む。

「うん、見た。驚いたよ。でも、眞実は解らないけど嬉しかつた！」

「勿論よ！彩華の……悠治の性格は良く分かっているから！そう言ってくれて、あたしも嬉しい！」二郎がなんだから、中に入つて。

話を聞かせてよ?」

奈々子は微笑んで悠治を中に誘い入れた。これから訊く事は、きっと誰にも想像出来ない不思議な話。それがどんな事でも、悠治から聽かされる事を素直に訊き入れられる。そんな予感……

「ナナは？」

「今は寝てるよ」

遠くで風鈴が鳴っている。夏はまだまだこれから。そして、一人が歩き始める道もこれから……

「私、彩華の……悠治の性格大好きだよ？」

いつだって相手に信じて貰える。それが、一番の特効薬。悠治と彩華の話はこれからもまだまだ続いて行く。

そう。この四人の物語は始まつたばかりなのだから。

FIN -

終わりました。

本当にハチャメチャですが、色々な想いの交錯と、行動の果てに有る物が描けて楽しかつたです。

今思えば、彩華も悠治も主人公だつたんですが、悠治（彩華の中の魂）の方の思い入れが高かつた気がします。

女性のあたしにとって、男性側からの意識つて難しい視点でしたが、こんなキャラクター居たら楽しいかな？何て思いながら描いた作品でした。

また機会があればこういうハチャメチャなの挑戦してみたいな次回は、ちょっとシリアス物を投稿していきたいです。

基本シリアス書きなので^ ^ ;

此処までお付き合い頂きありがとうございましたm(- -) m
皆さん的心に何かが残れば幸いです。
楽しい恋して生きていけば良いですねv
では、またお会いしましょうv v

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7793c/>

AYAKA

2010年10月9日11時39分発行